

2026 年 5 月

# 食料安全保障月報 (第 59 号)



令和 8 年 5 月 29 日

**農林水産省**

# 食料安全保障月報について

## 1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

## 2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

## 3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報(生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等)について重点的に記載しています。

## 4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

# 2026年5月食料安全保障月報(第59号)

## 目次

### 概要編

I 2026年5月の主な動き	1
II 2026年5月の穀物等の国際価格の動向	4
III 2026/27年度の穀物需給(予測)のポイント	4
IV 2026/27年度の油糧種子需給(予測)のポイント	4
V 今月の注目情報「米国とブラジルの輸出競争」	5

### (資料)

1-1~3 穀物等の主要輸出国の生産量(過去10年平均との増減比較)	11
1-4 穀物等の国際価格の動向	14
1-5 サプライチェーン等に関する状況	15
2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	16
3 穀物等の期末在庫率の推移(穀物全体、品目別)	17
4 加工食品の主な輸入原材料(穀物等を除く)の状況	19
5 食品小売価格の動向	23
6 海外の畜産物の需給動向(alic提供)	24
7 FAO食料価格指数	25

### 品目別需給編

I 穀物	
1 小麦	1
<米国> 2026/27年度の実産量は前年度から21.3%減少する見込み	
<カナダ> 2026/27年度の実産量は前年度から12.4%減少する見込み(AAFC)	
<豪州> 2026/27年度の実産量は前年度から16.7%減少する見込み(USDA)	
<EU27> 2026/27年度の実産量は前年度から5.6%減少する見込み(EC)	
<ロシア> 2026/27年度の実産量は前年度から4.8%減少する見込み	
<ウクライナ> 2026/27年度の実産量は前年度から4.6%減少する見込み	
<中国> 2026/27年度の実産量は前年度から0.7%増加する見込み	
2 とうもろこし	9
<米国> 2026/27年度の実産量は、前年度から6.0%減少する見込み	
<ブラジル> 2026/27年度の実産量は、前年度から3.0%増加する見込み	
<アルゼンチン> 2026/27年度の実産量は、前年度から6.8%減少する見込み	
<ウクライナ> 2026/27年度の実産量は、前年度から2.9%減少する見込み	
<中国> 2026/27年度の実産量は、前年度から1.9%増加する見込み	

3 コメ	1 5
<タイ>	2026/27 年度の生産量は、前年度から 1.9%減少する見込み
<米国>	2026/27 年度の生産量は、前年度から 15.2%減少する見込み
<中国>	2026/27 年度の生産量は、前年度から 0.5%増加する見込み
<インド>	2026/27 年度の生産量は、前年度から 1.3%減少する見込み
<ベトナム>	2026/27 年度の生産量は、前年度から 0.4%減少する見込み
II 油糧種子	
大豆	2 1
<米国>	2026/27 年度の生産量は前年度から 4.1%増加する見込み
<ブラジル>	2026/27 年度の生産量は前年度から 3.3%増加する見込み
<カナダ>	2026/27 年度の生産量は前年度から 10.4%増加する見込み (AAFC)
<中国>	2026/27 年度の生産量は前年度から 0.5%増加する見込み
<アルゼンチン>	2026/27 年度の生産量は前年度から 4.2%増加する見込み
(参考1)本レポートに使用されている各国の市場年度について(2026/27 年度)	2 7
(参考2)単位換算表	2 8
(参考3)クローпкаレンダー	2 9

## 研究報告

世界の食料需給の動向と中長期的な見通し(世界食料需給モデルによる 2035 年の世界食料需給の見通し)

表紙写真:ブラジルのマツト・グロッソ州のとうもろこし。作柄は良好である。  
(撮影日:2026 年5月9日)

(概要編)

## I 2026年5月の主な動き

### 主要穀物等の生産量等について

5月の米国農務省(USDA)の需給報告によれば、2026/27年度の各品目の生産量等の状況は以下のとおり。

小麦の生産量は、前年度から、トルコ、モロッコ、インド、イラン、シリア等で増加するものの、米国、EU、アルゼンチン、豪州、カナダ、カザフスタン、ロシア等で減少し、世界全体の生産量は前年度から24.8百万トン減の819.1百万トンとなる見通し。

とうもろこしの生産量は、前年度から、中国、ブラジル等で増加するものの、米国、アルゼンチン等で減少し、世界全体の生産量は前年度から17.3百万トン減の1,295.4百万トンとなる見通し。

大豆の生産量は、前年度から、ブラジル、米国、アルゼンチン等で増加し、世界全体の生産量は前年度から13.9百万トン増の441.5百万トンと史上最高となる見通し。

期末在庫量は、小麦、とうもろこし及び大豆とも前年度から減少となっている。消費需要は引き続き旺盛であり、注視が必要。

FAO(国連食糧農業機関)が公表した4月の食料価格指数(最新値)については、植物油、肉類及び穀物の価格指数が上昇したことにより、3月の128.6から130.7と上昇(参考:2025年4月128.2)。

海上運賃については、バルチック海運指数(穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数)が、4月末時点2,686(3月末時点1,995、2025年平均値1,682)。



写真:ウクライナ・ドニプロペトロウスク州の冬小麦への追肥の様子。

撮影日:2026年5月8日



写真:ロシア・ロストフ州のなたね。同州では前年に比べなたねの作付けが増加している。

撮影日:2026年4月30日

## ウクライナの生産・輸出動向

5月のUSDAの需給報告によれば、2026/27年度のウクライナの小麦の生産量は、単収が増加するものの、収穫面積が減少することを受け、前年度から5%減少し2,300万トンとなる見込み。また、輸出量は、前年度から4%増加し1,300万トンとなる見込み。

2026/27年度のとうもろこしの生産量は、単収が増加するものの、収穫面積が減少することを受け、前年度から3%減少し3,000万トンとなる見込み。また、輸出量は、前年度から5%増加し2,300万トンとなる見込み。

現地情報会社によれば、4月末現在、2026/27年度の冬小麦の作柄は概ね良好。また、ウクライナ経済・環境・農業省によれば、5月11日現在、2026/27年度の春小麦の作付面積は17.9万ヘクタールで作付進捗率は96%。とうもろこしの作付面積は、240.2万ヘクタールで作付進捗率は54%。

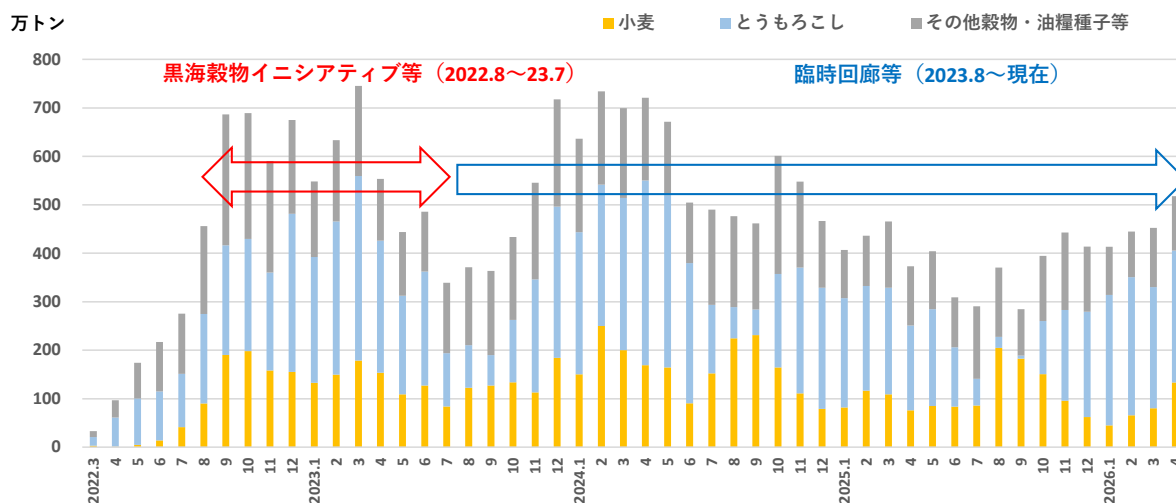
ウクライナ国家統計局の4月24日の発表によれば、2025/26年度の小麦の生産量は、前年度から3.6%増の2,334万トン。2025/26年度のとうもろこしの生産量は、前年度から14.6%増の3,088万トン。

## 臨時回廊からの輸出状況

2022年7月22日の国連、ウクライナ、ロシア及びトルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意(黒海穀物イニシアティブ)により、同年8月以降、オデーサ港等3港からの輸出が再開したが、2023年7月17日にロシアが同イニシアティブからの離脱を表明し、輸出が停止した。

黒海穀物イニシアティブの停止後、ウクライナは、ルーマニア・ブルガリアの黒海沿岸を通過する新ルート「臨時回廊」を国際海事機関(IMO)に通報し、2023年8月以降、運用が開始された。現在、臨時回廊のほか、運河等を利用し、ルーマニアのコンスタンツァ港などを経由した輸出等が行われているものの、ロシアによるウクライナの港湾インフラ等に対する攻撃が続いており、引き続き輸出動向について注視が必要。

## (参考) ウクライナの輸出量の推移(月毎)(2022年3月~2026年4月)



出典:ウクライナ経済・環境・農業省、ウクライナ穀物協会のデータをもとに農林水産省で作成  
注:データは港湾、鉄道、陸路などすべての輸出の計

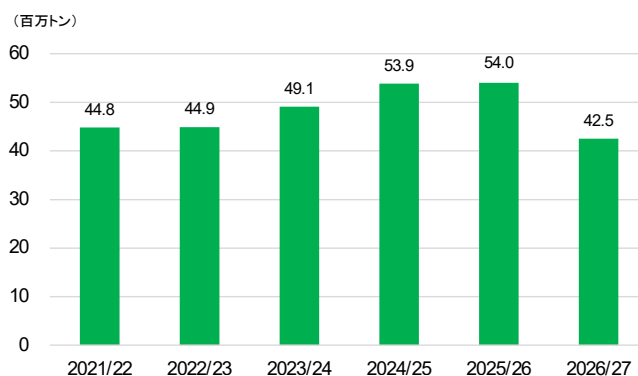
## 1 米国:2026/27 年度の小麦生産量は 1972/73 年度以来の低水準となる見込み

USDAによれば、2026/27年度の米国的小麦生産量は、前年度から21%減、過去5年平均からは14%減の42.5百万トンとなり1972/73年度(42.1百万トン)以来の低水準となる見込み(図1)。これは、収穫面積が前年度から12%減、過去5年平均から11%減の13.3百万ヘクタールとなるとともに、単収も前年度から11%減、過去5年平均から2%減の3.19トン/ヘクタールとなることによる。

冬小麦の生産量は、前年度から25%減となり1965/66年度以来の低水準となる見込み。作付面積の減少に加え、広範囲にわたる深刻な乾燥により単収も減少し、特にハード・レッド・ウィンターの生産量は前年度から36%減と大きな影響を受けている。

デュラム小麦及びその他の春小麦の生産量も前年度から12%減となる見込み。

図1:米国の小麦生産量の推移



出典:USDA「PS&D」(2026.5.12)をもとに農林水産省で作成

## 2 カナダ:2026/27 年度のなたね生産量は前年度から変更はないものの、5年平均から20%増加する見込み

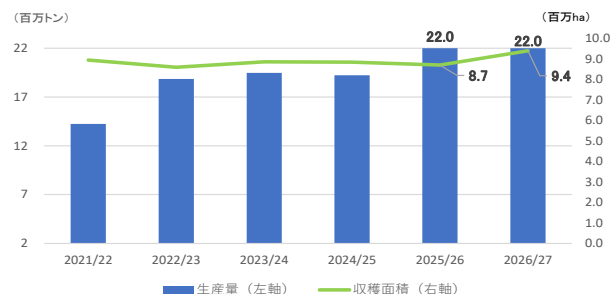
USDA「World Agricultural Production」(2026.5.12)によれば、2026/27年度のカナダのなたね生産量は、前年度同、過去5年平均から20%増の22.0百万トンと見込んでいます。収穫面積は、前年度から8%増、過去5年平均から7%増の9.4百万ヘクタールとなる見込み。単収は、前年度からは7.5%減となるものの、過去5年平均からは9%増の2.34トン/ヘクタールとなる見込み。

カナダ統計局「Principal field crop areas, 2026」(2026.3.5)によれば、なたねの作付意向面積は、前年度に比べ1.0%増と見込まれ、増加率が最も大きいのがマニトバ州(4.7%)、次にアルバータ州(0.7%)、サスカチュワン州(0.5%)となっている。

他の作物に比べ収益性が高まっていること、市場アクセスの拡大、米国におけるバイオ燃料原料としての需要が堅調であること及び国内における搾油能力の拡大が、今春の作付け判断に影響を与える要因として挙げられている。作付作業は既に開始されているが、プレーリー地方の低温と過剰な土壌水分により、やや遅れ気味で不均一なスタートとなっている。

春の作付けシーズンを目前に控え、干ばつの状況は改善しており、3月の「カナダ干ばつモニター」が示すように、農地の32%が「異常乾燥(D0)」又は「中程度から深刻な干ばつ(D1~D2)」に分類されており、今年初めの60%から減少している。寒く雪の多い冬と早春により、オンタリオ州及びプレーリー地方の大部分では平年を上回る降水量となっているが、アルバータ州南部やサスカチュワン州南西部の一部地域では依然として乾燥が続いている。なたねは通常、5月に作付けされ、8月下旬から10月にかけて収穫される。

図2:カナダのなたねの生産量及び収穫面積の推移



出典:USDA「PS&D」(2026.5.12)をもとに農林水産省で作成

## II 2026年5月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、4月末、220ドル/トン台後半で推移。5月に入り、米国の降雨等を受け220ドル/トン台前半まで下落したものの、米国農務省需給報告で2026/27年度の小麦生産量が減少するとの見通し等を受け240ドル/トン台半ばまで上昇した。その後、米中首脳会談で穀物等に関する合意発表がなかったこと等を受け下落し、5月中旬現在、230ドル/トン台後半で推移。

とうもろこしは、4月末、180ドル/トン台前半で推移。5月に入り、原油高や米国の作付遅延懸念等を受け180ドル/トン台半ばまで上昇したものの、原油価格の下落等を受け170ドル/トン台後半まで下落した。その後、小麦価格の上昇等を受け180ドル/トン台半ばまで上昇したものの、米中首脳会談で穀物等に関する合意発表がなかったこと等を受け下落し、5月中旬現在、170ドル/トン台後半で推移。

コメは、4月末、400ドル/トン台半ばで推移。5月に入り、中東での紛争による燃料費の高騰等を受け大きく上昇し、5月中旬現在、450ドル/トン台前半で推移。

大豆は、4月末、430ドル/トン台半ばで推移。5月に入り、原油価格の上昇等を受け440ドル/トン半ばまで上昇したものの、原油価格の下落等を受け430ドル/トン台前半まで下落した。その後、米国農務省需給報告で2026/27年度の米国の期末在庫量が市場予測を下回ったこと等を受け440ドル/トン台半ばまで上昇したものの、米中首脳会談で穀物等に関する合意発表がなかったこと等を受け下落し、5月中旬現在、430ドル/トン台前半で推移。

(注)小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場(期近物)、コメはタイ国家貿易委員会価格

## III 2026/27年度の穀物需給(予測)のポイント

5月のUSDAの需給報告によれば、2026/27年度の世界の穀物全体の生産量は、小麦、とうもろこし、コメは減少し、穀物全体でも減少となり、前年度から1.6%減の29.46億トン。

消費量は、とうもろこし、コメは増加、小麦は減少し、穀物全体では増加となり、前年度から0.4%増の29.73億トンと、生産量が消費量を下回る見込み。

貿易量は、コメは増加、小麦、とうもろこしは減少し、穀物全体では減少となり、前年度から3.9%減の5.24億トン。

期末在庫量は、7.77億トンと前年度から減少し、期末在庫率も前年度を下回り26.1%となる見込み(P16資料2参照)。

(注:数値は5月のUSDA「PS&D」による)

## IV 2026/27年度の油糧種子需給(予測)のポイント

5月のUSDAの需給報告によれば、2026/27年度の油糧種子全体の生産量は、前年度を上回り7.18億トン。消費量も前年度を上回り7.15億トンとなり、前年度に引き続き、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫量は、前年度から増加するものの、期末在庫率は前年度を下回り20.5%となる見込み。

(注:数値は5月のUSDA「PS&D」による)

## V 今月の注目情報: 米国とブラジルの輸出競争

2025/26年度のブラジルの生産量は、とうもろこしは前年度(2024/25年度)に比べ減少となったものの、大豆は、作付面積及び単収の増加により増加した。一方、米国の生産量は、大豆は減少となったものの、とうもろこしは過去最高を記録した。ブラジルは、大豆は世界第1位の輸出国の座を維持し、とうもろこしは米国が首位を維持している。両国の生産・輸出等を巡る動向と、輸入先の多角化を図る中国の輸入動向を併せまとめた。

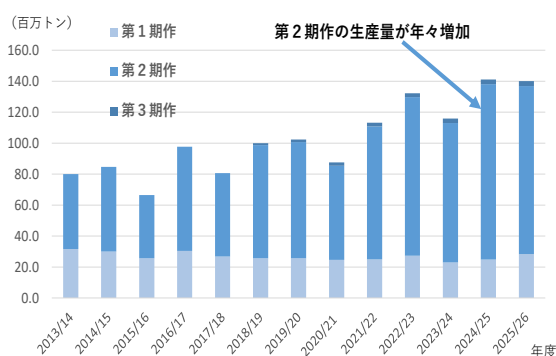
注: 文中の「2025/26年度」等は市場年度で、ブラジルのとうもろこしは2026年3月から2027年2月、大豆は2025年10月から2026年9月。米国のとうもろこし及び大豆は2025年9月から2026年8月。国や作物によって異なる(品目別需給編 P.27 参照)。

### 1 ブラジルのとうもろこし・大豆の生産・輸出動向

#### (1) とうもろこしの生産動向

ブラジル穀物供給公社(CONAB)の穀物レポート(2026.5.14)によれば、2025/26年度のとうもろこしの生産量は1億4,017万トンと、前年度より0.7%減少する見込み(図1)。このわずかな減少は、前年度(2024/25年度)が特に好天に恵まれ、国内史上最大の生産量(1億4,116万トン)を記録したことによる。現在、第1期作は、南部地域では収穫作業がほぼ完了しており、生育期間の大半で生育に適した天候に恵まれ、収量及び品質は良好とのこと。第2期作は、降雨量の減少と大豆収穫の順調な進捗により、作付けが大幅に進み、進捗率は99.2%に達している。2025/26年度の作付けは、第1期作で作付面積が8.4%増と近年の減少傾向から反転し、生産量は14.1%増となる見込み。第2期作も、経済的に魅力的な大豆及びとうもろこしの二毛作の継続に支えられ作付面積は2.1%増加すると予測されている一方で、単収は6.2%減少すると予測されることから、生産量は4.2%減と見込まれている。

図1 ブラジルのとうもろこし生産量の推移

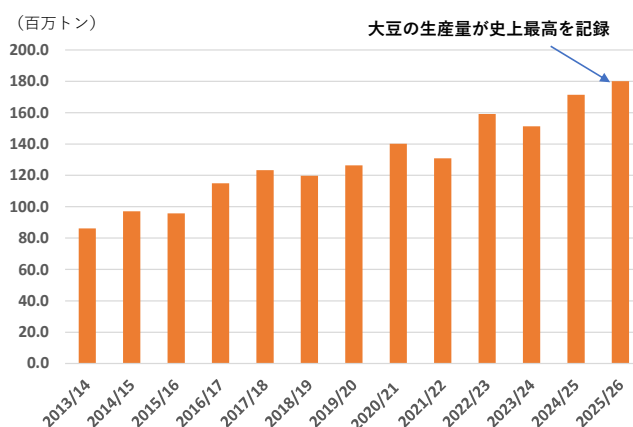


出典: Conab 穀物レポート (2026.5.14) による

#### (2) 大豆の生産動向

CONABによれば、2025/26年度の大豆の生産量は1億8,013万トンと、前年度から5.0%(97.8万トン)増加する見込み(図2)。作付面積は、4,872万ヘクタールと、2024/25年度(4,735万ヘクタール)に比べ2.9%増となる見込み。3月の降雨量の減少により、収穫作業に適した良好な圃場条件が確保され、収穫進捗率は5月11日時点で、作付面積の98.3%に達した。これにより、生産量も史上最高を更新すると見込まれている。

図2 ブラジルの大豆生産量の推移



出典: Conab 穀物レポート (2026.5.14) による

### (3)輸出動向

米国農務省(USDA)によれば、ブラジルは、2025/26年度、とうもろこし輸出量が4,300万トンと、米国に次ぐ世界第2位の輸出国となっている。作付面積の増加及び天候に恵まれ過去最高の豊作となった2022/23年の輸出量は5,420万トンと、乾燥の影響を受けた米国を抜き、世界第1位の輸出国の地位を獲得したが、それ以降は、米国が生産量を伸ばし、輸出量ではブラジルを引き離している。

2026/27年度のブラジルのとうもろこし輸出量は、4,400万トンと予測され、前年度に比べ2.3%増となる見込み(図3)。高い生産量が輸出潜在力を支えるものの、ブラジルのとうもろこしの大部分が国内消費されること、また物流上の課題も抱えており、とうもろこしの輸出量が継続的に高水準を維持することは難しいとも見込まれている。ブラジル開発・産業・貿易・サービス(MIDC)によれば、輸出量が世界第1位となった2023年の輸出先で最も多かったのが中国であったが、2025年はイラン(900万トン)が最大の輸入国となり、中国は、エジプト(540万トン)、ベトナム(420万トン)、サウジアラビア(190万トン)に次ぐ第5位(180万トン)に後退した。

大豆については、ブラジルは2013/14年度以降、世界第1位の輸出国である。USDAによれば、2026/27年度の大豆輸出量は1億1,750万トンと、前年度(1億1,500万トン)に比べ2.2%増と、価格競争力と中国向けの輸出増から過去最高を記録し、引き続き世界第1位の座を維持する見通し(図4)。

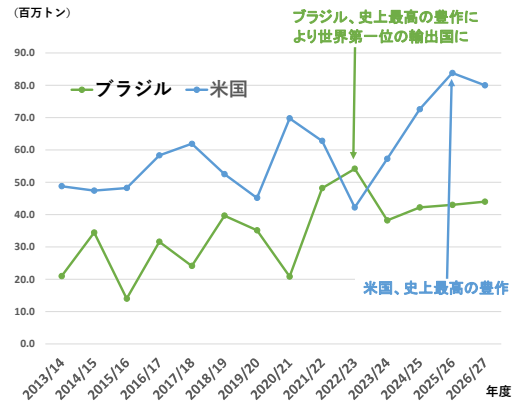
## 2 米国のとうもろこし・大豆の生産・輸出動向

### (1)とうもろこしの生産動向

USDAの5月需給見通しによれば、米国の2025/26年度のとうもろこしの生産量は、前年度より14.3%増加、過去5年平均(3億7,079万トン)から16.6%増の4億3,234万トンと史上最高となる見込み。とうもろこしに有利な価格相場により、多くの農家が大豆からとうもろこしへ作付けを切り替えたためとみられている。

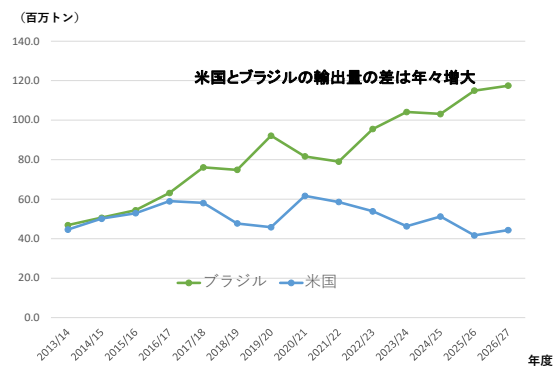
USDA「Feed Outlook: May 2026」(2026.5.14)によれば、2026年の作付意向面積は、3,858万ヘクタールと、2025年に比べ141.6万ヘクタール減となっている。2026/27年度の実産量は、前年度から6.0%減の4億629万トンとなる見込み(図5)。収穫面積が3,537万ヘクタール、単収が11.49トン/ヘクタールとそれぞれ前年度より減少することによる。現在、2026/27年度のとうもろこしの作付作業が始まっている。USDA「Crop progress(2026.5.18)」によれば、主産地18州の作付進捗率は、5月17日時点で、76%と前年度同、過去5年平均(70%)を上回っている。

図3 米国・ブラジルのとうもろこし輸出量の推移



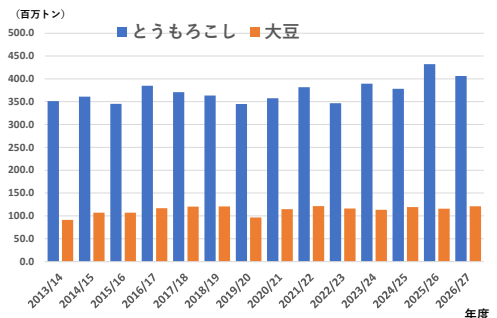
出典：米国農務省「PS&D」(2026.5)による

図4 米国・ブラジルの大豆輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」(2026.5)による

図5 米国のとうもろこし・大豆生産量の推移



出典：米国農務省「PS&D」(2026.5)による

## (2)大豆の生産動向

USDA によれば、2025/26 年度の大豆の生産量は、前年度より 2.6%減少し1億 1,599 万トンとなった。単収が史上最高となるものの、とうもろこしに有利な価格相場により多くの農家がとうもろこしへ作付けをシフトし、収穫面積が 6.7%減少したことが要因とみられる。

2026/27 年度の実績は、前年度と比べ 4.1%増の1億 2,070 万トンとなる見込み(図5)。単収は 3.56 トン/ヘクタールと前年度同となるものの、収穫面積が 3,387 万ヘクタールと前年度より増加することによる。USDA「Crop progress」(2026.5.18)によれば、主産地 18 州の作付進捗率は、5月 17 日時点で、67%と前年度(63%)及び過去5年平均(53%)を上回っている。

## (3)輸出動向

USDA によれば、米国の 2025/26 年度のとうもろこしの輸出量は 8,382 万トンと、前年度(7,260 万トン)から 15.5%増、過去5年平均(6,093 万トン)から 37.6%増となる見込み。高い生産力に支えられ、ブラジルを引き離し輸出国世界第 1 位の座を維持する見込み。2026/27 年度の実績は、8,001 万トンと、前年度から 4.5%減となる見込み(図3)。

2025/26 年度の大豆の輸出量は 4,164 万トンと、とうもろこしへの作付けシフトに伴う生産量の減少に加え、バイオ燃料需要の増加により国内需要量が過去最高となる見込みを受け、前年度より 18.7%減少する見込み。2026/27 年度の実績は、とうもろこしからの作付けシフトにより、4,436 万トンと、前年度から 6.5%増となる見込みだが、2012/13 年度に輸出国世界第1位の座をブラジルに譲り渡して以来、米国とブラジルとの輸出量の差は年々拡大しており、2026/27 年度では、ブラジルの輸出量は米国の3倍(2.6 倍)に近づいて来ている(図4)。

## 3 中国の輸入動向と米国の価格競争力

### (1)中国のとうもろこし輸入動向

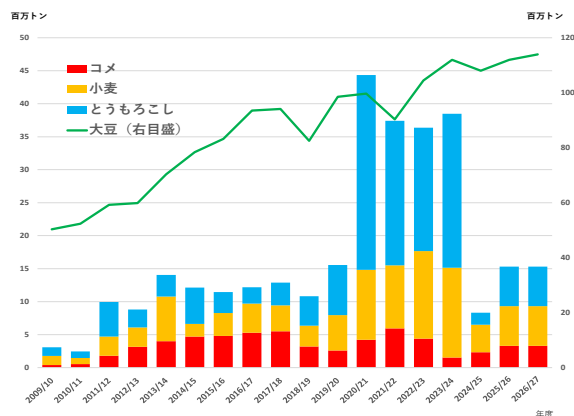
USDA によれば、中国のとうもろこしの輸入量は、2009/10 年度から 2019/20 年度までは 100 万トンから 750 万トンの範囲で推移していたが、豚肉生産が増加した 2020/21 年度以降、急激に増加し、2020/21 年から2023/24 年の4年間は、平均 2,336 万トンで推移。その際、世界第 1 位のとうもろこし輸入国となった(図6)。

中国は、2022 年までは主に米国産及びウクライナ産とうもろこしを輸入してきていたが、2020 年以降は、飼料及び穀物サプライチェーンの多様化と国内生産の増強を目指して来た。

2022 年にブラジル産とうもろこしの輸入を許可した後、2024 年5月にはアルゼンチン産遺伝子組み換えとうもろこし2品種の輸入を承認した。

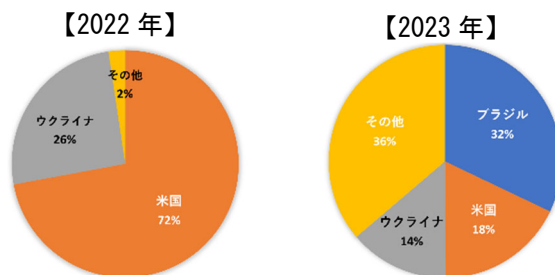
中国海関統計によれば、2023 年の中国のブラジルからのとうもろこし輸入量は1,281 万トンで米国からの輸入量 714 万トンを大きく引き離し、ブラジルが第1位の輸入先国となった(図7)。

図6 中国の主要穀物・大豆輸入量の推移



出典：米国農務省「PS&D」(2026.5)による

図7 中国のとうもろこしの国別輸入シェア



出典：中国海関統計

USDA「Grain and Feed Annual(China)」(2026.3.19)によれば、アルゼンチン産とうもろこし、ブラジル産乾燥蒸留粕(DDGS)、ブラジル産ソルガムは、2026年に中国市場に導入される見込みであり、輸入元多様化の明確な傾向を示している。これらの動きは、中国のとうもろこし輸入市場における米国産とうもろこしのシェアを更に低下させる可能性がある。中国は2026年上半期、2025/26年度納入分に関し、米国産とうもろこしの契約を一切締結しておらず、未決済の販売量は0(ゼロ)トンとなっている。また、新たな報復関税が適用されなくても、輸入業者が二国間関税への懸念から関税割当(TRQ)を使用せずに保有していることから、2026年第1四半期の中国による米国産とうもろこしの購入量は低水準にとどまると予測されている。

更に2024年第4四半期から穀物輸入を抑制する政策指針の影響で、中国のとうもろこし及び穀物全体の輸出量は2025年に大幅に減少した。とうもろこしの総輸入量は、2024年の1,376万トンから265万トンに大幅に減少し、米国のシェアは大幅に低下した。

USDAによれば、2026/27年度の中国のとうもろこし輸入量は、報復関税等の貿易政策の変更や輸入抑制による影響を受けた前年度(182万トン)に比べ、339.6%増の800万トンと予測されている。

## (2)中国の大豆輸入動向

中国の大豆の輸入量は、2000年以降2017/18年度まで概ね右肩上がり増加してきた。2018/19年度はアフリカ豚熱発生の影響、2021/22年度は新型コロナによる景気低迷により、輸入需要が一時減退したものの、その後豚肉生産の回復に伴い、直近5年間の大豆輸入量は1億500万トン前後で推移している(図6)。

USDAによれば、2025/26年度の輸入量は搾油用需要の増加等を受け1億1,200万トンと前年度(1億800万トン)と比べ3.7%増、2023/24年度と並び史上最高となる見込み。

中国海関統計によれば、2025/26年度のうち2025年10～2026年3月の輸入量は、前年同期(4,029.2万トン)に比べ、5.1%増の4,233.1万トン。輸入先国別には、ブラジル2,658.8万トン(62.8%)、アルゼンチン872.1万トン(20.6%)、ウルグアイ179.6万トン(4.2%)の順(表)。

表 中国の大豆の輸入先国と輸入量

2024/25年度 (2024年10月～2025年9月)			2024/25年度 (2024年10月～2025年3月)			2025/26年度 (2025年10月～2026年3月)		
国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)
ブラジル	7,610.8	69.6	米国	1,915.6	47.5	ブラジル	2,658.8	62.8
米国	2,440.9	22.3	ブラジル	1,695.0	42.1	アルゼンチン	872.1	20.6
アルゼンチン	476.6	4.4	アルゼンチン	198.1	4.9	米国	341.2	8.1
ウルグアイ	244.3	2.2	ウルグアイ	110.6	2.7	ウルグアイ	179.6	4.2
カナダ	118.6	1.1	カナダ	86.3	2.1	カナダ	136.5	3.2
ロシア	45.0	0.4	ロシア	23.4	0.6	ロシア	42.5	1.0
その他	2.1	0.0	その他	0.2	0.0	その他	2.5	0.1
合計	10,938.3	100.0	合計	4,029.2	100.0	合計	4,233.1	100.0

資料：中国海関統計のデータをもとに農林水産省で作成

USDA「Oilseeds and Products Annual」(China) (2026.3.19)によれば、2024年12月から2025年3月にかけては、米中関係の緊張が高まる中で前倒しの買い付けにより輸入量が急増したが、2025年4月に高関税が課されたことで輸入が抑制され、米国からの輸入量が急激に減少し、2025年9月から12月にかけては0(ゼロ)となった。一方、アルゼンチンからの輸入量は、2025年9月に一時的な輸出税の撤廃も相まって、急激に増加した。

中国は、2025年10月に韓国・釜山で開催された米中首脳会談で、一部報復措置を停止する貿易・経済協定が締結されたことを受け、米国産大豆の調達を再開した。2026年2月26日時点のUSDA海外農業局(FAS)の輸出データによると、中国の米国産大豆1,200万トンの購入分のうち、1,080万トンを購入又は出荷済である。2026年2月初旬、トランプ米国大統領は、中国が米国産大豆800万トンを追加購入することを約束したと発表した。現在、南米からの供給が確保されていること、米国産大豆には追加関税が依然として課されていることから、中国の購入は民間企業ではなく、国有企業のみにより行われている。大豆の国際市場における構造的な価格格差は依然として南米産に有利に働いている。ブラジルでは記録的な豊作となった新穀大豆の収穫と販売が開始され、その価格は米国産大豆の価格を大幅に下回っている。

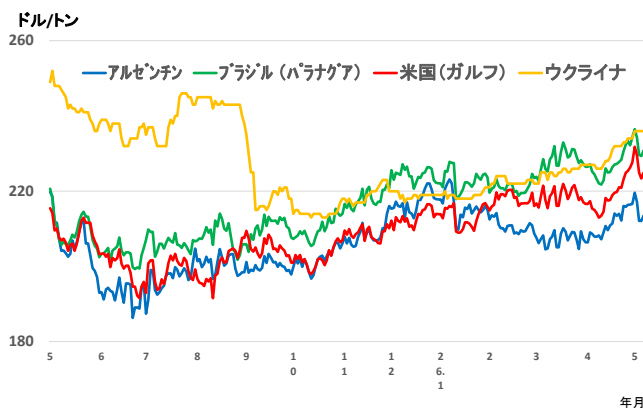
### (3) 米国の価格競争力

USDA「Grain: World Markets and Trade」(2026.5.12)によれば、5月7日現在、とうもろこしの輸出価格(FOB)は、アルゼンチン産が、ベトナムやエジプトといった主要輸入国からの旺盛な需要を受け前月から3ドル/トン上昇し212ドル/トンとなったものの、主要生産国の中では最も安価となっている。ブラジル産は、主要輸出国の価格上昇を反映し229ドル/トンと、主要輸出国の中で2番目の高値となり、米国産は225ドル/トンとブラジル産に比べ安価となり、とうもろこしではブラジルに対し、価格競争力を有していると言える(図8)。

また、国際穀物理事会(IGC)によれば、5月8日現在、大豆の輸出価格は、米国産478ドル/トン、ブラジル産455ドル/トンと、ブラジル産は米国産に比べ価格競争力が高い状況にあるが、アルゼンチン産が435ドル/トンと主要輸出国の中で、最も安価となっている(図9)。

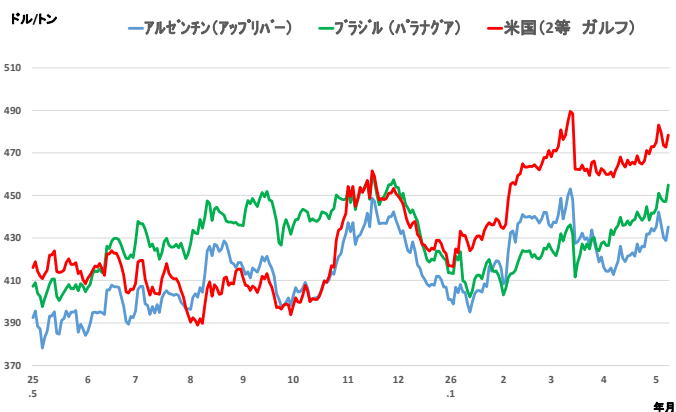
USDA「Oilseeds: World Markets and Trade」(2026.5.12)によれば、4月の需給報告から1ヵ月間、大豆価格は上昇を続け、天候の影響によるアルゼンチン産大豆の収穫遅れや米ドル安が、米国の大豆市場価格を押し上げた。

図8 とうもろこしの輸出価格(FOB)の推移



出典：IGC のデータを元に農林水産省にて作成

図9 大豆の輸出価格(FOB)の推移



出典：IGC のデータを元に農林水産省にて作成

## 4 まとめ

とうもろこし及び大豆の主要輸出国であるブラジル、米国、アルゼンチン、ウクライナ等においては、2025/26年度の生産が概ね豊作基調の中、米国とブラジルは激しい競争を繰り広げている。

2026/27年度 of ブラジル産とうもろこし・大豆は、史上最高の生産量を記録した昨年度より生産量が減少するものの、2年連続で高水準の生産量を維持し、価格競争力を有しているとも言えるが、2025/26年度の米国産とうもろこしは、過去最高の豊作となり、昨年6月以来、ブラジル産に比べ安価な状態が続いている。一方、米国産大豆は、ブラジル産と比較して割高な輸出価格が続き、米国産の輸出に不利に働いている。

そのような中、両国にとって、最大の輸出先国である中国は、自国の食料安全保障重視へ舵を切り、穀物等の国内生産の拡大を目指すとともに、輸入先国の多角化を進めている。

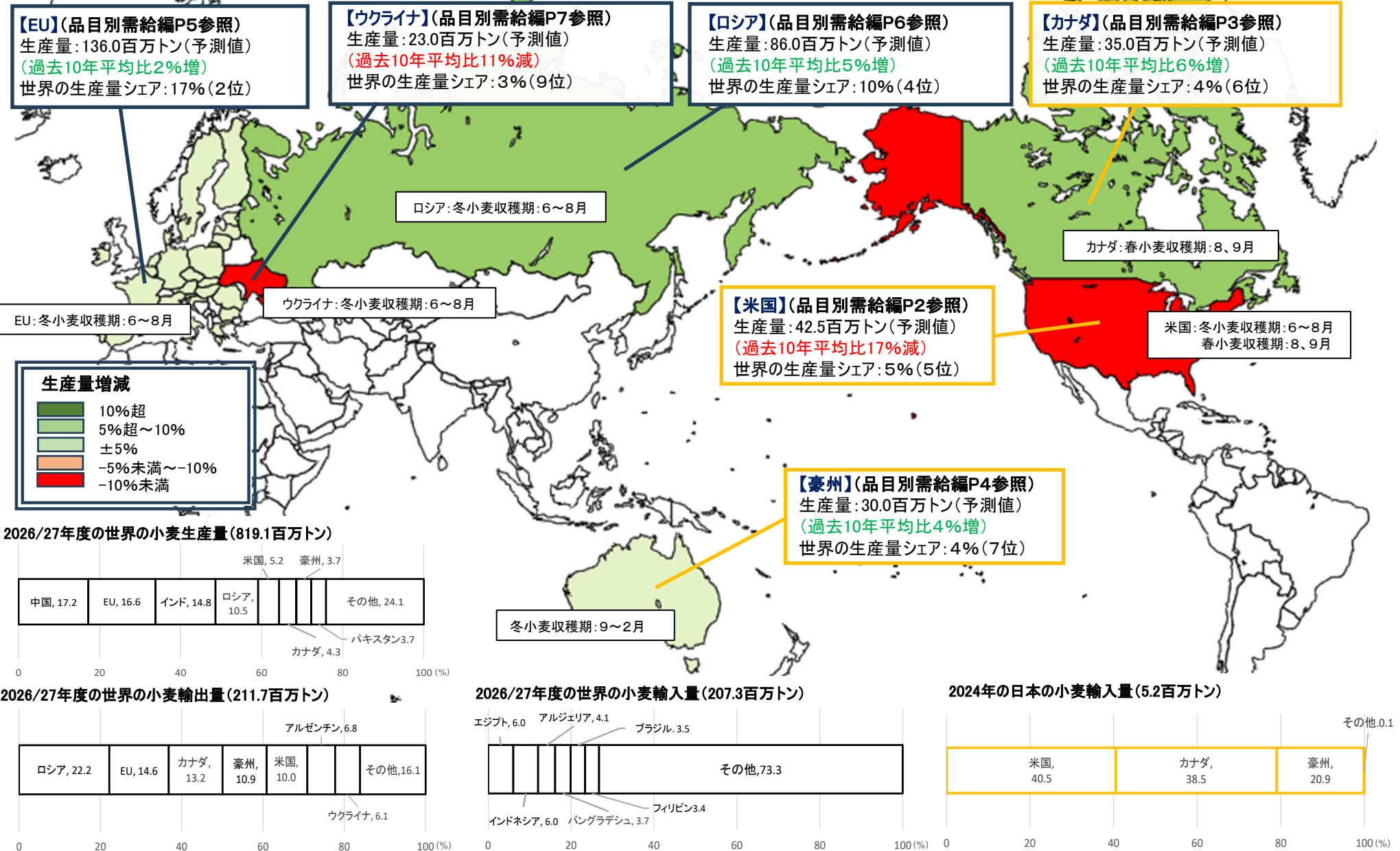
USDA「Oilseed and Products Annual(China)」(2026. 3.19)によれば、中国政府は、2023年の「一帯一路」フォーラム後、ロシアと12年間で約270億ドル相当の穀物及び油糧種子7,000万トンを供給する画期的な協定を締結した。2025年4月、中国税関は穀物製品の市場アクセスリストを更に拡大し、ザンビアとカンボジアに大豆輸出プロトコルを付与している。これにより、中国への大豆

市場アクセスを持つ国は 15 カ国から 17 カ国に増加した。3大供給国(ブラジル、米国、アルゼンチン)以外の国の中では、ウルグアイとカナダが 2023/24 年度と 2024/25 年度を通じて中国市場シェアを最も着実に伸ばしている。

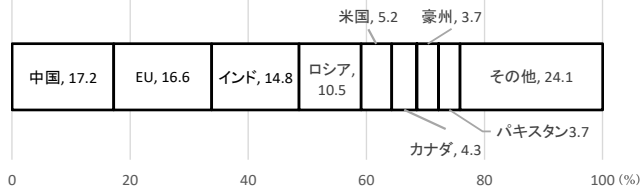
2026/27 年産の米国作付意向面積調査の結果によれば、大豆の作付面積は増加するとみられ生産量も増加が見込まれている。しかしながら、国際価格の動向等を見ても、中国にとって米国産大豆は追加購入するにも魅力的なものとはなっていない。先日の米中首脳会談後、ホワイトハウスは、5月17日付のファクトシートで、中国が2026年から2028年の各年に少なくとも170億ドルの米国の農産物を購入すると発表した。具体的な品目は公表されていない。米国政府は、大豆に関し、バイオ燃料原料増加を図る政策も打ち出している。

このように、大豆、とうもろこしの生産・輸出等を巡る動向については、ブラジル及び米国が主要輸出国のポジションを維持すると予測されるが、輸入国である中国の動向により大きな影響を受けることから、今後の3国の政策を含め、その需給について注視していきたい。

# 資料1-1 小麦の主要輸出国の生産量(過去10年平均との増減比較) 2026/27年度(5月版)



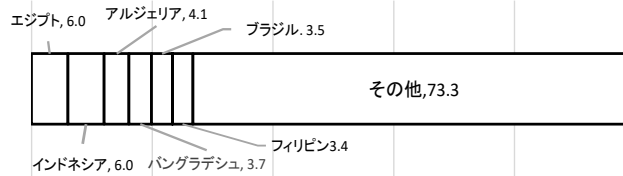
2026/27年度の世界の小麦生産量(819.1百万トン)



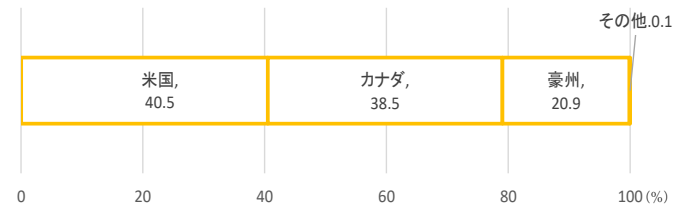
2026/27年度の世界の小麦輸出货量(211.7百万トン)



2026/27年度の世界の小麦輸入量(207.3百万トン)



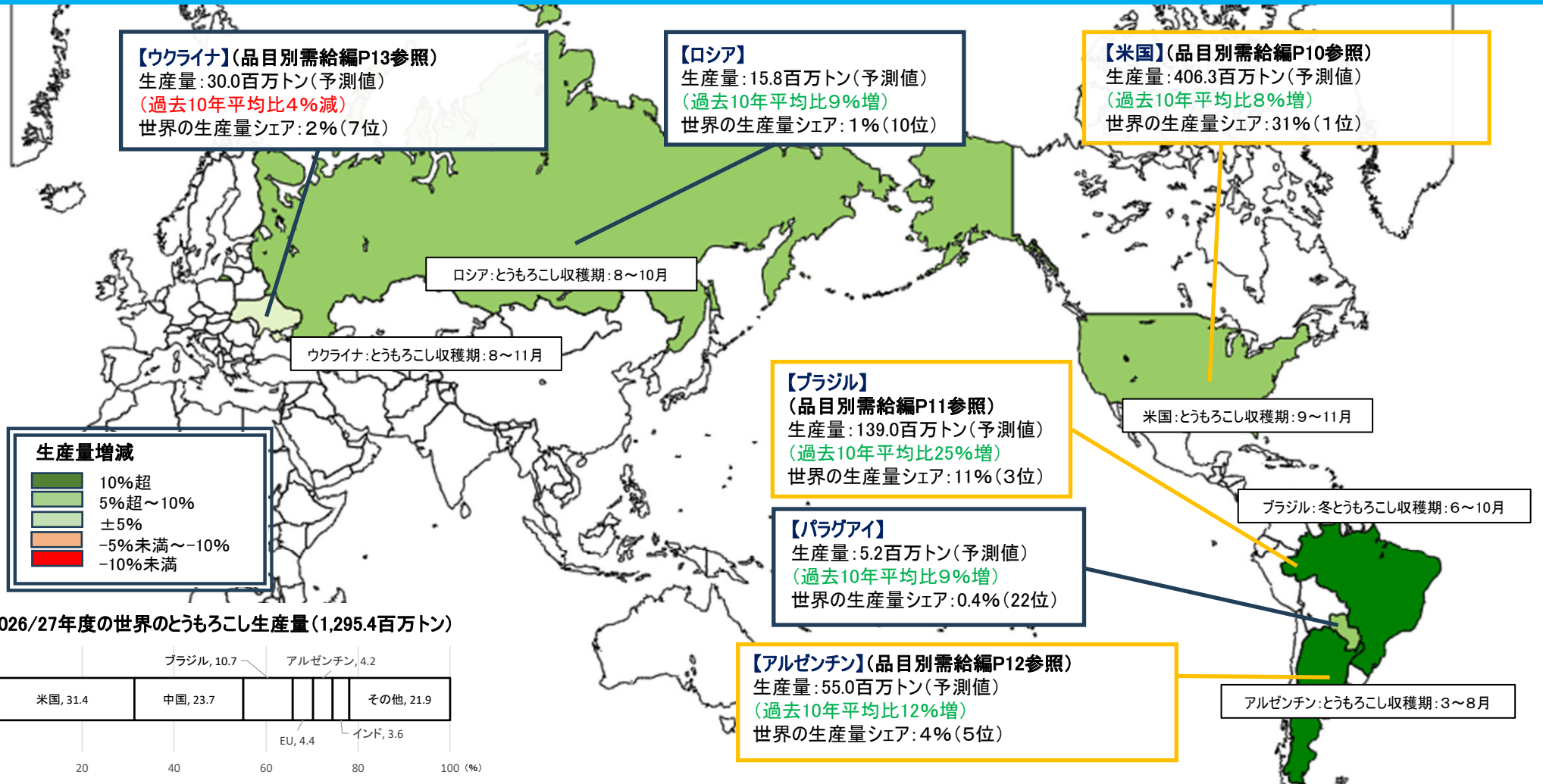
2024年の日本の小麦輸入量(5.2百万トン)



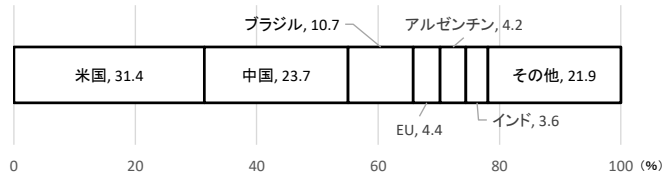
○ 2024年度の日本の小麦輸入量は533万トンであり、日本の小麦国内消費仕向量(650万トン、うち食用は512万トン)の82.0%を占める。  
○ 輸入小麦の1人1日当たり供給熱量は256kcalと、1人1日当たり総供給熱量(2,248kcal)の11.4%を占める(2024年度)。

出典: USDA「PS&D」(2026.5)、財務省「貿易統計」(2024年輸入量)、農林水産省「令和6年度食料需給表(概算値)」(破線枠内)、AMIS「Supply and demand balances manual」(収穫期)をもとに農林水産省で作成。

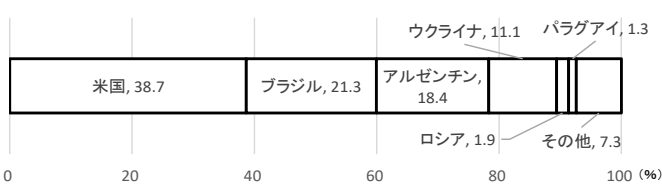
# 資料1-2 とうもろこしの主要輸出国の生産量(過去10年平均との増減比較) 2026/27年度(5月版)



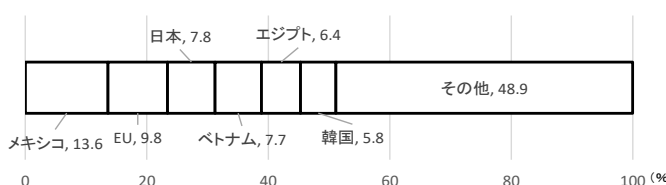
2026/27年度の世界のとうもろこし生産量(1,295.4百万トン)



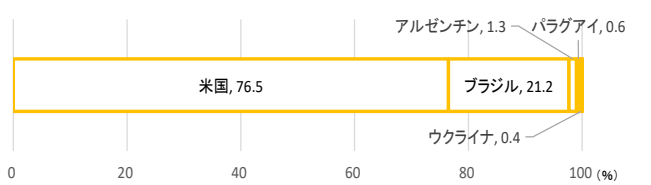
2026/27年度の世界のとうもろこし輸出货量(206.9百万トン)



2026/27年度の世界のとうもろこし輸入量(198.6百万トン)



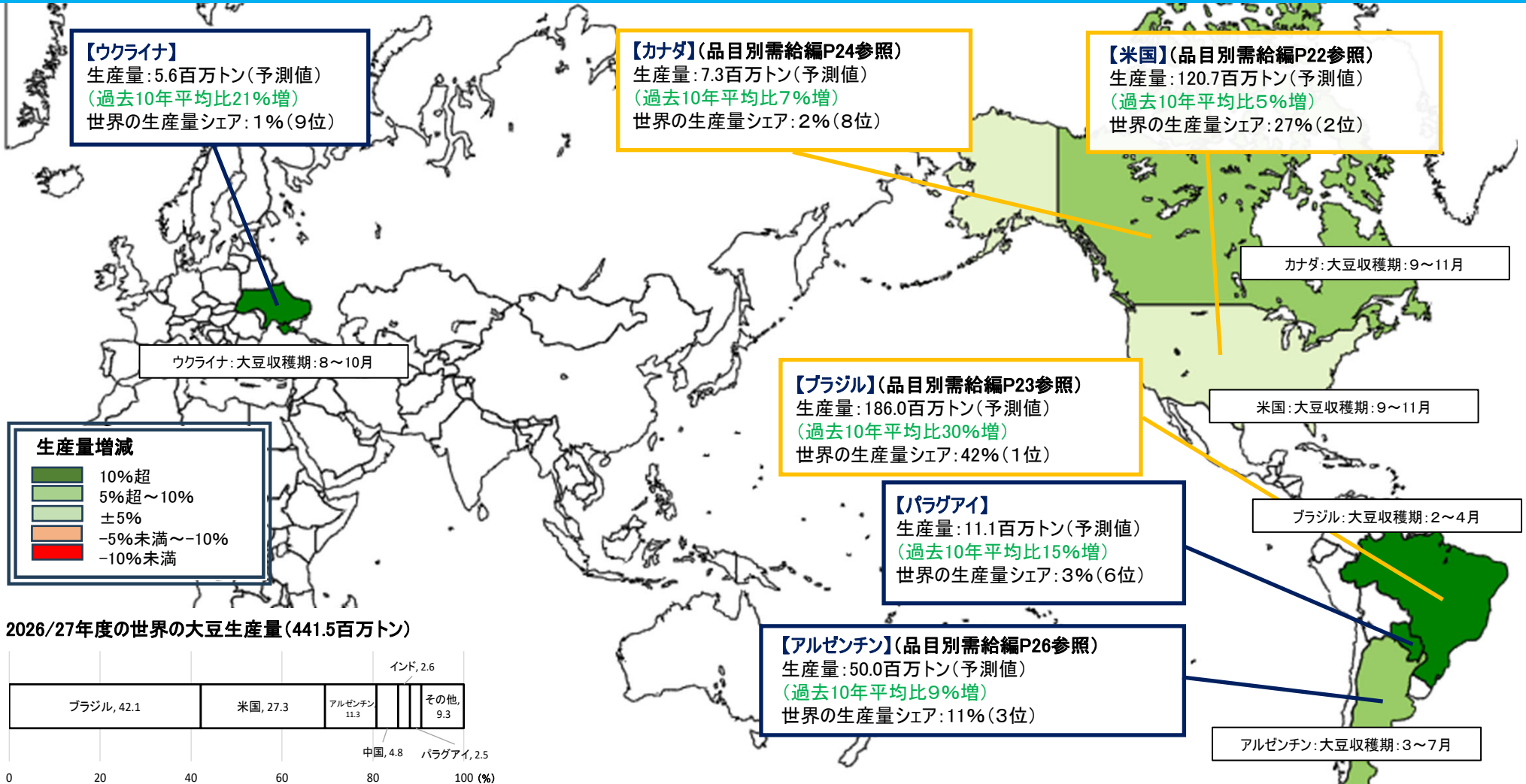
2024年の日本のとうもろこし輸入量(15.3百万トン)



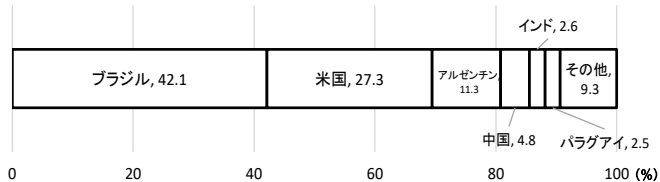
○ 2024年度の日本のとうもろこし輸入量は1,522万トンと、日本のとうもろこし国内消費仕向量(1,518万トン、うち飼料用は1,194万トン)のほぼ全量を占める。

出典: USDA「PS&D」(2026.5)、財務省「貿易統計」(2024年輸入量)、農林水産省「令和6年度食料需給表(概算値)」(破線枠内)、AMIS「Supply and demand balances manual」(収穫期)をもとに農林水産省で作成。

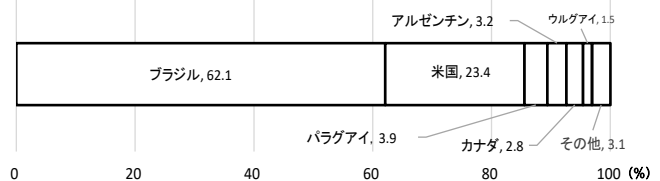
# 資料1-3 大豆の主要輸出国の生産量(過去10年平均との増減比較) 2026/27年度(5月版)



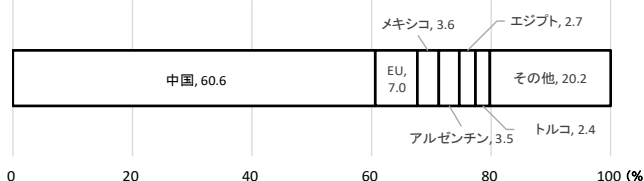
2026/27年度の世界の大豆生産量(441.5百万トン)



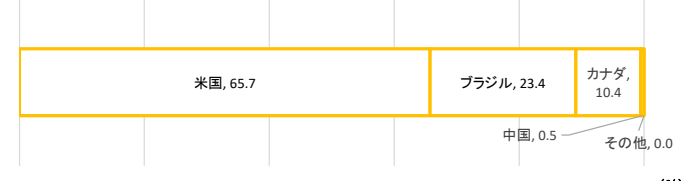
2026/27年度の世界の大豆輸出货量(189.2百万トン)



2026/27年度の世界の大豆輸入量(188.0百万トン)



2024年の日本の大豆輸入量(3.17百万トン)



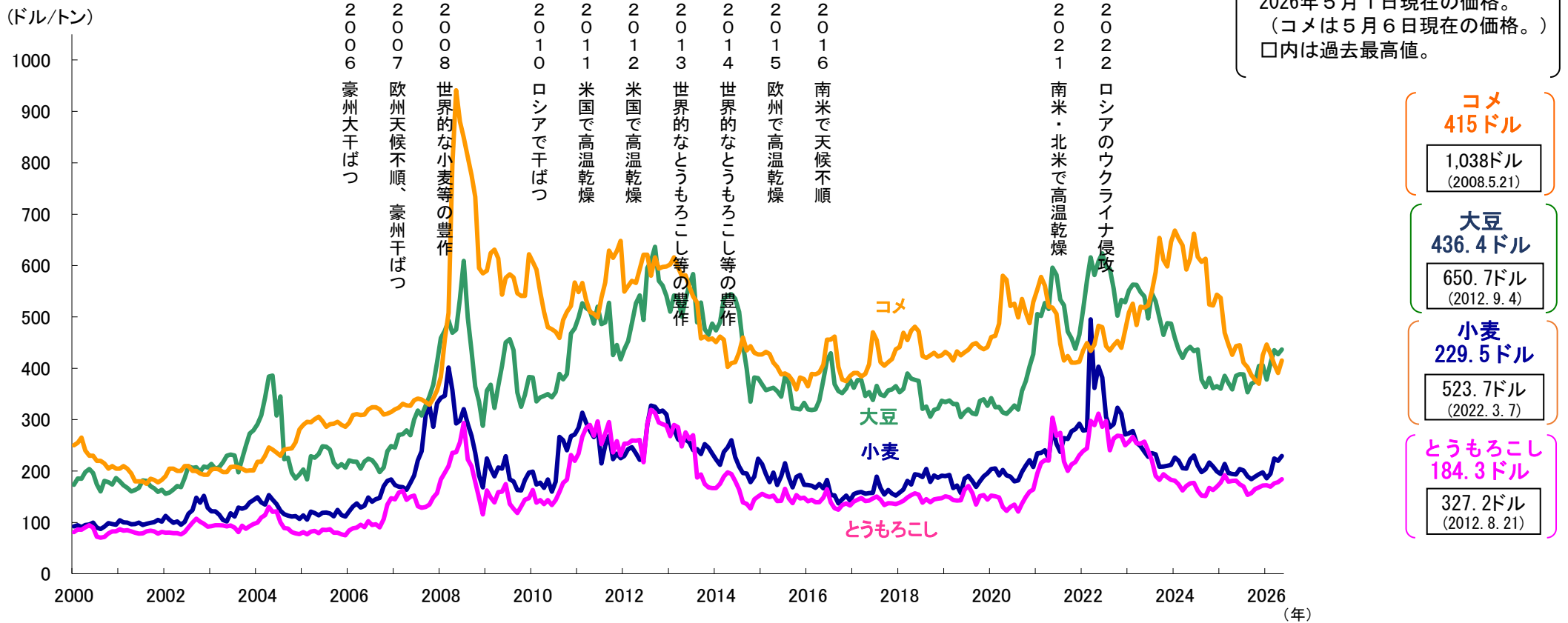
- 2024年度の日本の大豆輸入量は309万トンであり、日本の大豆国内消費仕向量(359万トン、うち大豆油などの加工用は256万トン、食用は88万トン)の86.2%を占める。
- 輸入大豆の1人1日当たり供給熱量は58kcalと、1人1日当たり総供給熱量(2,248kcal)の2.6%を占める(2024年度)。

出典: USDA「PS&D」(2026.5)、財務省「貿易統計」(2024年輸入量)、農林水産省「令和6年度食料需給表(概算値)」(破線枠内)、AMIS「Supply and demand balances manual」(収穫期)をもとに農林水産省で作成。

# 資料 1-4 穀物等の国際価格の動向 (ドル/トン)

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は下落。2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年、ロシアのウクライナ侵攻により、小麦は史上最高値を更新も、ウクライナからの臨時回廊等による輸出再開などもあり侵攻前の水準まで下落。とうもろこし、大豆はウクライナ侵攻時に高騰も、ブラジル等の豊作から侵攻前の水準まで下落。直近では、中東情勢の緊迫化等により上昇傾向。コメは、2022年9月以降、インドの輸出規制強化、インドネシアの需要増等から上昇も、2024年以降、インドの輸出規制解除等を受け下落。2025年11月以降、タイの洪水被害等を受け上昇するも、世界的な供給増等を受け、再び下落。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要等により、2008年以前を上回る水準で推移。

## □ 穀物等の国際価格の動向



注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格(セツルメント)である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

# 資料 1-5 サプライチェーン等に関する状況

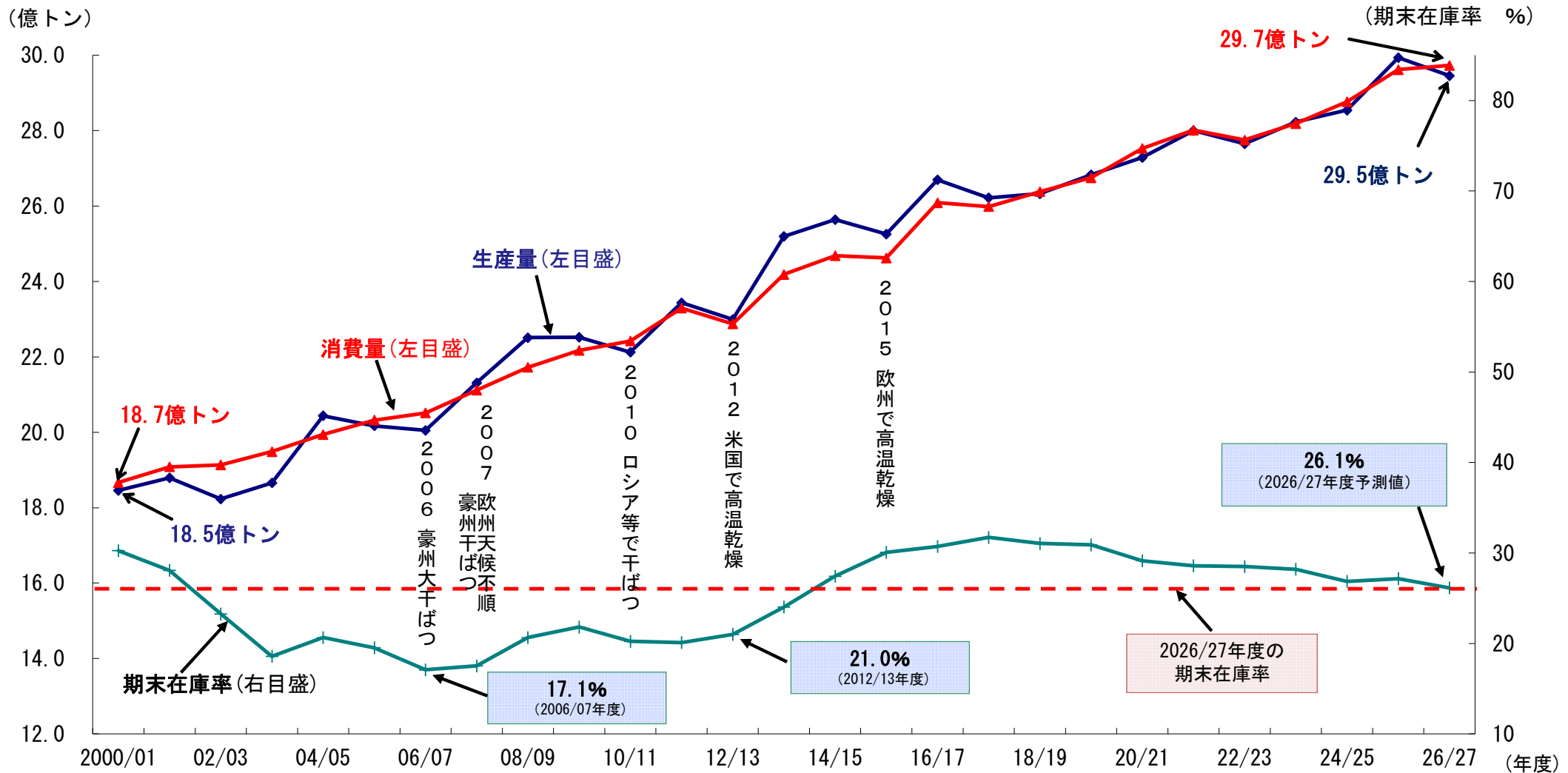
## ○サプライチェーン等に大きな影響を与える情報は特段なし (2026年5月19日時点)

生産国の情報	チョークポイント情報	その他
<p>○米国</p> <p>①USDA「Grain Exports Dashboard」によれば、4月のメキシコ湾から日本向け穀物の海上運賃は、3月の60.44ドル/トンから上昇し、65.80ドル/トン。太平洋岸北西部(PNW)から日本向けは、3月の33.75ドル/トンから上昇し、35.00ドル/トン。両ルートとも2月から上昇傾向。</p> <p>②USDA「Transportation Updates and Regulatory News」によれば、ユニオン・パシフィック鉄道は、2026年6月1日から小麦及び小麦粉の鉄道運賃を1車両当たり275ドル引き上げると発表。</p> <p>○カナダ</p> <p>Quorum Corporation「Grain Monitoring Program Report for: March 2026」によれば、3月のカナダ西部の鉄道による穀物輸送量は、2月の490万トンと比べ13.4%増の560万トン弱。年度初め(2025年8月)からの輸送量は前年同期の4,050万トンから4.8%増の4,240万トン。3月の港湾出荷量は350万トンで、2月と比べ3.0%増。年度初めからの出荷量は3,010万トンで、前年同期と比べ4.8%増。3月の船舶の港での待機日数は、2月の12.1日から12.7日に増加。バンクーバー港の待機日数は12.7日から14.0日に、プリンス・ルパート港では9.0日から10.6日にそれぞれ増加。サンダーベイ港は3月末に再開し、待機日数は1.8日。</p>	<p>○パナマ運河</p> <p>①4月のパナマ運河通航数は、1日平均38.7隻と通常通航水準で推移。なお、5～9月に閘門保守工事が予定されており、通航が制限される可能性がある。</p> <p>②パナマ運河のガトゥン湖の水位は、5月19日現在、85.7フィートで同月過去5年平均(83.7フィート)を上回っており、通航に関し大きな制約は生じていない。</p> <p>③USDA「Transportation Updates and Regulatory News」によれば、米国とイランの紛争により、世界のエネルギー購入者は米国メキシコ湾に目を向けるようになった。こうした需要と船舶の迂回により、米国メキシコ湾から東アジアへの最短ルートであるパナマ運河での混雑が深刻化。パナマ運河庁によれば、予約なしで到着した南行きの船舶の平均待機期間は、3月末の1日から4月26日には4.6日となった。穀物を積載するドライバルク船は、必要に応じて運航されるため、予約なしで運河を通過することが多く、タイムリーな通過を必要とする船舶に対し、パナマ運河庁はオークションを通じて1日当たり数件の通過枠を割当て。ロイズリストによれば、4月20日までの1週間のパナマックス級船舶通過枠の平均落札価格は83万7,500ドルで、少なくとも2024年1月以来の最高値。</p>	<p>○肥料価格</p> <p>農業市場情報システム(AMIS)「Market Monitor No. 138」によれば、4月末時点のAMIS肥料コスト指数(AMIS対象作物の1ヘクタール当たりの肥料費の週次推移を把握する指標。2019年の平均価格を100として計算。)は、3月の急激な上昇後からブラジルの大豆で上昇したものの、概ね横ばいとなった。</p> <p>フランスの小麦の肥料コスト指数は238.2%となり前月比0.9ポイント減、前年同月比58.5ポイント増で3年ぶりの高水準。</p> <p>米国のとうもろこしの同指標は4月中旬に258.7%まで上昇したものの、4月末では234.7%となり前月比3.8ポイント減、前年同月比55.3ポイント増。</p> <p>ブラジルの大豆の同指標はリン酸価格の上昇により202.3%となり前月比10.2ポイント増、前年同月比47.2ポイント増。</p> <p>中国のコメの同指標は125.6%となり前月比0.3ポイント増、前年同月比10.1ポイント増。</p>

## 資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2026/27年度は、2000/01年度に比べ1.6倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2026/27年度の期末在庫率は、消費量が生産量を上回り、前年度より減少し、26.1%。過去の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

### □ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

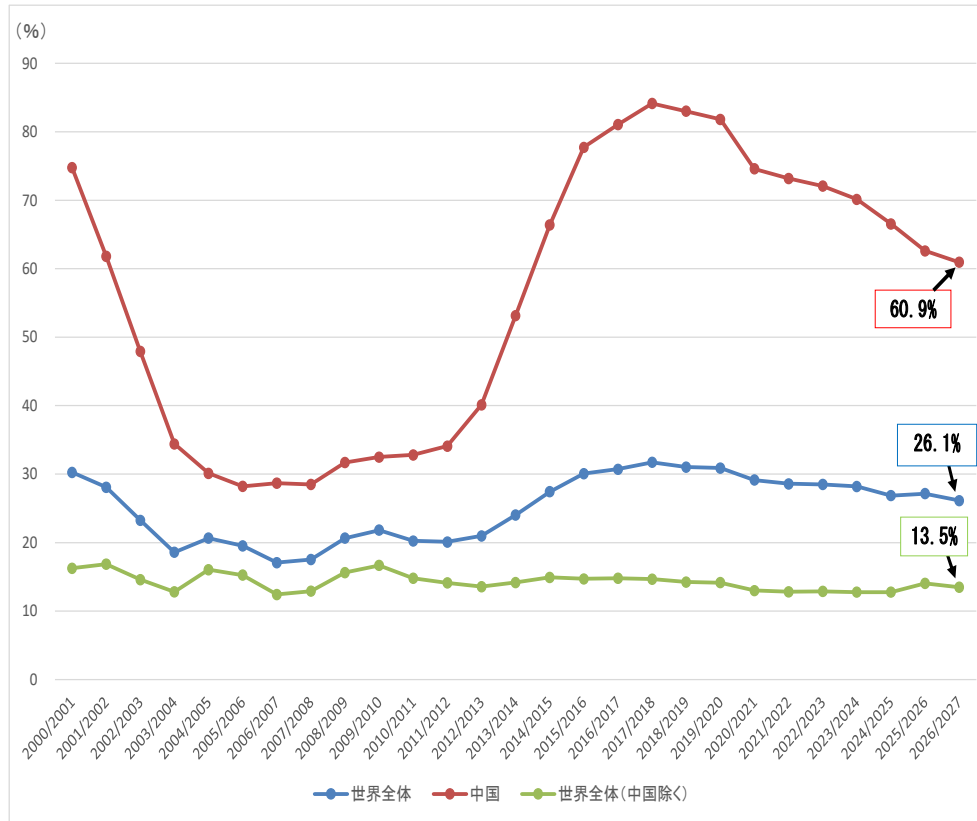


資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(May 2026)、「FPS&D」

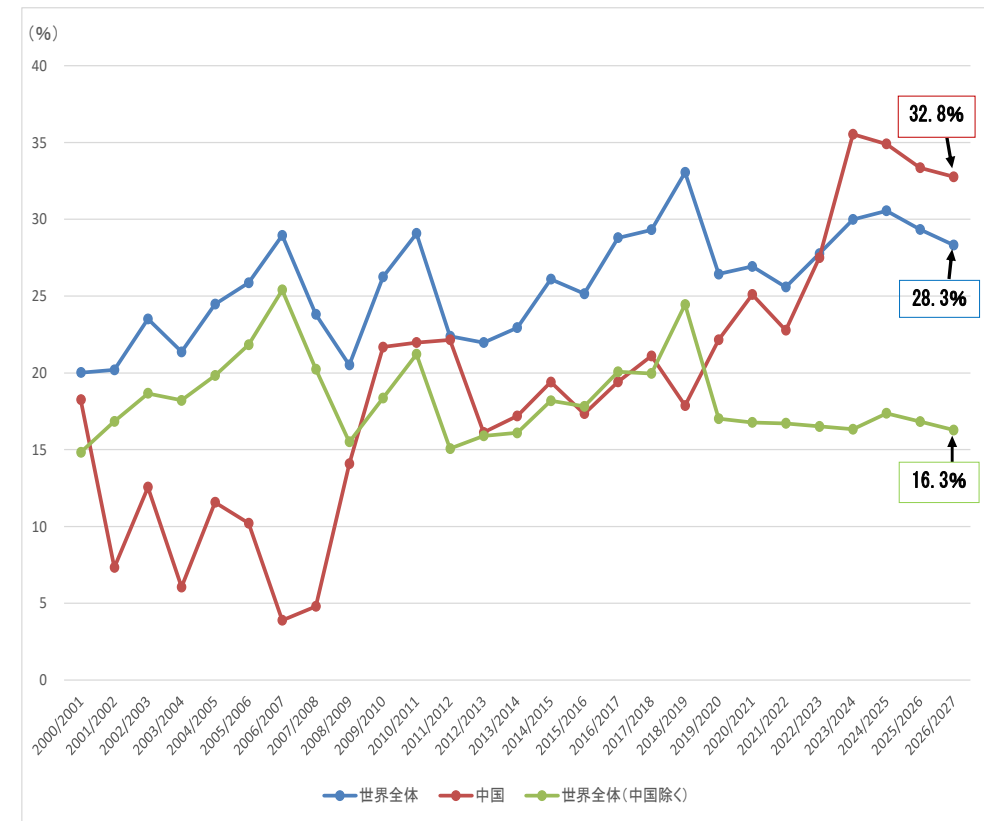
(注) なお、「FPS&D」については、最新の公表データを使用している。

# 資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

## ○ 穀物全体の期末在庫率の推移



## ○ 大豆の期末在庫率の推移



資料：米国農務省「PS&D」(May 12, 2026)

注：1)穀物はとうもろこし、小麦、コメ等（大豆除く）。

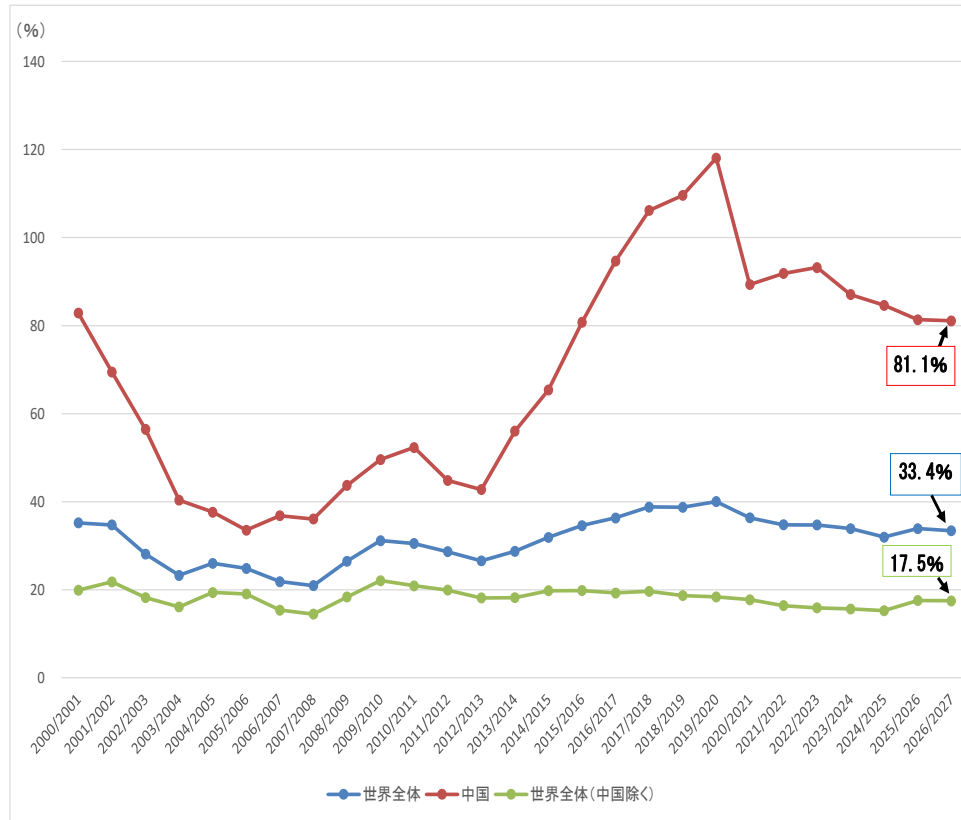
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/消費量×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

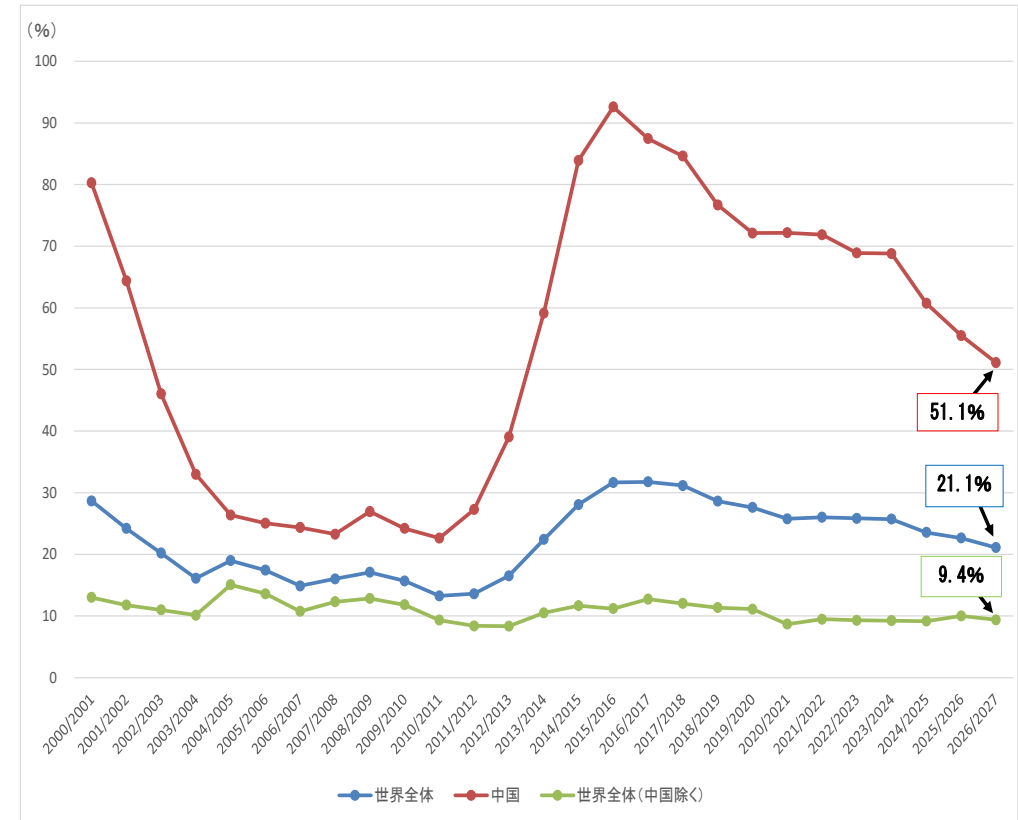
4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

# 資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

## ○ 小麦の期末在庫率の推移



## ○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料：米国農務省「P S & D」(May 12, 2026)

注： 1) 小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

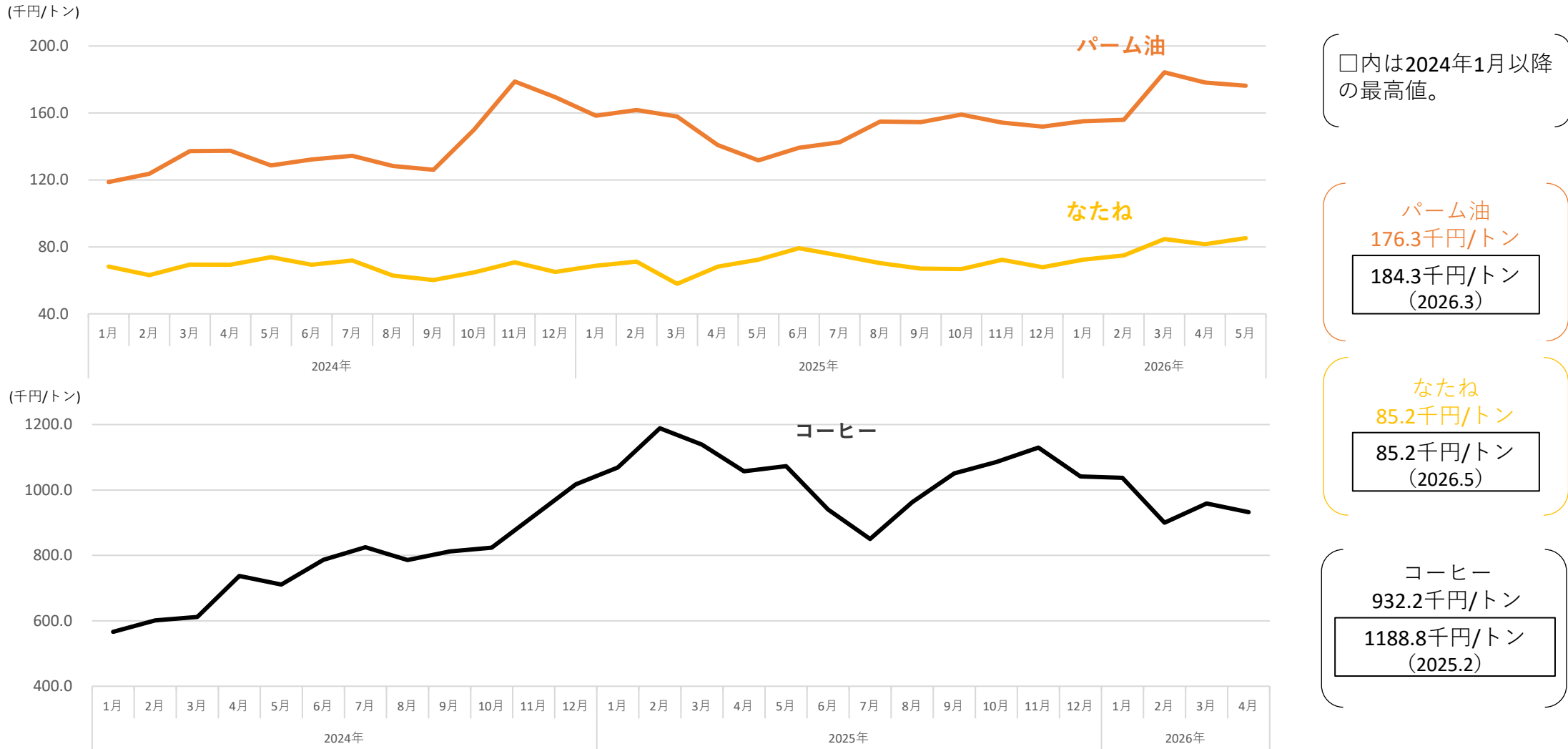
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

# 資料 4-1 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- パーム油の直近の動きとして、中東情勢の緊迫化による原油価格高騰の影響等から上昇している。5月の月央値は176.3千円/トンとなり、前月の月央値をやや下回ったが、依然として高い水準で推移している。
- なたねの直近の動きとして、中東情勢の緊迫化による原油価格高騰の影響等から上昇している。5月の月央値は85.2千円/トンとなり、2024年1月以降の最高値だった2026年3月の84.7千円を0.5千円上回る高値になった。
- コーヒーについては、2025年11月以降、供給見通しの改善を背景に下落傾向で推移している。2026年3月には、中東情勢の緊迫化によるコストの高騰を受けて一時的に上昇したが、4月には供給見通しの改善が影響し、再び下落に転じている。



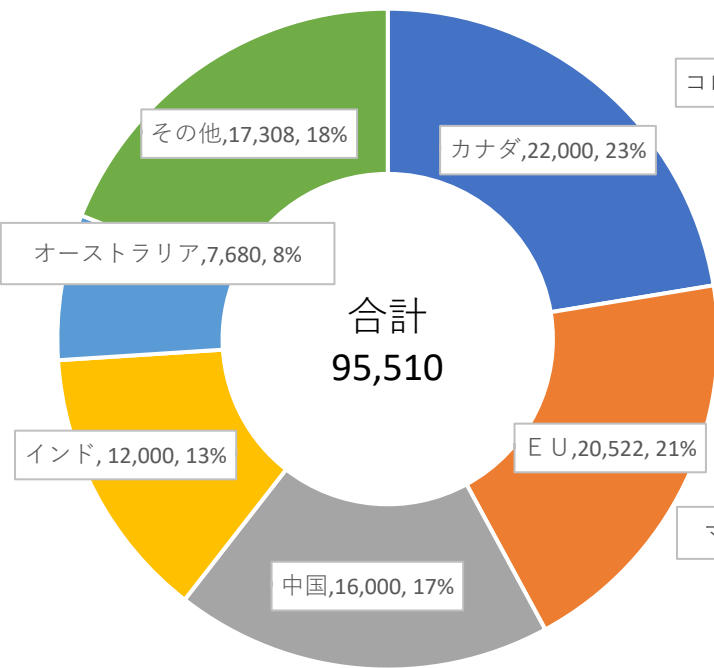
※ なたねの国際価格についてはカナダウィニペグなたね市場の先物価格（期近物）の月央値を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）の月央値を使用し、為替レートから円に換算して算出。コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

# 資料4-2 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

## ○主要生産国の生産状況

(単位：千トン)

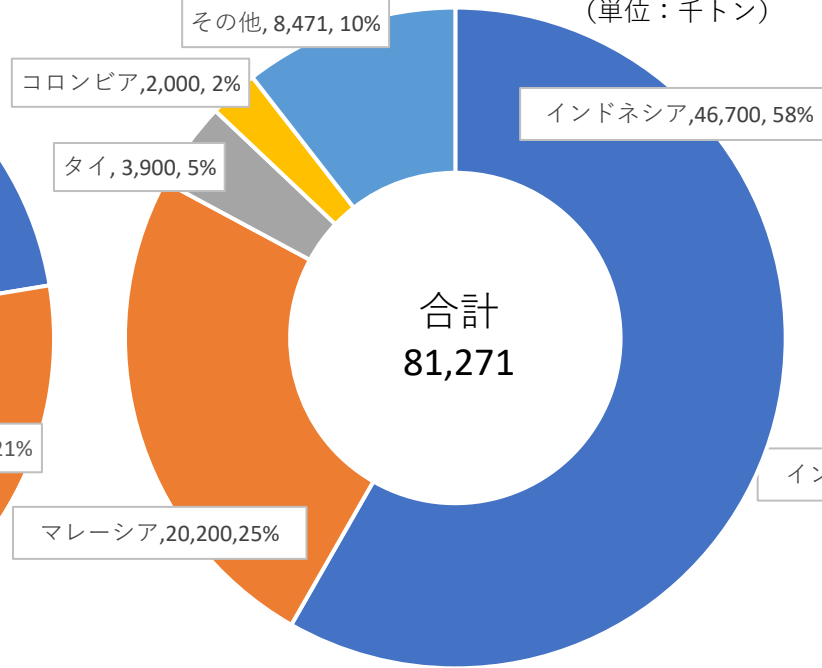
なたね生産量 (2025/26)



※米国農務省 (PS&D)  
2026年5月時点

パーム油生産量 (2025/26)

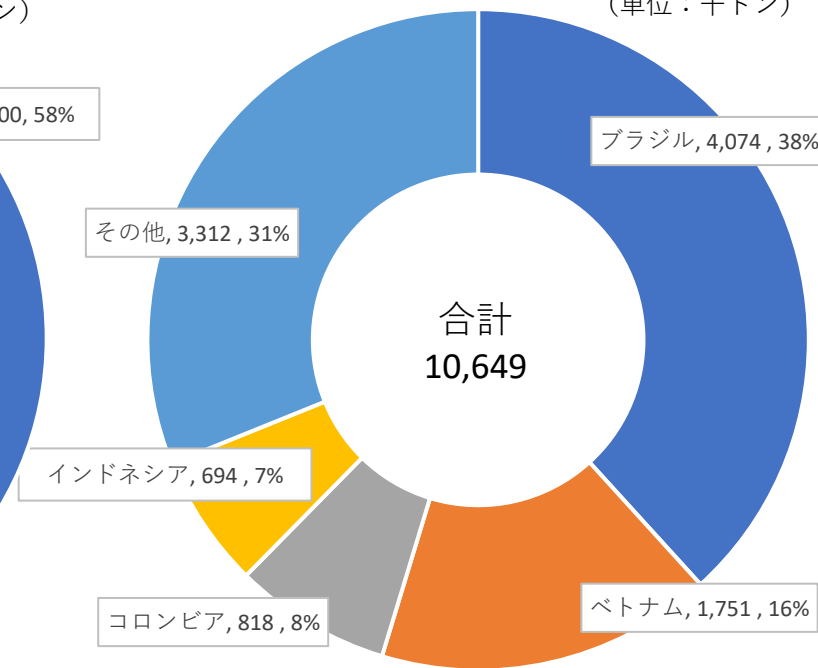
(単位：千トン)



※米国農務省 (PS&D)  
2026年5月時点

コーヒー生産量 (2024/25)

(単位：千トン)



※国際コーヒー機関 (ICO) 統計資料  
2025年7月時点

## ○我が国の主な輸入先の状況 (単位：千トン (2025年))

なたね	輸入量	割合
カナダ	1,722	80.1%
オーストラリア	429	19.9%
その他	0	0.0%
<b>合計</b>	<b>2,151</b>	<b>100.0%</b>

※財務省「貿易統計」 (HSコード：1205)

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	568	87.6%
インドネシア	79	12.2%
その他	1	0.2%
<b>合計</b>	<b>648</b>	<b>100.0%</b>

※財務省「貿易統計」 (HSコード：1511)

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	147	40.9%
ベトナム	90	25.1%
コロンビア	38	10.6%
その他	84	23.4%
<b>合計</b>	<b>359</b>	<b>100.0%</b>

※財務省「貿易統計」 (HSコード：0901.11~0901.12)





# 資料5 食品小売価格の動向

○ 令和8年4月の国内の主な加工食品の消費者物価指数は122.5～161.9(前年同月比は-1.1%～12.4%)の範囲内。

## 消費者物価指数(総務省)

【参考】

## 食品価格動向調査(農林水産省)

品目	R5 (2023)	R6 (2024)	R7 (2025)	直近6か月							上昇率 (前年 同月比)	品目	R5 (2023)	R6 (2024)	R7 (2025)	直近7か月							上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
	年平均	年平均	年平均	R7 11月	12月	R8 1月	2月	3月	4月	R7 11月			12月	R8 1月	2月	3月	4月	5月						
食パン	118.7	122.0	126.8	126.5	126.6	126.8	126.4	126.8	125.7	-1.1%	食パン	114.5	117.9	124.3	124.5	124.5	124.5	124.5	124.2	123.8	125.1	1.1%	0.9%	
即席めん	119.7	122.4	119.4	120.0	114.4	120.3	116.7	117.6	122.5	2.9%	即席めん	117.5	118.8	117.0	117.3	114.9	117.9	117.3	117.9	122.2	123.4	1.0%	5.2%	
豆腐	114.6	118.2	121.4	123.1	123.6	122.8	123.2	123.5	123.5	2.5%	豆腐	113.0	116.4	119.3	120.2	119.8	120.7	120.2	119.3	121.1	120.7	-0.3%	0.8%	
食用油 (キャノーラ油)	160.2	148.6	149.2	154.6	151.9	154.0	157.0	153.8	155.6	5.5%	食用油 (キャノーラ油)	159.4	145.8	142.0	144.1	144.1	144.1	145.4	146.7	146.4	144.5	-1.3%	3.0%	
みそ	108.1	113.6	119.5	128.4	128.3	129.3	128.8	130.2	130.4	12.4%	みそ	105.9	109.5	114.9	126.7	125.2	126.5	126.9	128.6	128.1	127.7	-0.3%	15.7%	
マヨネーズ	149.5	153.1	155.8	163.5	162.0	163.3	163.1	162.2	161.9	6.6%	マヨネーズ	139.8	141.2	142.5	149.2	148.9	150.3	151.3	149.6	150.9	152.0	0.7%	8.3%	
チーズ	131.1	133.0	139.1	137.5	134.5	140.3	143.4	142.4	146.5	3.4%	チーズ	126.5	127.0	133.8	136.2	129.8	133.7	139.7	140.2	140.7	131.7	-6.4%	-2.2%	
バター	108.6	119.7	130.4	139.1	138.1	139.1	137.6	138.6	139.1	11.8%	バター	108.0	119.3	131.4	140.1	137.4	138.9	137.4	138.9	139.4	139.8	0.3%	10.0%	
生鮮食品を 除く食料	112.6	116.9	125.2	128.3	128.2	128.4	128.5	128.9	128.7	4.1%	資料:農林水産省「食品価格動向調査」 注1:令和2年の平均値を100とした指数で表記。 注2:調査は原則、各都道府県10店舗で実施。													

資料:総務省「消費者物価指数」  
注:令和2年の平均値を100とした指数で表記。

## 資料6 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

○独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を『月報 畜産の情報』（[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_000168.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_000168.html)）で公表

○2026年6月号（5月25日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

### ◆牛肉

（米国）26年2月の牛肉輸出量は前年同月比19.2%減、26年予測は前年比8.2%減

（EU）牛肉生産量の減少は26年も継続の見込み

（豪州）牛肉輸出量は過去最高水準、中国のセーフガード措置に見直しの可能性

（ブラジル）25年の牛肉生産量および輸出量は過去最大

### ◆豚肉

（米国）26年2月の豚肉輸出量、日本など主要輸出国の強い引き合いにより1.6%増

（カナダ）26年2月の生体豚輸出頭数、米国の需要増から前年同月比6.3%増

（中国）豚肉価格、子豚価格は前月比で再び下落

### ◆牛乳・乳製品

（EU）26年2月の生乳出荷量は5.1%増と増加傾向が継続

（豪州）生乳生産量は3カ月連続で前年同月比増、輸出量は主要4品目で減少

（NZ）生乳生産量11カ月連続で前年同月を上回る

### ◆飼料穀物

（世界・トウモロコシ）25/26年度は生産量および輸入量の上方修正から期末在庫は上方修正

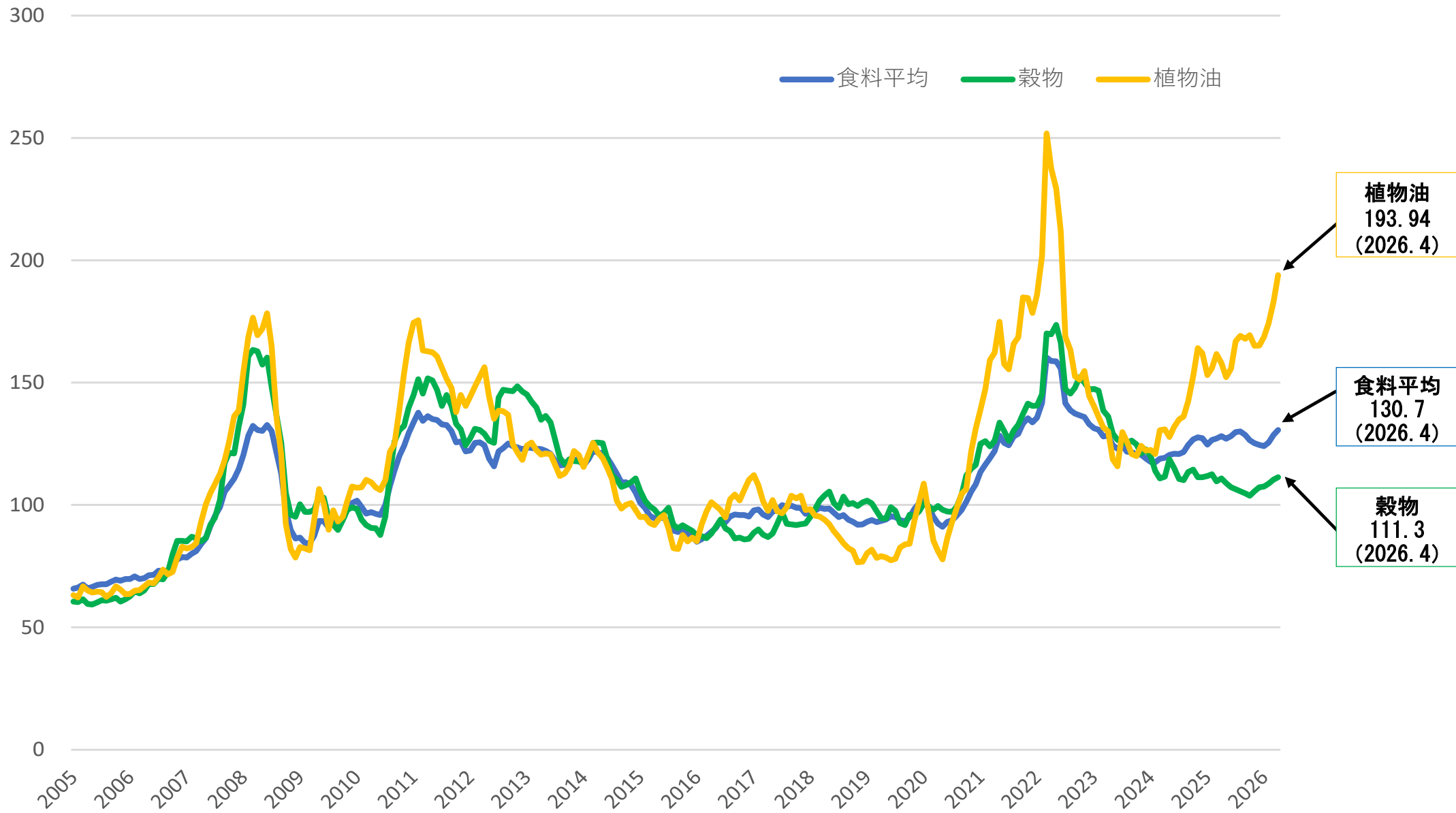
（世界・大豆）大豆消費量の上方修正などから期末在庫は下方修正

（米国）米国は生産量の増加などにより期末在庫は大幅増加

（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

# 資料 7 FAO食料価格指数

(2014-2016平均=100)



資料：FAO「Food Price Index」(2026.4)より作成

注：穀物はとうもろこし、小麦、コム等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

**(品目別需給編)**

# I 穀物

## 1 小麦

### (1) 国際的な小麦需給の概要(詳細は右表を参照)

<USDAの見通し> 2026/27年度

**生産量** 前年度比 ↓ 前月比 —

・トルコ、モロッコ、インド、イラン、シリア等で増加するものの、米国、EU、アルゼンチン、豪州、カナダ、カザフスタン、ロシア等で減少し、前年度から減少した。

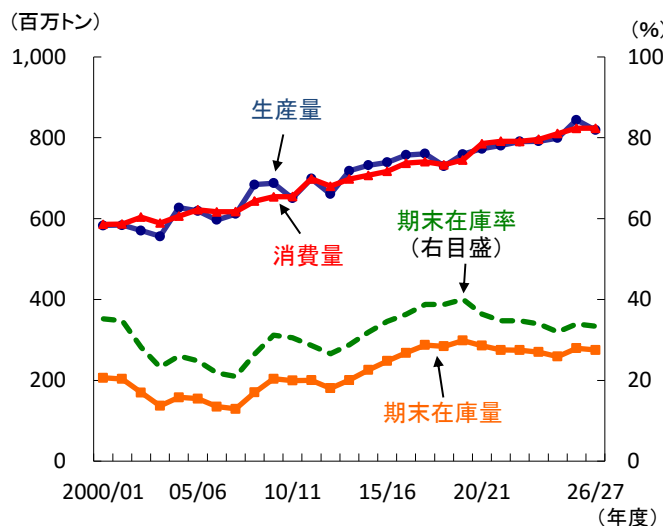
**消費量** 前年度比 ↓ 前月比 —

・インド等で増加するものの、中国、EU、ロシア、カザフスタン等で減少し、前年度から減少した。

**輸出量** 前年度比 ↓ 前月比 —

・インド、ロシア等で増加するものの、アルゼンチン、米国、豪州、カザフスタン、カナダ等で減少し、前年度から減少した。

**期末在庫量** 前年度比 ↓ 前月比 —



資料:USDA「PS&D」(2026.5.12)をもとに農林水産省にて作成

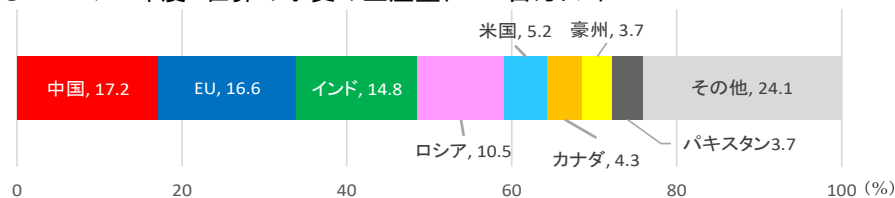
### ◎世界の小麦需給

(単位:百万トン)

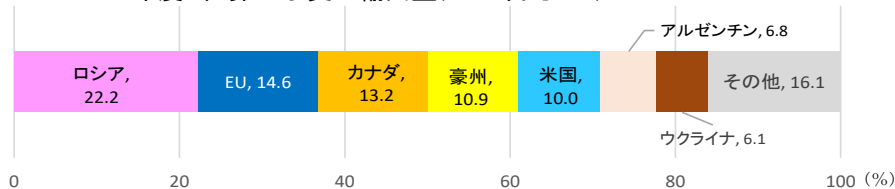
年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	799.3	843.8	819.1	—	▲ 2.9
消費量	810.3	823.5	823.2	—	▲ 0.04
うち飼料用	157.5	168.1	160.9	—	▲ 4.3
輸出量	210.5	223.7	211.7	—	▲ 5.4
輸入量	201.2	218.3	207.3	—	▲ 5.1
期末在庫量	258.9	279.2	275.0	—	▲ 1.5
期末在庫率	32.0%	33.9%	33.4%	—	▲ 0.5

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(12 May 2026)

#### ○ 2026/27年度 世界の小麦の生産量(819.1百万トン)



#### ○ 2026/27年度 世界の小麦の輸出量(211.7百万トン)



#### ○ 2026/27年度 世界の小麦の輸入量(207.3百万トン)



## (2) 国別の小麦の需給動向

### ＜ 米国 ＞ 2026/27 年度の生産量は前年度から 21.3%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の実生産量は、収穫面積及び単収が大きく減少することから前年度から 21.3%減、過去5年平均(49.3 百万トン)から 13.9%減の 42.5 百万トンとなる見込み(図)。

同「Wheat Outlook」(2026.4.13)によれば、2026/27 年度の作付面積は、5銘柄(Hard Red Winter(HRW)、Hard Red Spring(HRS)、Soft Red Winter(SRW)、White、Durum)全てで減少が見込まれている。2025/26 年度は、米国及び世界で多くの小麦が供給されたことから価格が下落し、米国農家の 2026/27 年度の小麦作付け意欲を低下させた。

同「Wheat Outlook」(2026.5.14)によれば、2026/27 年度の実生産量は 42.5 百万トンと、1972/73 年度(42.1 百万トン)以来の低水準となる見込み。このうち、冬小麦の実生産量は 28.5 百万トンと、前年度から 25%減となり 1965/66 年度以来の低水準となる見込み。作付面積の減少に加え、広範囲にわたる深刻な乾燥により単収も減少すると見込まれている。銘柄別には、特に HRW の生産量が 14.0 百万トンと前年度から 36%減と大きな影響を受けている。SRW は 8.2 百万トンと前年度から 15%減、White Winter も 6.3 百万トンと前年度から 5%減となる見込み。デュラム小麦及びその他の春小麦の実生産量も 14.0 百万トンと前年度から 12%減となる見込み。

同「Crop Progress」(2026.5.18)によれば、5月 17 日現在、2026/27 年度の冬小麦の作柄評価は、「良～優良」の割合が 27%と、乾燥により前年同期 52%を大きく下回っており、コロラド州(7%)、カンザス州(15%)、モンタナ州(26%)、ネブラスカ州(4%)、ノースカロライナ州(13%)、オクラホマ州(12%)、テキサス州(10%)の作柄評価が低くなっている。また、春小麦の作付進捗率は 73%と、前年同期 80%を下回っているものの、過去5年平均 66%を上回っている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の輸出量は、生産量の減少と 2025/26 年度の実輸出実績を受け前年度から 14.9%減、過去5年平均(21.8 百万トン)から 3.1%減の 21.1 百万トンとなる見込み。2025/26 年度の輸出量は、前月予測から 0.3 百万トン上方修正され 24.8 百万トンとなる見込み(図)。

同「Global Agricultural Trade System」によれば、2025/26 年度のうち 2025 年6月～2026 年3月の輸出量は、前年同期(1,757.7 万トン)に比べ 17.9%増の 2,071.7 万トン。輸出先国別には、メキシコ 358.9 万トン(17.3%)、フィリピン 212.5 万トン(10.3%)、日本 176.3 万トン(8.5%)の順となっている(表)。

USDA によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、前年度から 18.5%減の 20.7 百万トンとなる見込み。

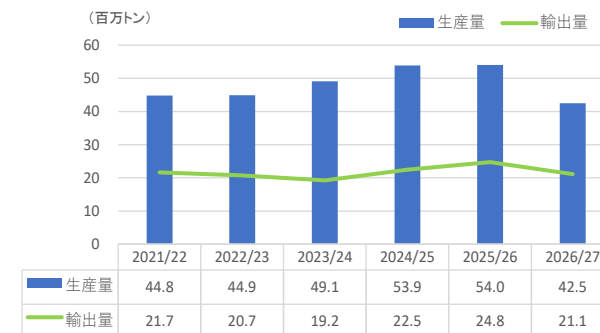
## 小麦－米国(冬小麦が全体の7割、春小麦は3割)

(単位:百万トン)

年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27(26年6月～27年5月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	53.9	54.0	42.5	—	▲ 21.3
消費量	31.1	30.5	29.9	—	▲ 1.8
うち飼料用	3.1	2.7	2.2	—	▲ 19.9
輸出量	22.5	24.8	21.1	—	▲ 14.9
輸入量	4.1	3.4	3.8	—	12.1
期末在庫量	23.3	25.4	20.7	—	▲ 18.5
期末在庫率	43.4%	46.1%	40.7%	—	▲ 5.4
(参考)					
収穫面積(百万ha)	15.63	15.07	13.30	—	▲ 11.7
単収(t/ha)	3.44	3.58	3.19	—	▲ 10.9

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、World Agricultural Production(12 May 2026)

### 図 米国の小麦の実生産量・輸出量の推移



資料:USDA「PS&D」(2026.5.12)をもとに農林水産省で作成

### 表 米国の小麦の輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年6月～2025年5月)			2024/25年度 (2024年6月～2025年3月)			2025/26年度 (2025年6月～2026年3月)		
国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
メキシコ	400.8	18.3	メキシコ	323.4	18.4	メキシコ	358.9	17.3
フィリピン	245.0	11.2	フィリピン	210.3	12.0	フィリピン	212.5	10.3
韓国	238.7	10.9	韓国	189.1	10.8	韓国	176.3	8.5
日本	215.1	9.8	日本	178.0	10.1	韓国	155.0	7.5
台湾	103.5	4.7	台湾	84.0	4.8	ナイジェリア	156.2	7.5
タイ	93.2	4.2	タイ	68.1	3.9	インドネシア	99.6	4.8
その他	897.2	40.9	その他	704.8	40.1	その他	913.2	44.1
計	2,193.5	100.0	計	1,757.7	100.0	計	2,071.7	100.0

資料:USDA「Global Agricultural Trade System」をもとに農林水産省で作成

## < カナダ > 2026/27 年度の生産量は前年度から 12.4%減少する見込み(AAFC)

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2026.5.21)によれば、2026/27 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収が減少することを受け史上最高の前年度から 12.4%減となるものの、過去5年平均(33.3 百万トン)から 5.1%増の 35.0 百万トンとなる見込み。種類別には、普通小麦は、史上最高の前年度(32.8 百万トン)から 11.4%減となるものの、過去5年平均(28.0 百万トン)から 3.8%増の 29.1 百万トンとなる見込み。デュラム小麦は、前年度(7.1 百万トン)から 16.7%減となるものの、過去5年平均(5.3 百万トン)から 11.8%増の 5.9 百万トンとなる見込み。2026/27 年度の作付面積は、前年度から 1.1%減の 10.82 百万ヘクタールとなる見込み。種類別には、普通小麦は、前年度から 0.7%減の 8.24 百万ヘクタール。デュラム小麦は、前年度から 2.3%減の 2.58 百万ヘクタール。

USDA「Grain and Feed Annual」(2026.4.28)によれば、4月 18 日の週末にアルバータ州、サスカチュワン州、マニトバ州、オンタリオ州の一部で雪が降り、冬のような気温となった。大雪と寒さが続いた地域では 2026/27 年度の春小麦の作付けが遅れる可能性がある。

【貿易情報・その他】AAFC によれば、2026/27 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 0.9%減の 28.6 百万トンとなる見込み。種類別には、普通小麦は前年度から 0.4%減の 23.2 百万トン。デュラム小麦は同 2.7%減の 5.4 百万トン。

カナダ穀物委員会(CGC)によれば、2025/26 年度のうち 2025 年8月～2026 年3月の輸出量は、前年同期(1,863.7 万トン)に比べ 2.3%増の 1,907.0 万トン。種類別には、普通小麦が前年同期(1,492.3 万トン)に比べ 2.2%増の 1,525.4 万トンで、輸出先国別には、中国 186.7 万トン(12.2%)、インドネシア 151.9 万トン(10.0%)、日本 143.0 万トン(9.4%)の順。デュラム小麦は前年同期(371.3 万トン)に比べ 2.8%増の 381.6 万トンで、輸出先国別には、アルジェリア 99.4 万トン(26.1%)、イタリア 76.1 万トン(20.0%)、モロッコ 59.8 万トン(15.7%)の順となっている(表)。AAFC によれば、2025 年8月～2026 年3月の輸出量増加は、普通小麦は中国、バングラデシュ、エクアドル及びスペインへの輸出増による。デュラム小麦はモロッコ、イタリア、米国の需要減をトルコ、アルジェリア、ナイジェリアの輸出増が上回ったことによる。

AAFC によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、期首在庫量の引上げを受け前月予測から 0.1 百万トン上方修正されたものの、前年度から 20.4%減の 5.9 百万トンとなる見込み。

## 小麦—カナダ(春小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27(26年8月～27年7月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	35.9	40.0 (40.0)	35.0 (35.0)	- (-)	▲12.4 (▲12.4)
消費量	8.3	8.9 (8.1)	8.9 (8.1)	- (-)	- (▲0.8)
うち飼料用	3.0	3.5 (3.6)	3.5 (3.6)	- (-)	- (1.0)
輸 出 量	29.4	30.0 (28.8)	28.0 (28.6)	- (-)	▲6.7 (▲0.9)
輸 入 量	0.6	0.6 (0.2)	0.6 (0.1)	- (-)	- (▲33.5)
期末在庫量	4.2	5.9 (7.4)	4.6 (5.9)	- (0.1)	▲21.3 (▲20.4)
期末在庫率	11.1%	15.1% (19.9%)	12.6% (16.0%)	- (0.3)	▲2.6 (▲3.9)
(参考)					
収穫面積(百万ha)	10.65	10.62 (10.62)	10.30 (10.60)	- (-)	▲3.0 (▲0.1)
単収(t/ha)	3.37	3.76 (3.76)	3.40 (3.30)	- (-)	▲9.6 (▲12.2)

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、World Agricultural Production(12 May 2026)

AAFC「Outlook For Principal Field Crops」(21 May 2026) ※( )書き。

### 表 カナダの小麦の輸出先国と輸出量

#### ○普通小麦

2024/25年度 (2024年8月～2025年7月)			2024/25年度 (2024年8月～2025年3月)			2025/26年度 (2025年8月～2026年3月)		
国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
インドネシア	243.2	10.3	インドネシア	162.5	10.9	中国	186.7	12.2
中国	206.1	8.7	日本	131.1	8.8	インドネシア	151.9	10.0
日本	191.0	8.1	コロンビア	102.9	6.9	日本	143.0	9.4
ペルー	164.2	6.9	ペルー	99.7	6.7	バングラデシュ	116.0	7.6
コロンビア	143.1	6.0	中国	93.0	6.2	エクアドル	90.1	5.9
その他	1,419.1	60.0	その他	903.3	60.5	その他	837.7	54.9
計	2,366.5	100.0	計	1,492.3	100.0	計	1,525.4	100.0

#### ○デュラム小麦

2024/25年度 (2024年8月～2025年7月)			2024/25年度 (2024年8月～2025年3月)			2025/26年度 (2025年8月～2026年3月)		
国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
アルジェリア	156.8	27.2	アルジェリア	78.1	21.0	アルジェリア	99.4	26.1
モロッコ	124.2	21.5	イタリア	76.1	20.5	イタリア	76.1	20.0
イタリア	83.8	14.5	モロッコ	73.2	19.7	モロッコ	59.8	15.7
米国	51.0	8.8	米国	43.2	11.6	米国	31.7	8.3
日本	22.7	3.9	スペイン	16.9	4.6	日本	15.4	4.0
その他	138.2	24.0	その他	83.9	22.6	その他	99.2	26.0
計	576.7	100.0	計	371.3	100.0	計	381.6	100.0

資料:CGC のデータをもとに農林水産省で作成

## < 豪州 > 2026/27 年度の生産量は前年度から 16.7%減少する見込み(USDA)

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の実産量は、史上3番目の前年度から 16.7%減、過去5年平均(34.6 百万トン)から 13.2%減の 30.0 百万トンとなる見込み(図)。

一方で、同「Grain and Feed Annual」(2026.4.28)によれば、USDA 海外農業局(FAS)キャンベラは、2026/27 年度の実産量を前年度から 19%減の 29.0 百万トンと予測しており、過去 10 年平均と同水準となっている。クイーンズランド州南部及びニューサウスウェールズ州北部における乾燥と中東情勢の緊迫化に伴う窒素肥料価格の急騰に対応した作付計画の調整により、収穫面積が前年度から 60 万ヘクタール(4.8%)減少するとともに、単収が高単収であった前年度から過去 10 年平均程度に減少すると見込んでいることによる。ウエスタンオーストラリア州(WA)、サウスオーストラリア州、ビクトリア州及びニューサウスウェールズ州中部・南部全域で 2026/27 年度の作付け前の降雨量は平年を上回り、作付開始時の土壌水分量は平年以上で前年同期と比べても大幅に改善されていた。大部分の小麦生産地域で生育初期は良好な条件に恵まれ、通常であれば高い単収が期待されるものの、豪州気象局は5～7月の小麦生産地域の降雨量が平年を下回ると予測しており、生産量の抑制要因となっている。2026年後半には、エルニーニョ現象が発生する可能性が高まっており、一般的には豪州東部に乾燥した天候をもたらす一方、豪州西部は概して影響が少ない。また、豪州政府の報告によれば、窒素肥料は高騰しているものの、作付けに必要な肥料の供給は確保されている。しかしながら、今後の追肥については、天候の不確実性もあり、生産者はより慎重な対応をとる可能性が高く、単収の下落圧力になると予測している。

西豪州穀物産業協会(GIWA)「Crop Report」(2026.5.8)によれば、WA 州では、ここ数週間、穀物地帯の大部分で有益な降雨に恵まれ、2026/27 年度の実産物の作付けは5月中旬までに終了する見込み。このうち、2026/27 年度の実産物の作付面積は、単収が平年並みとなった場合、現在の小麦価格では利益率が低いことを受け、前年度から約 14%減少し 372.5 万ヘクタールとなる見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の実輸出量は、生産量の減少を受け前年度から 11.5%減、過去5年平均(25.8 百万トン)から 10.7%減の 23.0 百万トンとなる見込み(図)。

ABARES「Trade dashboard」によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10 月～2026 年3月の輸出量は、前年同期(997.0 万トン)に比べ 19.5%増の 1,191.0 万トン。輸出先国別には、インドネシア 245.8 万トン(20.6%)、フィリピン 219.3 万トン(18.4%)、イエメン 98.7 万トン(8.3%)の順となっている(表)。

USDA によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、前年度から 27.5%減の 3.7 百万トンの見込み。

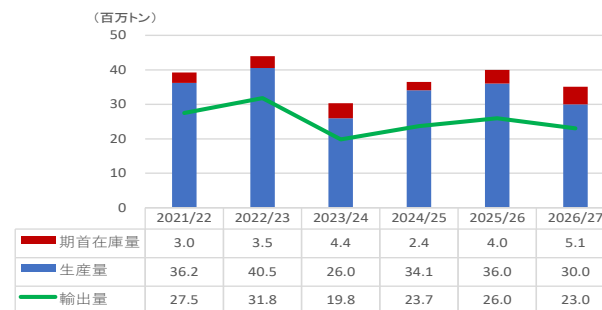
## 小麦一豪州(冬小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

年度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27(26年10月～27年9月)		
			予測値、( )はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	34.1	36.0	30.0 (31.8)	-	▲ 16.7
消費量	9.1	9.1	8.7 (8.6)	-	▲ 4.9
うち飼料用	5.6	5.5	5.0 (4.9)	-	▲ 9.1
輸出量	23.7	26.0	23.0 (25.0)	-	▲ 11.5
輸入量	0.2	0.2	0.2 (0.2)	-	▲ 4.3
期末在庫量	4.0	5.1	3.7 (3.2)	-	▲ 27.5
期末在庫率	12.2%	14.6%	11.7% 9.5%	-	▲ 2.9
(参考)					
収穫面積(百万ha)	13.06	12.40	11.80 (11.81)	-	▲ 4.8
単収(t/ha)	2.61	2.90	2.54 (2.79)	-	▲ 12.4

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、World Agricultural Production(12 May 2026)  
IGC「Grain Market Report」(23 April 2026)

## 図 豪州の小麦の期首在庫量・生産量・輸出量の推移



資料:USDA「PS&D」(2026.5.12)をもとに農林水産省で作成

## 表 豪州の小麦の輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年10月～2025年9月)			2024/25年度 (2024年10月～2025年3月)			2025/26年度 (2025年10月～2026年3月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
インドネシア	449.6	19.0	インドネシア	173.1	17.4	インドネシア	245.8	20.6
フィリピン	352.7	14.9	フィリピン	165.3	16.6	フィリピン	219.3	18.4
タイ	170.9	7.2	タイ	101.4	10.2	イエメン	98.7	8.3
ベトナム	157.4	6.7	ベトナム	77.1	7.7	中国	78.5	6.6
韓国	146.5	6.2	イエメン	68.7	6.9	ベトナム	63.7	5.3
イエメン	137.6	5.8	韓国	58.6	5.9	韓国	58.5	4.9
その他	946.6	40.1	その他	352.8	35.4	その他	426.5	35.8
計	2,361.3	100.0	計	997.0	100.0	計	1,191.0	100.0

資料: ABARES「Trade dashboard」をもとに農林水産省で作成

## < EU27 > 2026/27 年度の生産量は前年度から 5.6%減少する見込み(EC)

【生育・生産状況】欧州委員会(EC)「EU Cereals Balance Sheets」(2026.4.30)によれば、2026/27 年度の実生産量は、収穫面積及び単収の引上げを受け前月予測から 1.5 百万トン上方修正されたものの、生育に好ましい気象条件により増産となった前年度から 5.6%減、過去5年平均(133.0 百万トン)から 1.7%増の 135.2 百万トンとなる見込み。種類別には、普通小麦が前月予測から 1.5 百万トン上方修正されたものの、前年度から 5.7%減、過去5年平均(125.2 百万トン)から 1.7%増の 127.3 百万トンとなる見込み。デュラム小麦は、前月予測からわずかに上方修正されたものの、前年度から 3.6%減、過去5年平均(7.7 百万トン)から 1.1%増の 7.8 百万トンとなる見込み(図)。

USDA「World Agricultural Production」(2026.5.12)によれば、2026/27 年度の実生産量について、欧州の中央及び南東部では 2025 年秋の豪雨により作付けが遅延し作付面積が減少した。また、農家は小麦よりも利益率の高いひまわりや果樹へ作付けをシフトしている。3月、4月の乾燥により土壌水分が減少したものの、5月上旬の降雨により、特に乾燥が深刻であった東部諸国で恵みの雨となった。EU 全体で小麦の生育状況は良好となっている。

【貿易情報・その他】EC によれば、2026/27 年度の消費量は、前月予測からわずかに上方修正され、前年度と同水準の 112.5 百万トンとなる見込み。

EC によれば、2026/27 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 4.2%増の 5.8 百万トンとなる見込み。同「Cereals exports and imports」(2026.4.18)によれば、2025/26 年度のうち 2025 年7月～2026 年2月の輸入量は、前年同期(740.4 万トン)に比べ 42.7%減の 423.9 万トン。種類別には、普通小麦が前年同期に比べ 49.8%減の 306.1 万トン。デュラム小麦は同 9.8%減の 117.8 万トン(表)。ロシアのウクライナ侵攻以降、ウクライナからの輸入割合が大きく増加していたが、関税割当制度の再開等により同国からの輸入割合は大きく減少した。

2026/27 年度の輸出量は、前月予測から 0.3 百万トン下方修正されたものの、前年度から 9.6%増の 30.6 百万トンとなる見込み。同「Cereals exports and imports」(2026.4.18)によれば、2025/26 年度のうち 2025 年7月～2026 年2月の輸出量は、前年同期(1,779.9 万トン)に比べ 13.8%増の 2,025.7 万トン。種類別には、普通小麦が前年同期に比べ 14.1%増の 1,957.7 万トン、デュラム小麦が同 5.8%増の 68.1 万トン(表)。

2026/27 年度の期末在庫量は、生産量の引上げ及び輸出量の引下げ等を受け前月予測から 3.8 百万トン上方修正されたものの、前年度から 12.3%減の 15.1 百万トンとなる見込み。

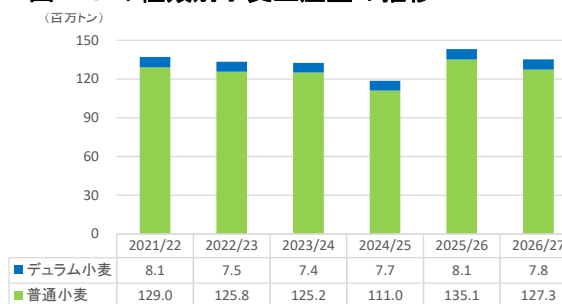
## 小麦—EU27 (冬小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

年度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27 (26年7月～27年6月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	121.1	145.1 (143.2)	136.0 (135.2)	- (1.5)	▲6.3 (▲5.6)
消費量	108.5	115.5 (112.5)	113.8 (112.5)	- (0.01)	▲1.5 (0.04)
うち飼料用	44.5	51.0 (47.1)	49.0 (47.1)	- (-)	▲3.9 (-)
輸出量	27.9	30.5 (27.9)	31.0 (30.6)	- (▲0.3)	1.6 (9.6)
輸入量	10.7	6.5 (5.6)	6.5 (5.8)	- (-)	- (4.2)
期末在庫量	11.3	16.9 (17.2)	14.6 (15.1)	- (3.8)	▲13.3 (▲12.3)
期末在庫率	8.3%	11.6% (12.3%)	10.1% (10.6%)	- (2.6)	▲1.5 (▲1.7)

(参考)  
 収穫面積(百万ha) 22.71 23.96 (23.73) 23.60 (23.58) - (0.005) ▲1.5 (▲0.6)  
 単収(t/ha) 5.33 6.06 (6.04) 5.76 (5.73) - (0.06) ▲5.0 (▲5.0)  
 資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,「World Agricultural Production」(12 May 2026)  
 EC「EU Cereals Balance Sheets」(30 April 2026) ※( )書き。

## 図 EU の種類別小麦生産量の推移



資料:EC「EU cereals production (usable), area and yield」(2026.4.30)をもとに農林水産省で作成

## 表 EU の小麦の輸出量及び輸入量

	〇輸出量				〇輸入量							
	2024/25年度 (2024年7月～2025年6月)		2025/26年度 (2025年7月～2026年6月)		2024/25年度 (2024年7月～2025年6月)		2025/26年度 (2025年7月～2026年6月)					
	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)
普通小麦	モロッコ	342.2	13.5	モロッコ	281.9	14.4	ウクライナ	450.4	56.0	カナダ	115.0	37.6
	アルゼンチン	324.1	12.8	アルゼンチン	217.2	11.1	カナダ	134.4	16.7	ウクライナ	53.7	17.5
	ナイジェリア	281.5	11.1	エジプト	164.6	8.4	モルドバ	63.1	7.8	モルドバ	46.6	15.2
	その他	1,593.8	62.7	その他	1,293.9	66.1	その他	155.7	19.4	その他	90.8	29.7
	<b>小計</b>	<b>2,541.8</b>	<b>100</b>	<b>小計</b>	<b>1,957.7</b>	<b>100</b>	<b>小計</b>	<b>803.6</b>	<b>100</b>	<b>小計</b>	<b>306.1</b>	<b>100</b>
デュラム小麦	チェコ	21.4	25.5	サウジアラビア	19.1	28.0	カナダ	108.2	52.4	カナダ	70.5	59.9
	アルゼンチン	11.3	13.5	チェコ	7.6	11.2	トルコ	34.3	16.6	カザフスタン	19.9	16.9
	ポーランド	10.0	11.9	マダ	5.1	7.5	カザフスタン	29.6	14.3	米国	15.3	13.0
	その他	41.2	49.1	その他	36.3	53.3	その他	34.4	16.7	その他	12.1	10.3
	<b>小計</b>	<b>84.0</b>	<b>100</b>	<b>小計</b>	<b>68.1</b>	<b>100</b>	<b>小計</b>	<b>206.5</b>	<b>100</b>	<b>小計</b>	<b>117.8</b>	<b>100</b>
	<b>小麦計</b>	<b>2,625.8</b>		<b>小麦計</b>	<b>2,025.7</b>		<b>小麦計</b>	<b>1,010.1</b>		<b>小麦計</b>	<b>423.9</b>	

資料:EC「Cereals exports and imports」(2026.4.18)をもとに農林水産省で作成

## < ロシア > 2026/27 年度の生産量は前年度から 4.8%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の実産量(クリミア地域分を含まず)は、単収が減少することを受け前年度から 4.8%減、過去5年平均(86.1 百万トン)から 0.1%減の 86.0 百万トンとなるものの、史上4番目となる見込み(図)。種類別には、冬小麦は、前年度(63.0 百万トン)から 3.2%減の 61.0 百万トン。春小麦は、前年度(27.3 百万トン)から 8.4%減の 25.0 百万トンとなる見込み。

同「World Agricultural Production」(2026.5.12)によれば、2026/27 年度の実産量は 3.27 トン/ヘクタールと前年度から 5%減となるものの、過去5年平均からは 6%増となる見込み。収穫面積は 26.3 百万ヘクタールと前年度同となるものの、過去5年平均からは 6%減となる見込み。2026/27 年度の冬小麦は、16.3 百万ヘクタールに作付けされた。2025 年秋の作付けは平年を下回る降水量の中で開始されたものの、冬にかけ降水量は改善した。冬期の適切な気温と十分な降雪により、小麦等の冬作物は良好に越冬した。この結果、越冬後、生育不良となった割合は約 3%に抑えられた。3月から4月上旬の生育条件は良好で、土壌水分量も十分であったものの、4月下旬の寒波は生育初期の冬作物の生育に悪影響を与えるおそれがある。単収は5、6月の天候に大きく左右されることから今後の天候条件が重要となる。2026/27 年度の春小麦は、春の遅霜や降雪、過度な土壌水分により作付けが遅延している。4月 30 日現在の作付面積は 0.4 百万ヘクタールと前年同期 2.1 百万ヘクタールと比べ大幅に遅れている。今後も悪天候が続いた場合、作付面積の減少や生育期間の短縮による単収の減少のおそれがある。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の輸出量は、前年度から 2.2%増、過去5年平均(44.5 百万トン)から 3.3%増の 47.0 百万トンとなり、史上3番目の輸出量となる見込み(図)。

ロシア連邦政府は、2025 年 12 月 24 日、2025/26 年度後半(2026 年 2 月 15 日～6 月 30 日)に穀物(小麦・メスリン、大麦及びとうもろこし)に設定される輸出枠を 2,000 万トン(前年度は小麦・メスリンのみ 1,060 万トン)とすることを発表した。その後、2026 年 4 月 10 日、ロシア連邦統計庁が 2025 年の穀物収穫量を 1億 4,120 万トンに上方修正したことを受け、国内市場への供給も十分に確保できていることから、2026 年の穀物輸出割当に 500 万トンの追加を決定した。

現地情報会社によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 7 月～2026 年 4 月の輸出量は、前年同期(3,957.5 万トン)に比べ 0.7%増の 3,984.3 万トン。輸出先国別には、エジプト 832.5 万トン(20.9%)、トルコ 586.1 万トン(14.7%)、スーダン 199.0 万トン(5.0%)の順(表)。

USDA によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、前年度から 6.7%減の 12.6 百万トンとなる見込み。

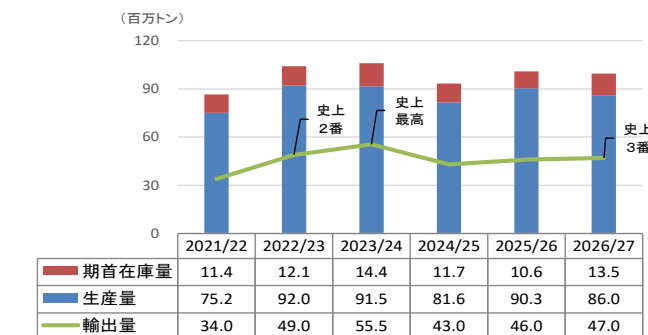
## 小麦—ロシア(主産地の欧州部で冬小麦、シベリアで春小麦を栽培)

(単位:百万トン)

年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27 (26年7月～27年6月)		
			予測値、( )はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	81.6	90.3	86.0 (86.4)	—	▲ 4.8
消費量	40.0	41.7	40.2 (41.4)	—	▲ 3.6
うち飼料用	17.0	18.5	17.0 (17.8)	—	▲ 8.1
輸 出 量	43.0	46.0	47.0 (45.9)	—	▲ 2.2
輸 入 量	0.3	0.3	0.3 (1.0)	—	—
期末在庫量	10.6	13.5	12.6 (13.7)	—	▲ 6.7
期末在庫率	12.8%	15.4%	14.4% (15.7%)	—	▲ 0.9
(参考)					
収穫面積(百万ha)	27.80	26.30	26.30 (25.60)	—	—
単収(t/ha)	2.94	3.43	3.27 (3.34)	—	▲ 4.7

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、World Agricultural Production(12 May 2026)  
IGC「Grain Market Report」(23 April 2026)

## 図 ロシアの小麦の期首在庫量・生産量・輸出量の推移



資料:USDA「PS&D」(2026.5.12)をもとに農林水産省で作成

## 表 ロシアの小麦の輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2023年7月～2024年6月)			2024/25年度 (2024年7月～2025年4月)			2025/26年度 (2025年7月～2026年4月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
エジプト	821.2	20.2	エジプト	835.4	21.1	エジプト	832.5	20.9
トルコ	310.4	7.6	トルコ	268.5	6.8	トルコ	586.1	14.7
バングラデシュ	277.3	6.8	バングラデシュ	258.6	6.5	スーダン	199.0	5.0
アルジェリア	173.4	4.3	サウジアラビア	178.0	4.5	イスラエル	181.6	4.6
イスラエル	163.9	4.0	アルジェリア	175.3	4.4	イラン	174.5	4.4
その他	2,327.2	57.1	その他	2,241.7	56.6	その他	2,010.6	50.5
合計	4,073.4	100.0	合計	3,957.5	100.0	合計	3,984.3	100.0

資料:現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

## <ウクライナ> 2026/27年度の生産量は前年度から4.6%減少する見込み

【生育・生産状況】USDAによれば、2026/27年度(クリミア地域分を含む)の生産量(収穫面積が減少することから前年度から4.6%減、ロシアの侵攻前の過去5年平均(2017/18～2021/22年度、27.9百万トン)から17.6%減の23.0百万トンとなる見込み(図)。

現地情報会社によれば、4月は出穂期に向け多くの水分を必要とする冬小麦にとって好ましい降水量となった。一方で、4月中旬から下旬には寒波の到来により気温が低下した。低温が長く続いた場合、生育に悪影響を与えるおそれがある。

ウクライナ経済・環境・農業省によれば、5月11日現在、2026/27年度の春小麦の作付面積は17.9万ヘクタールで作付進捗率は96%となっている。

現地報道によれば、肥料高騰による施肥の節約により、穀物生産量が大きく減少するおそれがあるとしている。  
【貿易情報・その他】USDAによれば、2026/27年度の輸出量は、前年度からの多くの繰越在庫と飼料市場でのシェア拡大を受け前年度から4.0%増となるものの、ロシアの侵攻前の過去5年平均(18.1百万トン)から28.2%減の13.0百万トンとなる見込み(図)。

EUは、ウクライナ産品の輸入に関し、2022年6月から輸入関税及び関税割当を停止してきた。当該措置は2025年6月5日に失効し、「深化した包括的自由貿易協定(DCFTA)」に基づき、関税割当制度等の適用を再開した。その後、6月30日に新たな貿易措置についてウクライナと合意し、EUとウクライナの連合委員会は10月14日に合意を承認し、10月29日に発効となった。これにより、小麦及びメスリン等に対する年間輸入割当数量は130万トン、小麦粉等は同3万トンに見直された。

現地情報会社によれば、2025/26年度のうち2025年7月～2026年4月の輸出量は、前年同期(1,383.7万トン)に比べ19.1%減の1,119.7万トンとなっている。輸出先国別には、エジプト333.1万トン(29.8%)、アルジェリア193.7万トン(17.3%)、インドネシア146.8万トン(13.1%)の順(表)。前年度からの減少は、輸出先第1位であったスペインへの輸出が大きく減少したことや、主要輸出先である北アフリカや中東におけるロシア産小麦等との競合が要因。輸出の減少に伴い、期末在庫量が大きく増加すると見込まれており、中東情勢の緊迫化によるコスト増加も相まってウクライナの穀物生産が抑制されるおそれがある。

USDAによれば、2026/27年度の期末在庫量は、前年度から24.8%増の4.5百万トンとなる見込み。

## 小麦－ウクライナ(主に冬小麦を栽培)

(単位:百万トン)

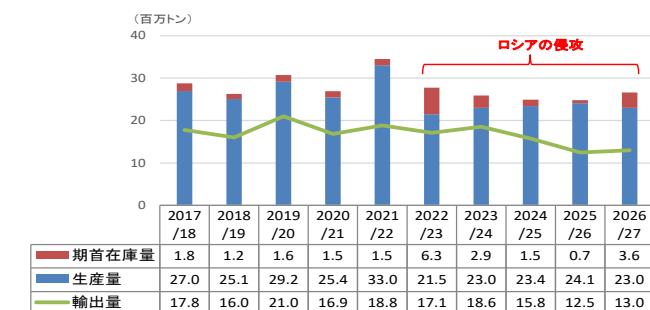
年度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27(26年7月～27年6月)		
			予測値、( )はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	23.4	24.1	23.0 (25.0)	—	▲ 4.6
消費量	8.5	8.8	9.2 (10.1)	—	4.5
うち飼料用	3.6	3.8	4.2 (2.9)	—	10.5
輸出量	15.8	12.5	13.0 (16.0)	—	4.0
輸入量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	—	—
期末在庫量	0.7	3.6	4.5 (1.9)	—	24.8
期末在庫率	3.0%	17.0%	20.4% (7.4%)	—	3.4

(参考)

収穫面積(百万ha)	5.20	5.65	5.20 (6.20)	—	▲ 8.0
単収(t/ha)	4.50	4.27	4.42 (4.03)	—	3.5

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,「World Agricultural Production」(12 May 2026)  
IGC「Grain Market Report」(23 April 2026)

図 ウクライナの小麦の期首在庫量・生産量・輸出量の推移



資料:USDA「PS&D」(2026.5.12)をもとに農林水産省で作成

表 ウクライナの小麦の輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年7月～2025年6月)			2024/25年度 (2024年7月～2025年4月)			2025/26年度 (2025年7月～2026年4月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
スペイン	326.1	20.9	スペイン	324.4	23.4	エジプト	333.1	29.8
エジプト	211.1	13.5	エジプト	167.7	12.1	アルジェリア	193.7	17.3
アルジェリア	195.1	12.5	アルジェリア	159.2	11.5	インドネシア	146.8	13.1
インドネシア	158.8	10.2	インドネシア	156.1	11.3	イエメン	87.4	7.8
ベトナム	104.7	6.7	ベトナム	88.6	6.4	スペイン	58.5	5.2
その他	566.5	36.3	その他	487.7	35.2	その他	300.2	26.8
合計	1,562.2	100.0	合計	1,383.7	100.0	合計	1,119.7	100.0

資料:APK-Inform Agencyのデータをもとに農林水産省で作成

## < 中国 > 2026/27年度の生産量は前年度から0.7%増加する見込み

【生育・生産状況】USDAによれば、2026/27年度の生産量は、前年度から0.7%増、過去5年平均(138.3百万トン)から2.0%増の141.0百万トンとなり、史上最高となる見込み(図)。

中国中央气象台「全国農業気象週報」(2026.5.11)によれば、5月3～9日の週の2026/27年度冬小麦は、河南省、山東省、河北省、江蘇省、陝西省等で主に出穂期から開花期、一部で乳熟期を迎えている。湖北省や安徽省でも開花期から乳熟期に移行する地点がみられ、四川省及び雲南省では成熟期に入った圃場も確認されるなど、収量に重要な開花後の生育段階にある。多くの省で適切な日照及び気温に恵まれ生育はおおむね順調となっている。一方で、河北省及び山西省で乾燥、河南省で強風による倒伏が発生しており、今後の気温及び降雨の状況に注意が必要となっている。

同「作物生育期監視」(2026.5.11)によれば、5月3～9日の週の2026/27年度春小麦は、作付期から穂ばらみ期を迎えている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2026/27年度の消費量は、前年度及び過去5年平均(149.9百万トン)から1.3%減の148.0百万トンとなる見込み(図)。

2026/27年度の輸入量は、前年度同となるものの、過去5年平均(9.3百万トン)から35.7%減の6.0百万トンとなる見込み(図)。

同「Grain and Feed Update」(2026.1.27)によれば、2025年12月にはロシア産小麦ふすまの市場開放が発表された。また、2025年末までに中国は米国産小麦約20万トンの購入を予約している。トレーダーらは、2025/26年度の中国のとうもろこしの生産量は過去最高を記録したものの、同国のとうもろこし及び春小麦の品質が大幅に低下しているため、更なる輸入が必要になるとみている。

2026年5月14日の米中首脳会談後、ホワイトハウスは、5月17日付のファクトシートで、中国が2026年から2028年の各年に少なくとも170億ドルの米国農産物を購入すると発表した。なお、具体的な品目は公表されていない。

中国海関統計によれば、2025/26年度のうち2025年7月～2026年3月の輸入量は、前年同期(220.1万トン)に比べ73.0%増の380.7万トンとなっている。輸入先国別には、カナダ230.1万トン(60.5%)、豪州95.2万トン(25.0%)、アルゼンチン28.0万トン(7.4%)の順となっている(表)。

USDAによれば、2026/27年度の期末在庫量は、前年度から1.6%減の120.8百万トンとなる見込み(図)。

## 小麦—中国(冬小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

年度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27(26年7月～27年6月)			
			予測値、( )はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	140.1	140.1	141.0 (140.5)	—	0.7	
消費量	150.0	150.0	148.0 (146.9)	—	▲ 1.3	
うち飼料用	33.0	33.0	31.0 (28.0)	—	▲ 6.1	
輸出入量	1.0	1.0	1.0 (1.2)	—	—	
輸入量	4.2	6.0	6.0 (6.3)	—	—	
期末在庫量	127.8	122.8	120.8 (134.3)	—	▲ 1.6	
期末在庫率	84.6%	81.4%	81.1% (90.7%)	—	▲ 0.3	

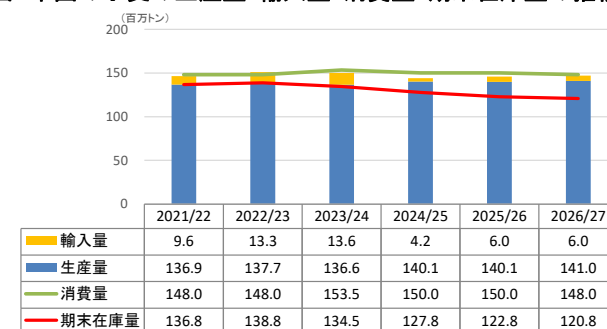
(参考)

収穫面積(百万ha)	23.59	23.58	23.60 (23.59)	—	0.1
単収(t/ha)	5.94	5.94	5.97 (5.96)	—	0.5

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「World Agricultural Production」(12 May 2026)

IGC「Grain Market Report」(23 April 2026)

## 図 中国の小麦の生産量・輸入量・消費量・期末在庫量の推移



資料:USDA「PS&D」(2026.5.12)をもとに農林水産省で作成

## 表 中国の小麦の輸入先国と輸入量

国名	2024/25年度 (2024年7月～2025年6月)		2024/25年度 (2024年7月～2025年3月)		2025/26年度 (2025年7月～2026年3月)			
	輸入量 (万トン)	シェア (%)	輸入量 (万トン)	シェア (%)	輸入量 (万トン)	シェア (%)		
カナダ	185.9	48.2	カナダ	87.4	39.7	カナダ	230.1	60.5
豪州	86.9	22.5	米国	46.2	21.0	豪州	95.2	25.0
米国	46.2	12.0	カザフスタン	28.8	13.1	アルゼンチン	28.0	7.4
カザフスタン	30.8	8.0	ロシア	27.6	12.5	ロシア	11.6	3.0
ロシア	29.7	7.7	豪州	25.3	11.5	米国	6.9	1.8
日本	4.9	1.3	日本	3.7	1.7	カザフスタン	4.6	1.2
その他	1.5	0.4	その他	1.1	0.5	その他	4.4	1.1
合計	385.9	100.0	合計	220.1	100.0	合計	380.7	100.0

資料:中国海関統計をもとに農林水産省で作成

## 2 とうもろこし

### (1) 国際的なとうもろこし需給の概要(詳細は右表を参照)

<USDAの見通し> 2026/27年度

**生産量** 前年度比 ↓ 前月比 —

・中国、ブラジル等で増加するものの、米国、アルゼンチン、南アフリカ、メキシコ、ウクライナ、トルコ、パラグアイ、カナダ等で減少し、前年度から減少した。

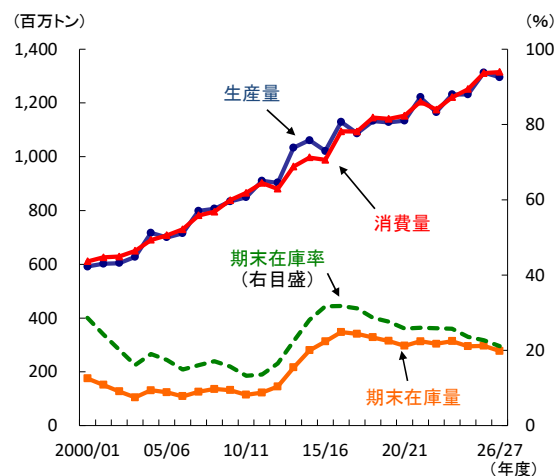
**消費量** 前年度比 ↑ 前月比 —

・米国、トルコ、サウジアラビア等で減少するものの、中国、ブラジル、ベトナム、インド、メキシコ、EU、ロシア等で増加し、前年度から増加した。史上最高の見込み。

**輸出量** 前年度比 ↓ 前月比 —

・ブラジル、ウクライナ、セルビア、ロシア等で増加するものの、アルゼンチン、米国、南アフリカ、パラグアイ等で減少し、前年度から減少した。

**期末在庫量** 前年度比 ↓ 前月比 —



資料:USDA「PS&D」(2026.5.12)をもとに農林水産省で作成

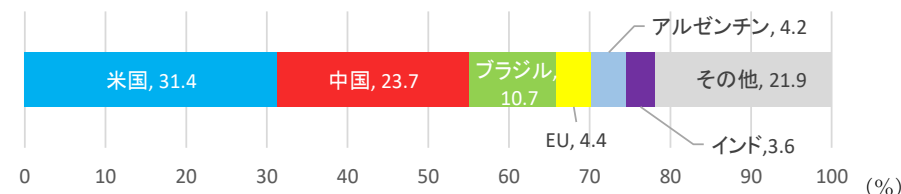
### ◎世界のとうもろこし需給

(単位:百万トン)

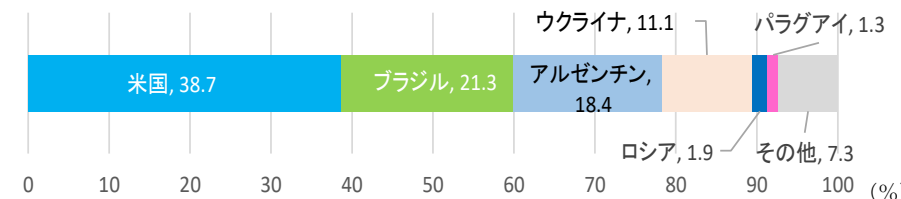
年度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	1,232.1	1,312.7	1,295.4	-	▲ 1.3
消費量	1,251.3	1,310.5	1,314.8	-	0.3
うち飼料用	784.3	819.2	829.3	-	1.2
輸出量	187.3	213.6	206.9	-	▲ 3.1
輸入量	186.1	195.9	198.6	-	1.4
期末在庫量	294.8	297.0	277.5	-	▲ 6.5
期末在庫率	23.6%	22.7%	21.1%	-	▲ 1.5

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(12 May 2026)

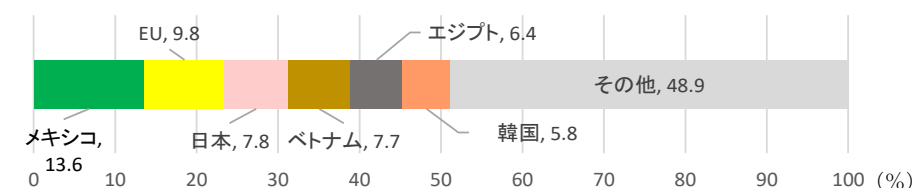
#### ○ 2026/27年度 世界のとうもろこしの生産量 (1,295.4 百万トン)



#### ○ 2026/27年度 世界のとうもろこしの輸出量 (206.9 百万トン)



#### ○ 2026/27年度 世界のとうもろこしの輸入量 (198.6 百万トン)



## (2) 国別のとうもろこしの需給動向

### < 米国 > 2026/27 年度の生産量は、前年度から 6.0%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の実績は、収穫面積及び単収の減少を受け前年度から 6.0%減少するものの、過去5年平均(385.7 百万トン)から 5.3%増の 406.3 百万トンと史上2番目の見込み。同「Grain: World Markets and Trade」(2026.5.12)によれば、肥料コストの上昇を背景として、より高い収益性が見込まれる大豆に作付けがシフトし、とうもろこしの生産量は減少する見込み。

同「Crop Progress」(2026.5.18)によれば、5月 17 日現在、とうもろこしの作付進捗率は 76%と、前年同期(76%)と同水準であり、過去5年平均(70%)を上回っている。また、出芽進捗率は 39%と、前年同期(47%)を下回っているものの過去5年平均(37%)を上回っている。

【需要状況】USDA によれば、2026/27 年度の消費量は、飼料用消費の減少等を受け、前年度から 0.8%減の 331.6 百万トンと史上2番目の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の輸出量は、前年度から 4.5%減の 80.0 百万トンと史上2番目となる見込み。同「Grain: World Markets and Trade」(2026.5.12)によれば、米国の輸出量は、他の輸出国との競争や輸入需要の縮小により、前年度からわずかに減少する見込み。

同「Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals」によれば、2025/26 年度のうち 2025 年9月～2026 年4月の輸出量は、前年同期(4,236.7 万トン)に比べ 31.0%増の 5,549.4 万トン。輸先国別には、メキシコ 1,630.8 万トン(29.4%)、日本 987.8 万トン(17.8%)、韓国 582.5 万トン(10.5%)の順となっている(表)。

同「Grain: World Markets and Trade」(2026.5.12)によれば、5月7日現在の輸出価格は、アルゼンチンはベトナムやエジプトといった主要な輸先国からの堅調な需要により前月から3ドル/トン上昇し 212 ドル/トン、ブラジルは他の輸出国の価格上昇の影響を受け4ドル/トン上昇し 229 ドル/トン、米国は米国産とうもろこしに対する世界的な需要が引き続き旺盛であることを受け前月から8ドル/トン上昇し 223 ドル/トンとなった(図)。

USDA によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、生産量の減少を受け前年度から 8.6%減となるものの、過去5年平均(41.6 百万トン)から 19.4%増の 49.7 百万トンとなる見込み。期末在庫率は前年度から 0.9 ポイント減の 12.1%となる見込み。

## とうもろこしー米国

(概ね4～5月に作付けされ、9～11月に収穫される。)

年度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27 (26年9月～27年8月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	378.3	432.3	406.3	-	▲ 6.0
消費量	311.6	334.2	331.6	-	▲ 0.8
うち飼料用	138.5	157.5	155.0	-	▲ 1.6
エタノール用等	138.1	142.2	142.2	-	-
輸出量	72.6	83.8	80.0	-	▲ 4.5
輸入量	0.6	0.6	0.6	-	-
期末在庫量	39.4	54.4	49.7	-	▲ 8.6
期末在庫率	10.3%	13.0%	12.1%	-	▲ 0.9

(参考)  
 収穫面積(百万ha) 33.61 36.93 35.37 - ▲ 4.2  
 単収(t/ha) 11.26 11.71 11.49 - ▲ 1.9

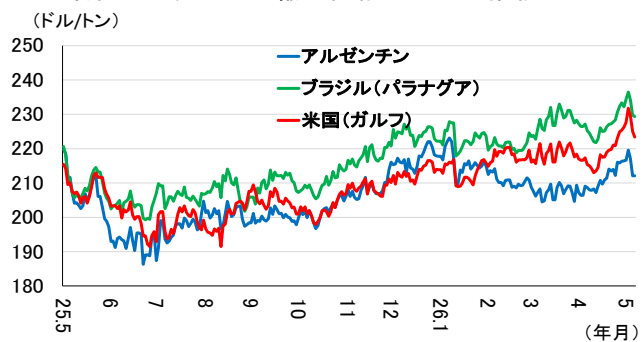
資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、  
 「World Agricultural Production」(12 May 2026)

### 表 米国のとうもろこしの輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年9月～2025年8月)			2024/25年度 (2024年9月～2025年4月)			2025/26年度 (2025年9月～2026年4月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
メキシコ	2,212.2	32.6	メキシコ	1,418.1	33.5	メキシコ	1,630.8	29.4
日本	1,344.0	19.8	日本	813.1	19.2	日本	987.8	17.8
コロンビア	743.7	11.0	コロンビア	503.0	11.9	韓国	582.5	10.5
韓国	617.4	9.1	韓国	339.5	8.0	コロンビア	557.7	10.0
台湾	241.7	3.6	スペイン	191.5	4.5	スペイン	313.6	5.7
その他	1,617.3	23.9	その他	971.5	22.9	その他	1,476.9	26.6
合計	6,776.2	100.0	合計	4,236.7	100.0	合計	5,549.4	100.0

資料:USDA「Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals」をもとに農林水産省で作成

### 図 各国のとうもろこし輸出価格(FOB)の推移



資料:IGC のデータをもとに農林水産省で作成

## < ブラジル > 2026/27 年度の生産量は、前年度から 3.0%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の実績量は、収穫面積及び単収の増加を受け前年度から 3.0%増、過去5年平均(128.6 百万トン)から 8.1%増の 139.0 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル食料供給公社(CONAB)の月例報告(2026.5.14)によれば、2025/26 年度の実績量は、単収の減少を受け前年度から 0.7%減の 140.2 百万トンとなる見込み。作期別には、夏とうもろこし(第1期作)の実績量は、作付面積及び単収の増加を受け前年度から 14.1%増の 28.5 百万トンとなる見込み。収穫進捗率は5月上旬時点で 71.5%に達した。気象条件に恵まれたこと等により大半の州で良好な生産量となっている。冬とうもろこし(第2・3期作)のうち第2期作の実績量は、単収の減少を受け前年度から 4.2%減の 108.5 百万トンとなる見込み。作付けは4月末で完了した。4月初旬までは、ほとんどの地域で生育状況は良好であったものの、その後の降雨量の減少が、マツト・グロッソ州等で悪影響を与えた。第3期作の実績量は、前年度から 8.7%増の 3.3 百万トンとなる見込み(図)。現在、作付けが進んでおり、6月中旬に完了する見込み。

【需要状況】USDA によれば、2026/27 年度の実績量は、エタノール用需要の増加を受け前年度から 3.7%増の 97.0 百万トンと史上最高の見込み。同「Feed Outlook」(2026.5.14)によれば、ブラジル政府は、国内で販売されるガソリンに義務付けているエタノール混合比率を 30%から 32%に引き上げることを検討している。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の実績量は、生産量の増加を受け前年度から 2.3%増の 44.0 百万トンとなる見込み。また、2025/26 年度の実績量は、前年度から 1.8%増の 43.0 百万トンとなる見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2025/26 年度のうち 2026 年3~4月の実績量は、前年同期(104.8 万トン)に比べ 38.5%増の 145.2 万トン。輸出先国別には、エジプト96.9 万トン(66.7%)、イラン 13.6 万トン(9.3%)、マレーシア 13.3 万トン(9.2%)の順となっている(表)。

USDA によれば、2026/27 年度の実績在庫量は、消費量の増加等を受け前年度から 1.7%減、過去5年平均(8.9 百万トン)から 28.0%増の 11.4 百万トンとなる見込み。期末在庫率は前年度から 0.4 ポイント減の 8.1%となる見込み。

## とうもろこし—ブラジル

(夏とうもろこしは、概ね8~翌年1月に作付けされ、2~6月に収穫される。冬とうもろこしは、大豆収穫後の概ね1~3月に作付けされ、6~10月に収穫される。)

(単位:百万トン)

年度	2024/25		2025/26 (見込み)		2026/27 (27年3月~28年2月)		
	実績	見込み	実績	見込み	予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	136.0	135.0 (140.2)	139.0 (-)	139.0 (-)	- (-)	- (-)	3.0 (-)
消費量	91.5	93.5 (94.9)	97.0 (-)	97.0 (-)	- (-)	- (-)	3.7 (-)
うち飼料用	64.0	63.0 ...	65.0 ...	65.0 ...	- ...	- ...	3.2 ...
輸出量	42.2	43.0 (46.5)	44.0 (-)	44.0 (-)	- (-)	- (-)	2.3 (-)
輸入量	1.8	1.7 (1.7)	1.8 (-)	1.8 (-)	- (-)	- (-)	5.9 (-)
期末在庫量	11.4	11.6 (13.0)	11.4 (-)	11.4 (-)	- (-)	- (-)	▲1.7 (-)
期末在庫率	8.5%	8.5% (9.2%)	8.1% (-)	8.1% (-)	- (-)	- (-)	▲0.4 (-)

(参考)

収穫面積(百万ha)	22.30	22.80 (22.56)	23.20 (-)	23.20 (-)	- (-)	- (-)	1.8 (-)
単収(t/ha)	6.10	5.92 (6.21)	5.99 (-)	5.99 (-)	- (-)	- (-)	1.2 (-)

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,  
「World Agricultural Production」(12 May 2026)

CONAB「Graos」(14 May 2026) ※( )書き。なお、CONABの収穫面積は作付面積である。

## 図 ブラジルのクロープカレンダー(中西部から南部)

2025/26年度	2025年				2026年								
	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9
夏とうもろこし (リオ・グランデ・ド・スール州等)	作付け 4.1 百万ha				収穫 28.5 百万t								
冬とうもろこし (マツト・グロッソ州、パラナ州等)	作付面積夏冬作計 22.6 百万ha				作付け 18.5 百万ha				収穫 111.7 百万t				
大豆 (マツト・グロッソ州、パラナ州等)	作付け 48.7 百万ha				収穫 180.1 百万t								

資料:CONAB「Graos」(2026.5.14)をもとに農林水産省で作成

## 表 ブラジルのとうもろこしの輸出先国と輸出量

国名	2024/25年度 (2025年3月~2026年2月)		国名	2024/25年度 (2025年3~4月)		国名	2025/26年度 (2026年3~4月)	
	輸出量 (万トン)	シェア (%)		輸出量 (万トン)	シェア (%)		輸出量 (万トン)	シェア (%)
イラン	871.3	20.9	イラン	44.8	42.8	エジプト	96.9	66.7
エジプト	724.2	17.4	サウジアラビア	27.5	26.2	イラン	13.6	9.3
ベトナム	527.6	12.7	ヨルダン	8.1	7.7	マレーシア	13.3	9.2
サウジアラビア	219.6	5.3	エジプト	7.6	7.3	ベトナム	11.1	7.6
中国	192.9	4.6	アルジェリア	4.4	4.2	サウジアラビア	3.6	2.5
その他	1,634.1	39.2	その他	12.4	11.8	その他	6.7	4.6
合計	4,169.7	100.0	合計	104.8	100.0	合計	145.2	100.0

資料:ブラジル貿易統計のデータをもとに農林水産省で作成

## < アルゼンチン > 2026/27 年度の生産量は、前年度から 6.8%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の実績は、収穫面積及び単収の減少を受け前年度から 6.8%減となるものの、過去5年平均(49.7 百万トン)から 10.6%増の 55.0 百万トンとなる見込み。同「Grain and Feed Annual」(2026.4.20)によれば、早植えとうもろこしの作付けは8月下旬に開始される見込み。肥料価格等の生産コストの上昇が懸念されており、肥料投入量が少ない大豆に作付けがシフトする可能性がある。

USDA によれば、2025/26 年度の実績は、現地の情報に基づき前月から 7.0 百万トン上方修正され、前年度から 20.4%増の 59.0 百万トンと史上最高の見込み。同「Grain and Feed Annual」(2026.4.20)によれば、早植えとうもろこしは、生育初期の気象条件は極めて良好であったが、一部の地域では1月の高温乾燥の影響を受けた。2月中旬に降雨が再開し、4月中旬時点で作付面積の約 25%が収穫済みであり、収量は概ね平均を上回っている。遅植えとうもろこしは現在、主に登熟期を迎えており、ここ数週間の豊富な降雨に支えられ、非常に良好な条件下にある。

アルゼンチン農牧漁業庁(SAGyP)の週報(2026.5.14)によれば、5月14日現在の 2025/26 年度のとうもろこしの収穫進捗率は 41%と前年同期(37%)を上回っており、主要生産州では、ブエノス・アイレス州 42%(前年同期 42%)、コルドバ州 43%(同 36%)、サンタフェ州 77%(同 71%)となっている。

【需要状況】USDA によれば、2026/27 年度の実績は、飼料用消費の減少を受け前年度から 1.1%減の 17.3 百万トンとなる見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の実績は、生産量の減少を受け前年度から 11.6%減の 38.0 百万トンとなる見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2025/26 年度のうち 2026 年3月の輸出量は、前年同期(299.9 百万トン)に比べ 59.3%増の 477.7 百万トン。輸出先国別には、ベトナム 83.5 百万トン(17.5%)、アルジェリア 75.4 百万トン(15.8%)、エジプト 71.5 百万トン(15.0%)の順となっている(表)。

USDA によれば、2026/27 年度の実績は、生産量の減少を受け前年度から 7.9%減、過去5年平均(3.7 百万トン)から 5.7%減の 3.5 百万トンとなる見込み。期末在庫率は前年度から 0.05 ポイント増の 6.3%となる見込み。

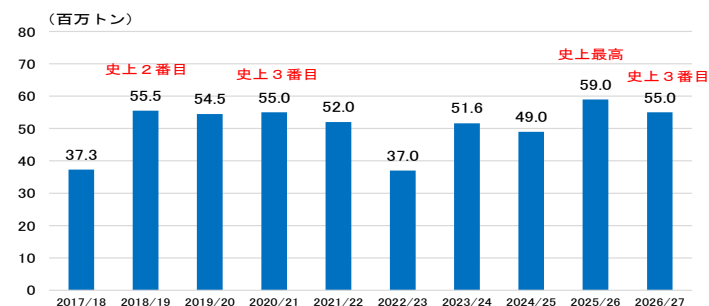
## とうもろこしーアルゼンチン

(早植えとうもろこしは、概ね9月後半～12 月前半に作付けされ、遅植えとうもろこしは、概ね 12 月前半～翌年2月前半に作付けされる。概ね3～8月に収穫される。)

年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27 (27年3月～28年2月)		
			予測値、( )はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	49.0	59.0	55.0 (59.0)	-	▲ 6.8
消費量	17.1	17.5	17.3 (21.6)	-	▲ 1.1
うち飼料用	12.7	13.0	12.8 (16.5)	-	▲ 1.5
輸出量	29.1	43.0	38.0 (37.5)	-	▲ 11.6
輸入量	0.01	0.01	0.01 (0.001)	-	-
期末在庫量	5.3	3.8	3.5 (2.9)	-	▲ 7.9
期末在庫率	11.5%	6.3%	6.3% (4.9%)	-	0.05
(参考)					
収穫面積(百万ha)	6.83	8.10	7.90 (8.50)	-	▲ 2.5
単収(t/ha)	7.18	7.28	6.96 (6.94)	-	▲ 4.4

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,  
「World Agricultural Production」(12 May 2026)  
IGC「Grain Market Report」(23 April 2026)

## 図 アルゼンチンのとうもろこしの生産量の推移



資料:USDA「PS&D」(2026.5.12)をもとに農林水産省で作成

## 表 アルゼンチンのとうもろこしの輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2025年3月～2026年2月)			2024/25年度 (2025年3月)			2025/26年度 (2026年3月)		
国名	輸出量 (百万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (百万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (百万トン)	シェア (%)
ベトナム	534.1	18.4	ベトナム	57.5	19.2	ベトナム	83.5	17.5
ペルー	462.8	15.9	ペルー	43.5	14.5	アルジェリア	75.4	15.8
マレーシア	309.5	10.6	アルジェリア	35.4	11.8	エジプト	71.5	15.0
アルジェリア	259.0	8.9	マレーシア	28.4	9.5	サウジアラビア	42.5	8.9
サウジアラビア	214.9	7.4	エジプト	21.3	7.1	ペルー	37.2	7.8
その他	1,125.7	38.7	その他	113.7	37.9	その他	167.6	35.1
合計	2,905.9	100.0	合計	299.9	100.0	合計	477.7	100.0

資料:アルゼンチン国家統計局(INDEC)をもとに農林水産省で作成。なお、その他には秘匿「Confidential」の数量を含む。

## < ウクライナ > 2026/27 年度の生産量は、前年度から 2.9%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の実産量は、収穫面積の減少を受け前年度から 2.9%減、ロシアの侵攻前の過去5年平均(2017/18～2021/22 年度、33.6 百万トン)から 10.8%減の 30.0 百万トンとなる見込み。

同「Grain and Feed Annual」(2026.4.20)によれば、国内の燃料・肥料価格の高騰により農家がより収益性の高い作物(ひまわり等)や、投入資材の少ない作物へと作付けを転換させる可能性がある。また、2025/26 年度のとうもろこしの輸出ペースの遅れにより在庫が増加し 2026 年 10 月以降に市場に出回る新穀とうもろこしの国内価格下落が懸念されることで、農家の作付意欲を削ぐ可能性がある。

現地情報会社によれば、5月 11 日現在の 2026/27 年度の作付進捗率は 54%と、前年同期(73%)を下回っている。冬から春にかけての降雪・降雨量の多さと春の低温や悪天候などにより、土壌水分量が過剰となり、作付作業の遅れが深刻となっている。

【需要状況】USDA によれば、2026/27 年度の消費量は、エタノール用需要の増加等を受け前年度から 2.9%増の 7.2 百万トンとなる見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の輸出量は、前年度から 4.5%増の 23.0 百万トンとなる見込み。同「Grain: World Markets and Trade」(2026.5.12)によれば、当該増加は、在庫量が高水準であり、また、生産量の減少が僅かであったことによる。

現地情報会社によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10 月～2026 年4月の輸出量は、前年同期(1,569.9 万トン)に比べ 2.1%増の 1,602.6 万トン。輸出先国別には、トルコ 467.2 万トン(29.1%)、イタリア 292.1 万トン(18.2%)、スペイン 164.8 万トン(10.3%)の順となっている(図、表)。

USDA「Grain: World Markets and Trade」(2026.5.12)によれば、5月7日現在の輸出価格は、中東からの積極的な需要を受け前月から9ドル/トン上昇し 236 ドル/トンとなった。

USDA によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、輸出量の増加等を受け前年度から 6.9%減となるものの、ロシアの侵攻前の過去5年平均(2.5 百万トン)からは 1.8%増の 2.6 百万トンとなる見込み。2026/27 年度の期末在庫率は、前年度から 1.0 ポイント減の 8.5%となる見込み。

## とうもろこしーウクライナ

(概ね4～5月に作付けされ、8～11月に収穫される。)

(単位:百万トン)

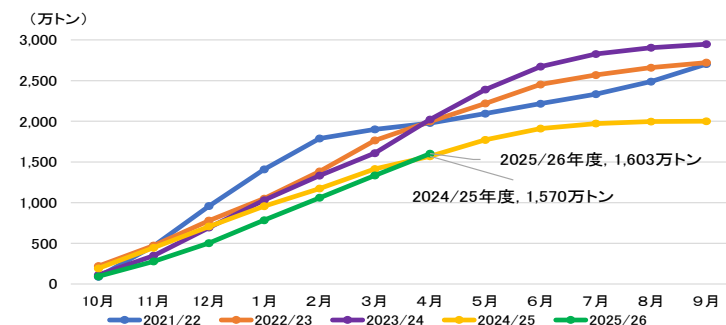
年度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27 (26年10月～27年9月)		
			予測値、( )はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	26.8	30.9	30.0 (30.0)	-	▲ 2.9
消費量	6.5	7.0	7.2 (6.4)	-	2.9
うち飼料用	5.3	5.5	5.5 (4.7)	-	-
輸出量	20.0	22.0	23.0 (24.5)	-	4.5
輸入量	0.02	0.01	0.01 (0.002)	-	-
期末在庫量	0.8	2.8	2.6 (2.0)	-	▲ 6.9
期末在庫率	3.2%	9.5%	8.5% (6.6%)	-	▲ 1.0

(参考)

収穫面積(百万ha)	4.10	4.40	4.20 (4.00)	-	▲ 4.5
単収(t/ha)	6.54	7.02	7.14 (7.50)	-	1.7

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,  
「World Agricultural Production」(12 May 2026)  
IGC「Grain Market Report」(23 April 2026)

## 図 ウクライナのとうもろこしの輸出量の推移(累計)



資料:APK-Inform Agency のデータをもとに農林水産省で作成

## 表 ウクライナのとうもろこしの輸出先国と輸出量

国名	2024/25年度 (2024年10月～2025年9月)		2024/25年度 (2024年10月～2025年4月)		2025/26年度 (2025年10月～2026年4月)	
	輸出量 (万トン)	シェア (%)	輸出量 (万トン)	シェア (%)	輸出量 (万トン)	シェア (%)
トルコ	568.8	28.4	347.9	22.2	467.2	29.1
イタリア	273.6	13.7	231.9	14.8	292.1	18.2
スペイン	240.7	12.0	228.1	14.5	164.8	10.3
オランダ	199.1	10.0	166.4	10.6	109.1	6.8
エジプト	162.5	8.1	152.5	9.7	86.2	5.4
その他	556.1	27.8	443.1	28.2	483.3	30.2
合計	2,000.8	100.0	1,569.9	100.0	1,602.6	100.0

資料:APK-Inform Agency のデータをもとに農林水産省で作成

## < 中国 > 2026/27 年度の生産量は、前年度から 1.9%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の実産量は、収穫面積及び単収の増加を受け前年度から 1.9%増、過去5年平均(287.0 百万トン)から 7.0%増の 307.0 百万トンと史上最高の見込み(図)。同「Grain and Feed Annual」(2026.3.19)によれば、農家は大豆よりとうもろこしのほうが収益性が高いと見込んでおり、とうもろこしの作付面積は安定的に推移すると予測される。

中国中央气象台「全国農業気象週報」(2026.5.11)によれば、5月上旬時点で、春とうもろこしは、東北部で作付期から出芽期、内モンゴル自治区、山西省、甘粛省、寧夏回族自治区では出芽期から3葉期、四川省、貴州省、新疆ウイグル自治区では3~7葉期に達している。また、コワンシー(広西)壮族自治区では節間伸長期からシルキング期を迎えている。夏とうもろこしは、四川省、雲南省、貴州省で作付期から7葉期を迎えている。

【需要状況】USDA によれば、2026/27 年度の消費量は、前年度から 1.2%増の 325.0 百万トンと史上最高の見込み。同「Grain: World Markets and Trade」(2026.5.12)によれば、家禽肉生産の堅調な伸び、養豚部門及び国内加工業界からの安定した需要により消費量は増加すると見込まれる。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の輸入量は、前年度同の 6.0 百万トンとなる見込み。

中国海関統計によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10 月~2026 年3月の輸入量は、前年同期(114.7 万トン)に比べ 116.4%増の 248.2 万トン。輸入先国別には、ブラジル 189.1 万トン(76.2%)、ロシア 29.2 万トン(11.8%)、ミャンマー19.5 万トン(7.8%)の順となっている(表)。

中国農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2026 年3月号」によれば、3月の国際価格は原油価格の上昇等を受け上昇傾向。国内価格は前月(2,420 元/トン)から上昇し 2,500 元/トンとなった。主要生産地におけるとうもろこしの販売進捗は8割を超え農家の手持ち在庫が減少している一方、養豚はコスト割れにより収益が悪化しており飼料会社は原料調達を控えていることから、今後、国内のとうもろこし価格は上下しながら推移する見込み。

USDA によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、消費量の増加を受け前年度から 6.7%減、過去5年平均(199.3 百万トン)から 16.6%減の 166.1 百万トンとなる見込み。期末在庫率は前年度から 4.4 ポイント減の 51.1%となる見込み。

## とうもろこし—中国

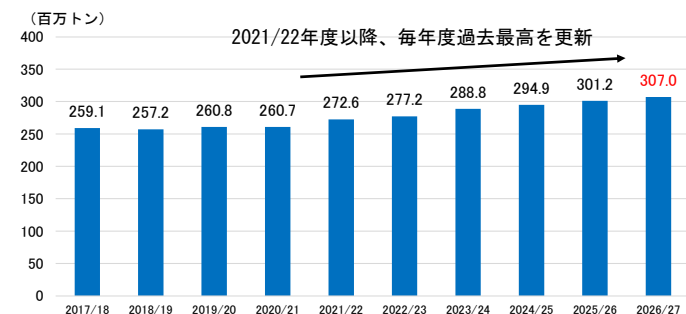
(春とうもろこしは、概ね2~4月に作付けされ、7~9月に収穫される。夏とうもろこしは、概ね4~6月に作付けされ、9~10月に収穫される。)

(単位:百万トン)

年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27 (26年10月~27年9月)		
			予測値、( ) はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	294.9	301.2	307.0 (303.7)	-	1.9
消費量	316.0	321.0	325.0 (314.9)	-	1.2
うち飼料用	234.0	239.0	243.0 (212.0)	-	1.7
輸 出 量	0.00	0.02	0.02 (0.1)	-	-
輸 入 量	1.8	6.0	6.0 (8.0)	-	-
期末在庫量	191.9	178.2	166.1 (176.8)	-	▲ 6.7
期末在庫率	60.7%	55.5%	51.1% (56.1%)	-	▲ 4.4
(参考)					
収穫面積(百万ha)	44.74	44.96	45.40 (45.00)	-	1.0
単収(t/ha)	6.59	6.70	6.76 (6.75)	-	0.9

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,  
「World Agricultural Production」(12 May 2026)  
IGC「Grain Market Report」(23 April 2026)

## 図 中国のとうもろこしの生産量の推移



資料:USDA「PS&D」(2026.5.12)をもとに農林水産省で作成

## 表 中国のとうもろこしの輸入先国と輸入量

2024/25 年度 (2024年10月~2025年9月)			2024/25年度 (2024年10月~2025年3月)			2025/26年度 (2025年10月~2026年3月)		
国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)
ブラジル	72.4	39.7	ブラジル	57.6	50.2	ブラジル	189.1	76.2
ウクライナ	37.6	20.6	ウクライナ	19.4	16.9	ロシア	29.2	11.8
ロシア	36.8	20.2	ミャンマー	17.7	15.5	ミャンマー	19.5	7.8
ミャンマー	22.8	12.5	ロシア	9.8	8.6	ウクライナ	6.2	2.5
ラオス	6.4	3.5	ラオス	6.2	5.4	ラオス	4.3	1.7
米国	3.9	2.1	米国	2.2	1.9	ペルー	0.0	0.0
その他	2.3	1.3	その他	1.8	1.6	その他	0.0	0.0
計	182.3	100.0	計	114.7	100.0	計	248.2	100.0

資料:中国海関統計をもとに農林水産省で作成

### 3 コメ

#### (1) 国際的なコメ需給の概要(詳細は右表を参照)

<USDAの見通し> 2026/27年度

**生産量** 前年度比 ↓ 前月比 —

・中国等で増加するものの、インド、ミャンマー、米国等で減少し、前年度から減少した。

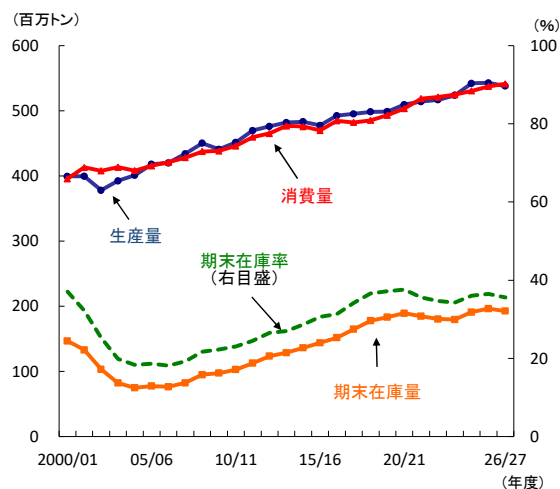
**消費量** 前年度比 ↑ 前月比 —

・中国等で減少するものの、インド、バングラデシュ等で増加し、前年度から増加した。史上最高の見込み。

**輸出量** 前年度比 ↑ 前月比 —

・ミャンマー等で減少するものの、インド、タイ、パキスタン等で増加し、前年度から増加した。史上最高の見込み。

**期末在庫量** 前年度比 ↓ 前月比 —



資料:USDA「PS&D」(2026.5.12)をもとに農林水産省にて作成

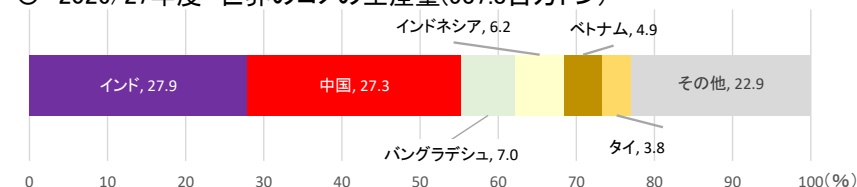
#### ◎世界のコメ需給

(単位:百万精米トン)

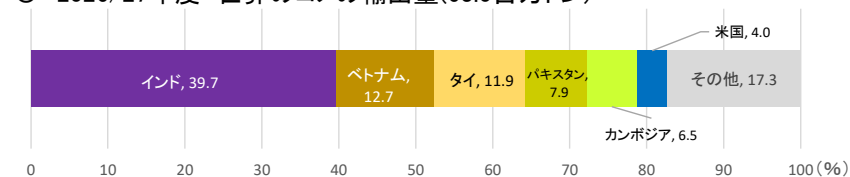
年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	542.0	542.8	537.8	-	▲ 0.9
消費量	530.7	537.6	541.4	-	0.7
輸出量	61.5	60.3	63.0	-	4.5
輸入量	58.0	57.2	59.8	-	4.5
期末在庫量	191.1	196.3	192.7	-	▲ 1.8
期末在庫率	36.0%	36.5%	35.6%	-	▲ 0.9

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(12 May 2026)

#### ○ 2026/27年度 世界のコメの生産量(537.8百万トン)



#### ○ 2026/27年度 世界のコメの輸出量(63.0百万トン)



#### ○ 2026/27年度 世界のコメの輸入量(59.8百万トン)



## (2) 国別のコメの需給動向

### < タイ > 2026/27 年度の生産量は、前年度から 1.9%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の実生産量は、収穫面積が前年度から 0.1 百万ヘクタール減少(前年度比 0.9%減)することから、前年度から 1.9%減の 20.3 百万トンの見込み。単収は、前年度から 1.1%減の 2.82 トン/ヘクタールとなる見込み。

同「Grain and Feed Annual」(2026.3.31)によれば、この生産量減少は、2026 年半ばのエルニーニョ現象の影響による乾燥した天候で、水の供給不足が発生し、北部及び中部各県の冬期乾季作の作付面積縮小を要因としている。

タイ農業協同組合省農業経済局(2026.4)によれば、2025/26 年度の乾季米の作付面積は、前年度に比べ 2.1%減の 2.06 百万ヘクタールと予測されている。収穫最盛期を終えている。

アセアン食料安全保障情報システム(2026.4)によれば、2025/26 年度の乾季米は現在、登熟期から収穫期に入っており、作付面積は約 1.96 百万ヘクタールと予測され、前年度に比べ 3%減となっている。4 月時点で、作付面積の約 70%が収穫済となっている。主に作付面積の減少により、総生産量は減少が見込まれているが、生育期間中の好天に支えられ、単収はわずかに増加すると予測されている。

【貿易情報・その他】USDA「Rice Outlook:May 2026」(2026.5.14)によれば、2026/27 年度の輸出量は、アフリカや東南アジアの主要市場からの需要拡大を受け、前年度から 7.1%増加し、7.5 百万トンの見込み。同「Grain and Feed Monthly」(2026.4.29)によれば、2026 年 3 月、ホルムズ海峡の封鎖に伴う物流上の制約や運賃の急騰を受け、中東向け輸出は減速し、2026 年 3 月 24 日、タイ商務省対外貿易局は記者会見にて、タイの中東向け年間輸出量のほぼ全てが失われる可能性があるかと警告した。そのため、タイのコメ輸出にとって、東南アジア向けの需要はますます重要性を増している。

タイ関税局によれば、2025/26 年度の輸出量のうち 2026 年 1 月～3 月の輸出量は、前年同期(181.6 万トン)に比べ 9.6%減の 164.1 万トンで、輸出先国別には、米国 18.1 万トン(11.0%)、南アフリカ 17.8 万トン(10.8%)、マレーシア 13.4 万トン(8.2%)の順となっている(表)。

USDA によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、前年度から 1.3%増の 3.9 百万トンとここ 5 年間で最高水準となる見込み。

## コメータイ

夏期の雨季作(5～10 月作付け、同年 7 月～翌年 5 月収穫)と冬期の乾季作(11 月～翌年 4 月作付け、翌年 2～10 月収穫)で行われる。主にインディカ米を栽培。

(単位:百万精米トン)

年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27 (27年1月～27年12月)		
			予測値、○はIGC	前年予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	20.8	20.7	20.3 (20.6)	-	▲ 1.9
消費量	12.5	12.7	12.8 (13.0)	-	0.8
輸出量	7.9	7.0	7.5 (7.3)	-	7.1
輸入量	0.1	0.1	0.1 (0.02)	-	-
期末在庫量	2.8	3.8	3.9 (4.0)	-	1.3
期末在庫率	13.5%	19.3%	19.0% (19.8%)	-	▲ 0.3
(参考)					
収穫面積(百万ha)	11.08	11.00	10.90 (11.00)	-	▲ 0.9
単収(もみt/ha)	2.85	2.85	2.82 (1.87)	-	▲ 1.1

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、  
「World Agricultural Production」(12 May 2026)  
IGC 「Grain Market Report」(23 April 2026) (単収は精米t/ha)

### 写真 耕起中の圃場



揚水ポンプで圃場に水を入れ、雨季作に向けた準備を進めている。5 月半ば以降、降雨の状況をみながら作付けを行う予定(タイ中部スパンブリノンヤサイ郡で 5 月 9 日撮影)。

### 表 タイのコメの輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2025年1月～12月)			2024/25年度 (2025年1月～3月)			2025/26年度 (2026年1月～3月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
イラク	100.1	12.7	イラク	30.1	16.6	米国	18.1	11.0
南アフリカ	87.6	11.1	米国	22.5	12.4	南アフリカ	17.8	10.8
米国	81.8	10.4	南アフリカ	15.2	8.4	マレーシア	13.4	8.2
中国	65.5	8.3	中国	11.8	6.5	フィリピン	9.6	5.9
セネガル	28.7	3.6	セネガル	9.7	5.3	中国	9.2	5.6
マレーシア	27.8	3.5	アンゴラ	6.5	3.6	イラク	9.2	5.6
その他	398.6	50.4	その他	85.8	47.2	その他	86.9	52.9
計	790.1	100.0	計	181.6	100.0	計	164.1	100.0

資料:タイ関税局「Electronic Service」をもとに農林水産省で作成

## < 米国 > 2026/27 年度の生産量は、前年度から 15.2%減少する見込み

【生育・生産状況】USDAによれば、2026/27年度の実績量は、収穫面積が0.92百万ヘクタールと前年度から17.1%減少することを受け、前年度から15.2%減の5.6百万トンの見込み。2025/26年度の実績量は、前年度に比べ4.3%減の1.11百万ヘクタールの見込み。2026/27年度の予測単収は、前年度(8.45トン/ヘクタール)から2.6%増となり、収穫面積の減少分を一部相殺している。

同「Crop Progress」(2026.5.18)によれば、5月17日現在、主要生産6州の作付進捗率は88%と、前年同期(86%)よりも進んでおり、過去5年平均(87%)からもわずかに進んでいる。なお、カリフォルニア州以外は、作付進捗率が過去5年平均を上回っており、アーカンソー州(96%)、ルイジアナ州(99%)、ミシシッピ州(97%)、テキサス州(97%)では、作付けはほぼ終了している。出芽進捗率は74%と、前年同期(72%)と過去5年平均(67%)共に上回っている。作柄評価は「良～優良」が74%と、前年同期(79%)を下回る。中・短粒種の主要生産州であるカリフォルニア州の作付進捗率は45%と前年同期(57%)及び過去5年平均(66%)を下回る。出芽進捗率は7%と前年同期(14%)及び過去5年平均(15%)の約半分となっているが、作柄評価は「良～優良」が95%となっている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2026/27年度の実績量は、前年度から4.3%増の1.5百万トンの見込み。同「Rice Outlook: May 2026」(2026.5.14)によれば、2000/01年度以降、米国の長粒種米の実績量は増加しており、約0.3百万トンから、2024/25年度には過去最高の約1.4百万トンに達した。

USDAによれば、2026/27年度の実績量は、前年度から2.3%減の2.5百万トンの見込み。同「Rice Outlook: May 2026」(2026.5.14)によれば、2026/27年度の実績量は、南米の主要コメ輸出国との競争激化、国内生産量の減少及び比較的高い米国長粒種米価格により、3年連続での減少となる見込み。

同「Exports Sales Query System」によれば、2025/26年度のうち2025年8月～2026年4月の実績量は179.2万トンで、輸出先国別には、日本32.9万トン(18.3%)、メキシコ26.1万トン(14.6%)、ハイチ24.7万トン(13.8%)の順(表)。種類別には、長粒種は、実績量119.0万トンで、輸出先国別には、ハイチ24.7万トン(国別シェア20.7%)、メキシコ21.8万トン(同18.4%)、ホンジュラス15.2万トン(同12.8%)。中・短粒種は、実績量60.2万トンで、輸出先国別には、日本32.9万トン(国別シェア54.6%)、韓国13.2万トン(同21.9%)、メキシコ4.2万トン(同7.0%)。

USDAによれば、2026/27年度の実績在庫量は、生産量の減少を受け、前年度から22.1%減の1.3百万トンとなる見込み。

## コメー米国

長粒種の実績量は7割、中・短粒種の実績量は3割を占め、長粒種の6割をアーカンソー州が、中・短粒種の7割をカリフォルニア州が占める。

(単位：百万精米トン)

年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27 (26年8月～27年7月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	7.1	6.6	5.6	-	▲ 15.2
消費量	5.3	5.4	4.9	-	▲ 8.9
輸 出 量	2.9	2.6	2.5	-	▲ 2.3
輸 入 量	1.6	1.4	1.5	-	▲ 4.3
期末在庫量	1.7	1.7	1.3	-	▲ 22.1
期末在庫率	20.9%	21.7%	18.1%	-	▲ 3.6
(参考)					
収穫面積(百万ha)	1.16	1.11	0.92	-	▲ 17.1
単収(もみt/ha)	8.69	8.45	8.67	-	▲ 2.6

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、  
「World Agricultural Production」(12 May 2026)

表 米国のコメの輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年8月～2025年7月)			2024/25年度 (2024年8月～2025年4月)			2025/26年度 (2025年8月～2026年4月)		
国	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国	輸出量 (万トン)	シェア (%)
メキシコ	68.6	23.8	メキシコ	56.3	24.9	日本	32.9	18.3
日本	39.4	13.7	日本	26.6	11.8	メキシコ	26.1	14.6
ハイチ	28.6	9.9	ハイチ	22.1	9.8	ハイチ	24.7	13.8
ホンジュラス	27.4	9.5	ホンジュラス	21.2	9.4	ホンジュラス	15.2	8.5
イラク	22.0	7.6	イラク	13.2	5.8	韓国	13.2	7.4
韓国	13.4	4.6	韓国	11.4	5.0	コロンビア	12.8	7.1
その他	89.3	31.0	その他	75.5	33.4	その他	54.4	30.3
合計	288.6	100.0	合計	226.2	100.0	合計	179.2	100.0

資料：USDA「Exports Sales Query System」をもとに農林水産省で作成

## < 中国 > 2026/27 年度の生産量は、前年度から 0.5%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の実生産量は、農作物の生産性向上との政府計画に沿って、前年度から 0.5%増の 147.0 百万トン(精米ベース)となる見込み。同「Grain and Feed Annual」(2026.3.19)によれば、中国政府は穀物生産を国家戦略上の最優先課題と位置付け、「中央一号文件」において単収向上の取組みを強調し、今後数年間で、大規模水田における単収を 7.1トン/ヘクタールから約9トン/ヘクタールに増加するとしている。2025/26 年度には、生産量は過去最高を記録し、優良品種の導入、高規格農田化、先進的な農業機械及び財政支援を通じ、2026/27 年度も生産量の増加が見込まれている。

中国中央气象台「一期作稲生育段階」及び「二期作早稲生育段階」(2026.5.3~5.9)によれば、一期作米は、黒龍江省及び吉林省で、出芽から3葉期にあり、四川省、雲南省、重慶市、貴州省では移植後の活着から3葉期にある。一方、二期作早稲は、広東省及びコワンシー(広西)壮族自治区で分けつから節間伸長期に進行し、福建省、江西省、浙江省では分けつ期にある。湖南省で、移植後の活着から分けつ期、海南省で乳熟期となっている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の消費量は、人口減少に伴う食用米の消費減を要因として前年度から 1.4%減の 145.1 百万トンとなる見込み。

2026/27年度の輸入量は、前年度と同じ3.3百万トンの見込み。同「Grain and Feed Annual」(2026.3.19)によれば、世界的に供給が潤沢な中、主要なコメ輸出国での競争が激化し、国際コメ価格を全体的に押し下げたことにより、中国のコメ輸入コストも低下し、中国の輸入量は近年増加傾向にある。

中国海関統計によれば、2025/26 年度のうち 2025 年7月~2026 年3月の輸入量は、前年同期(141.8 万トン)に比べ 86.0%増の 264.4 万トンとなっている。輸入先国別には、ミャンマー105.6 万トン(40.0%)、ベトナム 57.1 万トン(21.6%)、タイ 42.8 万トン(16.2%)の順となっている(表)。

USDAによれば、2026/27 年度の輸出量は、前年度から 15.8%増の 2.2 百万トンの見込み。同「Rice Outlook: May 2026」(2026.5.14)によれば、在庫が豊富であることに加え、中粒種米輸出国(米国等)との競争緩和を受け増加が見込まれている。中国海関統計によれば、2025/26 年度のうち 2025 年7月~2026 年3月の輸出量は、前年同期(33.8 万トン)に比べ 85.4%増の 62.6 万トンとなっている。輸出先国別には、韓国 11.8 万トン(18.8%)、コートジボワール 10.5 万トン(16.8%)、カメルーン 8.4 万トン(13.3%)、ベナン 6.7 万トン(10.7%)の順となっている。USDA によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、前年度から 2.9%増の 108.0 百万トンの見込み。

## コメー中国

中国の主要コメ生産地域は、南部稲作地域(華南、華中、西南高原地域)で、インディカ米とジャポニカ米を栽培。北部稲作地域では、主にジャポニカ米を栽培。

(単位:百万精米トン)

年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27 (26年7月~27年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	145.3	146.3	147.0 (146.9)	-	0.5
消費量	145.0	147.2	145.1 (145.7)	-	▲ 1.4
輸 出 量	1.2	1.9	2.2 (1.9)	-	15.8
輸 入 量	2.3	3.3	3.3 (2.8)	-	-
期末在庫量	104.5	105.0	108.0 (105.7)	-	2.9
期末在庫率	71.5%	70.4%	73.3% (71.6%)	-	2.9

(参考)

収穫面積(百万ha)	29.01	29.00	29.00 (29.00)	-	-
単収(もみt/ha)	7.15	7.21	7.24 (5.06)	-	0.4

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、  
「World Agricultural Production」(12 May 2026)  
IGC 「Grain Market Report」(23 April 2026) (単収は精米t/ha)

表 中国のコメの輸入先国と輸入量

2024/25年度 (2024年7月~2025年6月)			2024/25年度 2024年7月~2025年3月			2025/26年度 2025年7月~2026年3月		
国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)
ミャンマー	67.4	28.9	ミャンマー	48.0	33.9	ミャンマー	105.6	40.0
タイ	56.1	24.0	タイ	35.2	24.8	ベトナム	57.1	21.6
ベトナム	49.6	21.3	ベトナム	21.1	14.9	タイ	42.8	16.2
インド	24.1	10.3	インド	15.5	11.0	パキスタン	20.0	7.6
パキスタン	20.7	8.9	パキスタン	13.5	9.5	カンボジア	18.8	7.1
カンボジア	11.7	5.0	カンボジア	4.7	3.3	インド	17.3	6.6
その他	3.8	1.6	その他	3.7	2.6	その他	2.7	1.0
合計	233.5	100.0	合計	141.8	100.0	合計	264.4	100.0

資料:中国海関統計をもとに農林水産省で作成

## < インド > 2026/27 年度の生産量は、前年度から 1.3%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の実生産量は、前年度から 1.3%減、過去5年平均(141.0 百万トン)から 6.4%増の 150.0 百万トンとなる見込み。同「Rice Outlook:May 2026」(2026.5.14)によれば、10年連続の増加を経て、降雨量が平年並みに戻り生産者が作付面積を縮小するため、前年度の記録的な生産量からわずかに減少すると予測されている。

インド農業・農民福祉省によれば、2025/26 年度の夏季米の作付面積は、2026 年5月1日時点で前年同期(3.3 百万ヘクタール)から 4.23%減の 3.1 百万ヘクタールとなっている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の消費量は、前年度から 3.2%増の 128.0 百万トンと予測されている。同「Grain and Feed Annual」(2026.4.2)によれば、当該増加は、主に食料安全保障プログラム向けの政府補助米の供給増、民間取引増及びインド政府が実施するエタノール混合プログラム(EBP)によるエタノール製造者への補助金付きコメ販売によるインド国内市場へのコメ供給量増が要因となっている。また、同「Rice Outlook:May 2026」(2026.5.14)によれば、人口増加と食料安全保障を確保するための政府による公的配給制度(PDS)による配給も継続しており、400 万トン増の過去最高の消費量となる見込み。

USDA によれば、2026/27 年度の輸出量は、前年度から 8.7%増の 25.0 百万トンとなる見込み。同「Rice Outlook: May 2026」(2026.5.14)によれば、インドは輸出可能な供給量が豊富なこと、かつ価格競争力の高さから、世界貿易の 40%を占めると予測されている。

インド輸出入統計によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10 月～2026 年2月の輸出量は、927.8 万トンと前年同期(1,076.1 万トン)に比べ 13.8%減となっている。輸出先国別には、ベナン 74.6 万トン(8.0%)、サウジアラビア 58.8 万トン(6.3%)、バングラデシュ 55.6 万トン(6.0%)の順となっている(表)。

USDA「Grain and Feed Annual」(2026.4.2)によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、インド政府が在庫を管理しやすい水準まで減らすための措置を講じるとの予測から、前年度から 5.7%減の 50.0 百万トンとなる見込み。生産量のわずかな減少、国内市場における政府米の需要増、輸出量増により期末在庫は減少する見込みだが、政府在庫は依然として食料安全保障プログラムに必要な1年分の在庫量を上回る見込み。

インド食料公社(Food Cooperation India)によれば、2026 年4月時点の期末在庫量は、38.61 百万トン(精米)と前年同期(38.21 百万トン)に比べ 1.0%増の見込み。

## コメーインド

カリフ米: 雨季/モンスーン期(5～10 月)に栽培。  
ラビ米: 冬季の 11 月～翌3月に栽培。  
夏季米: 3～6月に栽培。

(単位:百万精米トン)

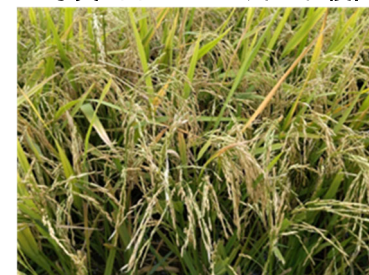
年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27 (2026年10月～27年 9 月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	150.2	152.0	150.0 (155.0)	-	▲ 1.3
消費量	121.4	124.0	128.0 (128.4)	-	3.2
輸出量	22.8	23.0	25.0 (23.3)	-	8.7
輸入量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-
期末在庫量	48.0	53.0	50.0 (57.9)	-	▲ 5.7
期末在庫率	33.3%	36.1%	32.7% (38.1%)	-	▲ 3.4

(参考)

収穫面積(百万ha)	51.42	52.00	51.50 (52.70)	-	▲ 1.0
単収(もみt/ha)	4.38	4.39	4.37 (2.94)	-	▲ 0.5

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、  
「World Agricultural Production」(12 May 2026)  
IGC 「Grain Market Report」(23 April 2026) (単収は精米t/ha)

## 写真 西ベンガル州の収穫直前の稲



西ベンガル州の二期作地域では、冬季米(現地名:ポロ)が成熟期を迎えている(5月5日撮影)。

表 インドのコメの輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年10月～2025年9月)			2024/25年度 (2024年10月～2026年2月)			2025/26年度 (2025年10月～2026年2月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
ベナン	216.7	9.4	ベナン	123.5	11.5	ベナン	74.6	8.0
バングラデシュ	149.9	6.5	コートジボワール	64.9	6.0	サウジアラビア	58.8	6.3
サウジアラビア	139.8	6.1	サウジアラビア	64.0	5.9	バングラデシュ	55.6	6.0
ギニア	114.5	5.0	ギニア	62.4	5.8	アラブ首長国連邦	53.4	5.8
トーゴ	113.9	5.0	バングラデシュ	53.9	5.0	ネパール	34.4	3.7
コートジボワール	111.2	4.8	トーゴ	52.0	4.8	ギニア	49.5	5.3
その他	1,454.8	63.2	その他	655.3	60.9	その他	601.5	64.8
計	2,300.8	100.0	計	1,076.1	100.0	計	927.8	100.0

資料: インド農業・加工食品輸出振興局(APEDA)「Agri Xchange」をもとに農林水産省で作成

## < ベトナム > 2026/27 年度の生産量は、前年度から 0.4%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA「Grain and Feed Annual」(2026.4.15)によれば、2026/27 年度の実産量は、コメ農家により収益性の高い作物等(果物・野菜・養殖)へシフトする傾向が続き、収穫面積が前年度から 1.5%減少し、前年度から 0.4%減の 26.1 百万トンとなる見込み。また 2025/26 年度の実産量が前年度から 3.1%減の 6.80 百万ヘクタール、生産量は前年度から 2.6%減の 26.2 百万トンとなる見込み。

ベトナム総統計局(2026.5.3)によれば、2026年(USDA:2025/26年度)の全国の冬春作の作付面積は、4月20日現在、前年同期に比べ3.7万ヘクタール減の293.3万ヘクタールの見込み。内北部では103.8万ヘクタールで、1.3万ヘクタール減。南部が189.5万ヘクタールで、2.4万ヘクタール減となっている。この内、メコンデルタ地域では、作付面積の90.3%に当たる112万ヘクタールが収穫された。雨季米(夏秋作)は、4月20日現在、南部で35.6万ヘクタールが作付けられ、前年同期50.9%に相当する。内メコンデルタ地域は、27.3万ヘクタールに達し、全体の44.2%を占める。

アセアン食料安全保障情報システム(2026.4)によれば、北部では、乾季米(冬春作)が分けつ期から幼穂分化期に入り、好天に恵まれ、灌漑水の確保が改善され、作柄は良好。南部では乾季米(冬春作)の収穫が進み、作付面積190万ヘクタールの内、約60万ヘクタールが収穫済で平均単収は6.9トン/ヘクタールと予測されている。一方、メコンデルタ地域では雨季米(夏秋作)の作付けが開始され、作付面積は約18万ヘクタールに達している。

【貿易情報・その他】USDA「Rice Outlook:May 2026」(2026.5.14)によれば、2026/27 年度の輸入量は、主にカンボジアからのもみ米の輸入増により、前年度から 2.6%増の 4.0 百万トンと、過去最高を記録すると予測されている。

USDA によれば、2026/27 年度の実産量は、アフリカや東南アジアの主要市場からの需要拡大を受け、輸出が増加すると予測され、前年度から 1.3%増の 8.0 百万トンとなる見込み。一方、同「Grain and Feed Annual」(2026.4.15)は、2026/27 年度の実産量を 7.6 百万トンと予測しており、2023/24 年度(9.0 百万トン)からの減少傾向が続くと予測している。ベトナム税関総局によれば、2025/26 年度のうち 2026 年1~4月の輸出量は、337.4 万トンと前年同期(342.2 万トン)に比べ 1.4%減。輸出先国別には、フィリピン 169.1 万トン(50.1%)、中国 56.3 万トン(16.7%)、ガーナ 23.3 万トン(6.9%)の順(表)。

USDA によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、生産量の減少及び輸出量の増加を受け、前年度から 12.0%減の 2.2 百万トンとなる見込み。

## コメベトナム

北部で概ね二期作、南部で三期作。主に長粒種、一部で短粒種も栽培。

(単位:百万精米トン)

年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27 (27年1月~27年12月)		
			予測値、( )はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	26.9	26.2	26.1 (28.3)	-	▲ 0.4
消費量	22.5	22.5	22.4 (23.5)	-	▲ 0.4
輸 出 量	8.1	7.9	8.0 (8.6)	-	1.3
輸 入 量	3.5	3.9	4.0 (3.6)	-	2.6
期末在庫量	2.8	2.5	2.2 (3.0)	-	▲ 12.0
期末在庫率	9.2%	8.2%	7.2% (9.4%)	-	▲ 1.0
(参考)					
収穫面積(百万ha)	7.02	6.80	6.70 (7.12)	-	▲ 1.5
単収(もみt/ha)	6.12	6.16	6.23 (3.98)	-	1.1

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、  
「World Agricultural Production」 (12 May 2026)  
IGC 「Grain Market Report」 (23 April 2026) (単収は精米t/ha)

## 写真 成熟期の圃場



カントー市沿岸部の稲作農家。作付け後94日目、成熟期にある。約1週間後に収穫予定(5月11日撮影)。

表 ベトナムのコメの輸出先国と輸出量

国 名	2024/25年度 (2025年1月~12月)		2024/25年度 (2025年1月~4月)		2025/26年度 (2026年1月~4月)			
	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
フィリピン	320.7	39.8	フィリピン	148.3	43.3	フィリピン	169.1	50.1
コートジボワール	105.5	13.1	コートジボワール	44.0	12.9	中国	56.3	16.7
ガーナ	91.9	11.4	中国	36.2	10.6	ガーナ	23.3	6.9
中国	74.7	9.3	ガーナ	30.4	8.9	コートジボワール	22.6	6.7
マレーシア	51.5	6.4	マレーシア	13.5	3.9	マレーシア	18.1	5.4
セネガル	16.8	2.1	バングラデシュ	10.5	3.1	シンガポール	4.5	1.3
その他	145.1	18.0	その他	59.3	17.3	その他	43.4	12.9
計	806.3	100.0	計	342.2	100.0	計	337.4	100.0

資料: ベトナム税関総局「月別主要輸出統計データ」をもとに農林水産省で作成

## II 油糧種子 大豆

### (1) 国際的な大豆需給の概要(詳細は右表を参照)

<USDAの見通し> 2026/27年度

**生産量** 前年度比 前月比

・パラグアイ等で減少するものの、ブラジル、米国、アルゼンチン、カナダ、ウルグアイ、インド等で増加し、前年度から増加した。史上最高の見込み。

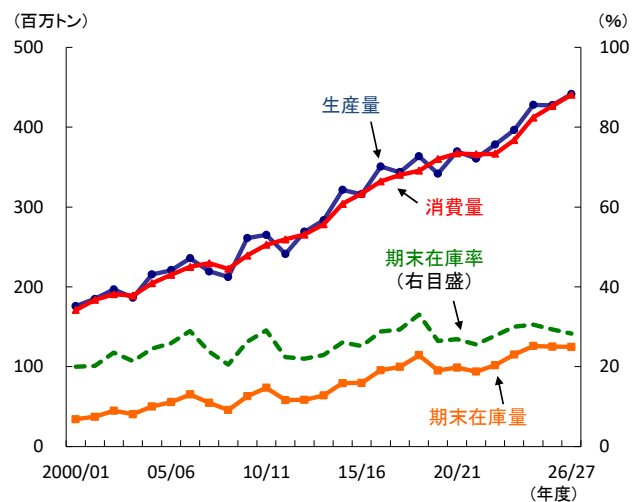
**消費量** 前年度比 前月比

・EU、イラン等で減少するものの、ブラジル、米国、中国、アルゼンチン、インド、トルコ、パキスタン、ベトナム等で増加し、前年度から増加した。史上最高の見込み。

**輸出量** 前年度比 前月比

・アルゼンチン、パラグアイ等で減少するものの、米国、ブラジル、ウルグアイ等で増加し、前年度から増加した。史上最高の見込み。

**期末在庫量** 前年度比 前月比



資料:USDA「PS&D」(2026.5.12)をもとに農林水産省で作成

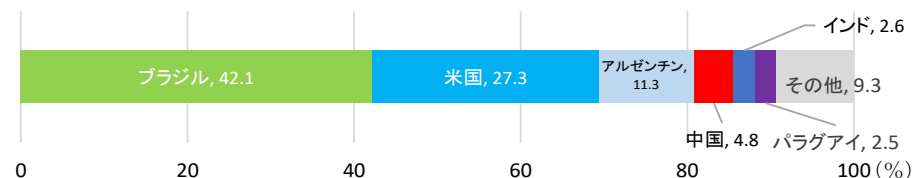
## ◎世界の大豆需給

(単位:百万トン)

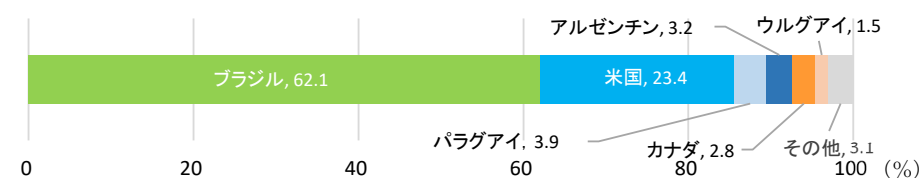
年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27		
			予測値	前月予測からの 変更	対前年度 増減率(%)
生産量	427.9	427.6	441.5	-	3.3
消費量	412.1	426.6	440.7	-	3.3
うち搾油用	359.1	369.5	383.1	-	3.7
輸出量	184.2	186.6	189.2	-	1.4
輸入量	179.2	184.8	188.0	-	1.8
期末在庫量	125.9	125.1	124.8	-	▲ 0.3
期末在庫率	30.6%	29.3%	28.3%	-	▲ 1.0

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(12 May 2026)

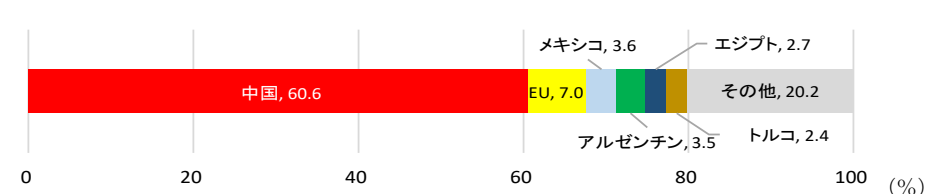
### ○ 2026/27年度 世界の大豆の生産量(441.5百万トン)



### ○ 2026/27年度 世界の大豆の輸出量(189.2百万トン)



### ○ 2026/27年度 世界の大豆の輸入量(188.0百万トン)



## (2) 国別の大豆の需給動向

### < 米国 > 2026/27 年度の生産量は前年度から 4.1%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の実生産量は、とうもろこしから大豆に作付けがシフトすることを受け前年度から 4.1%増、過去5年平均(117.2 百万トン)から 3.0%増の 120.7 百万トンとなる見込み。

同「Crop Progress」(2026.5.18)によれば、5月 17 日現在の大豆の作付進捗率は 67%と、前年同期(63%)及び過去5年平均(53%)を上回っている。また、出芽進捗率は 32%と、前年同期(32%)と同水準であり、過去5年平均(23%)を上回っている。

【需要状況】USDA によれば、2026/27 年度の消費量は、前年度から 4.3%増の 77.8 百万トンと史上最高の見込み。米国環境保護庁(EPA)は 2026 年3月、2026~27 年の再生可能燃料混合義務量を発表し、バイオディーゼルの義務量は 2025 年の 33.5 億ガロンに対して、2026 年は 54.0 億ガロン、2027 年は 57.0 億ガロンと過去最高の数量が設定された。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の輸出量は、生産量の増加を受け前年度から 6.5%増の 44.4 百万トンの見込み。

同「Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals」によれば、2025/26 年度のうち 2025 年9月~2026 年4月の輸出量は、前年同期(4,348.9 万トン)に比べ 23.4%減の 3,332.5 万トン。輸出先国別には、中国 1,060.4 万トン(31.8%)、エジプト 374.5 万トン(11.2%)、メキシコ 359.4 万トン(10.8%)の順(表)。

同「Oilseeds: World Markets and Trade」(2026.5.12)によれば、過去1か月間、大豆の輸出価格は上昇を続け、アルゼンチンの収穫が天候の影響で遅れたことや米ドル安が米国の輸出価格を押し上げた。国際穀物理事会(IGC)によれば、5月7日の米国の輸出価格は前月(4月7日)から 14ドル/トン上昇し 473ドル/トン、ブラジルは前月から 16ドル/トン上昇し 447ドル/トン、アルゼンチンは前月から 16ドル/トン上昇し 429ドル/トンとなった(図)。

USDA によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、消費量及び輸出量の増加を受け前年度から 8.8%減となるものの、過去5年平均(8.4 百万トン)から 0.3%増の 8.4 百万トンとなる見込み。期末在庫率は、前年度から 1.0ポイント減の 6.9%となる見込み。

## 大豆—米国

(概ね5~6月に作付けされ、9~11月に収穫される。)

年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27 (26年9月~27年8月)		
			予 測 値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	119.1	116.0	120.7	-	4.1
消 費 量	69.1	74.6	77.8	-	4.3
うち搾油用	66.6	71.6	74.8	-	4.6
輸 出 量	51.2	41.6	44.4	-	6.5
輸 入 量	0.8	0.7	0.7	-	-
期末在庫量	8.8	9.3	8.4	-	▲ 8.8
期末在庫率	7.3%	8.0%	6.9%	-	▲ 1.0

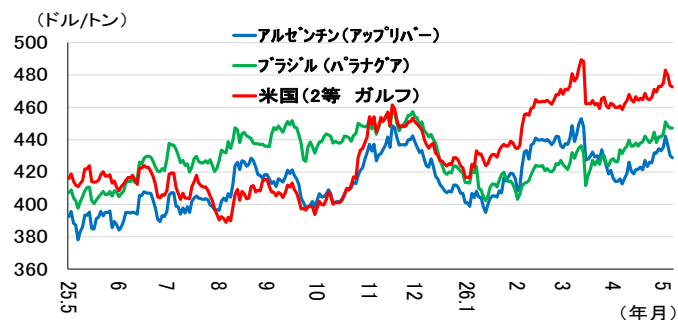
(参考)  
収穫面積(百万ha) 34.89 32.55 33.87 - 4.1  
単収(t/ha) 3.41 3.56 3.56 - -  
資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、  
「World Agricultural Production」(12 May 2026)

### 表 米国の大豆の輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年9月~2025年8月)			2024/25年度 (2024年9月~2025年4月)			2025/26年度 (2025年9月~2026年4月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
中国	2,232.5	44.6	中国	2,226.0	51.2	中国	1,060.4	31.8
メキシコ	498.5	10.0	メキシコ	349.9	8.0	エジプト	374.5	11.2
エジプト	369.2	7.4	エジプト	260.7	6.0	メキシコ	359.4	10.8
ドイツ	273.1	5.5	ドイツ	207.9	4.8	インドネシア	189.5	5.7
イタリア	210.0	4.2	イタリア	195.7	4.5	日本	153.6	4.6
その他	1,417.9	28.4	その他	1,108.7	25.5	その他	1,195.0	35.9
合計	5,001.3	100.0	合計	4,348.9	100.0	合計	3,332.5	100.0

資料:USDA「Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals」をもとに農林水産省で作成

### 図 各国の大豆輸出価格(FOB)の推移



資料:IGC のデータをもとに農林水産省で作成

## < ブラジル > 2026/27 年度の生産量は前年度から 3.3%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の実績は、収穫面積及び単収の増加を受け前年度から 3.3%増、過去5年平均(159.9 百万トン)から 16.3%増の 186.0 百万トンと史上最高の見込み(図)。同「Oilseeds and Products Annual」(2026.3.18)によれば、ブラジルでは近年、技術開発や研究に多額の投資を行っており、栽培技術の著しい進歩により収量の向上が期待される。

同「World Agricultural Production」(2026.5.12)によれば、2025/26 年度の実績は、前月予測からの変更はなく 180.0 百万トンの見込み。衛星分析及び政府や業界の情報を基に収穫面積が2%下方修正されたものの、豊富な降雨と良好な作柄により単収が2%上方修正された。

ブラジル食料供給公社(CONAB)の月例報告(2026.5.14)によれば、2025/26 年度の実績は、作付面積及び単収の増加を受け前年度から 5.0%増の 180.1 百万トンと史上最高を記録する見込み。収穫進捗率は5月 11 日時点で 98.3%に達した。南東部、中西部、南部のパラナ州、北部のトカンティン州では収穫が終了し、南部のリオ・グランデ・ド・スール州、サンタカタリーナ州の収穫進捗率は 50%を超えている。北部のマラニョン州では6月中旬まで収穫が続く見込み。

【需要状況】USDA によれば、2026/27 年度の実績は、ブラジル国内の大豆粕及び大豆油の堅調な需要を受け前年度から 5.6%増の 69.6 百万トンと史上最高の見込み。同「Oilseeds and Products Annual」(2026.3.18)によれば、大豆油は、バイオディーゼル混合義務量引き上げによる需要増が見込まれている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の実績は、生産量の増加を受け前年度から 2.2%増の 117.5 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10 月～2026 年4月の輸出量は、前年同期(4,669.6 万トン)に比べ 16.8%増の 5,455.0 万トン。輸出先国別には、中国 4,041.0 万トン(74.1%)、スペイン 200.0 万トン(3.7%)、タイ 197.2 万トン(3.6%)の順となっている(表)。

USDA によれば、2026/27 年度の実績は、消費量の増加等を受け前年度から 0.8%減となるものの、過去5年平均(33.9 百万トン)からは 10.4%増の 37.4 百万トンとなる見込み。期末在庫率は、前年度から 0.9 ポイント減の 20.0%となる見込み。

## 大豆—ブラジル

(概ね9～12月に作付けされ、1～4月に収穫される。)

(単位:百万トン)

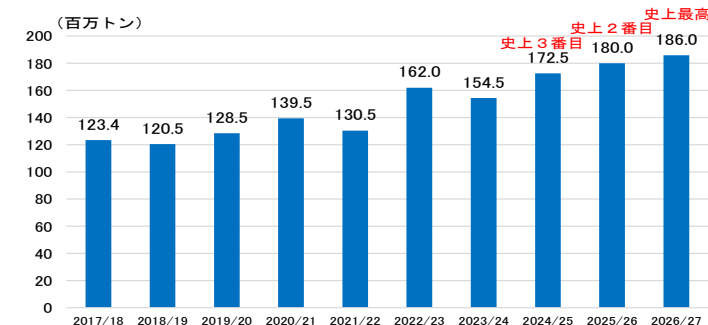
年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27 (26年10月～27年9月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	172.5	180.0 (180.1)	186.0 (-)	- (-)	3.3 (-)
消費量	62.2	65.9 (64.3)	69.6 (-)	- (-)	5.6 (-)
うち搾油用	58.2	61.5 ...	65.0 ...	- ...	5.7 ...
輸出量	103.1	115.0 (116.0)	117.5 (-)	- (-)	2.2 (-)
輸入量	0.7	0.9 (0.5)	0.8 (-)	- (-)	▲11.1 (-)
期末在庫量	37.7	37.7 (10.3)	37.4 (-)	- (-)	▲0.8 (-)
期末在庫率	22.8%	20.8% (5.7%)	20.0% (-)	- (-)	▲0.9 (-)
(参考)					
収穫面積(百万ha)	47.40	48.50 (48.72)	50.00 (-)	- (-)	3.1 (-)
単収(t/ha)	3.64	3.71 (3.70)	3.72 (-)	- (-)	0.3 (-)

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,

「World Agricultural Production」(12 May 2026)

CONAB「Graos」(14 May 2026)※( )書き。なお、CONABの収穫面積は作付面積である。

### 図 ブラジルの大豆の生産量の推移



資料:USDA「PS&D」(2026.5.12)をもとに農林水産省で作成

### 表 ブラジルの大豆の輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年10月～2025年9月)			2024/25年度 (2024年10月～2025年4月)			2025/26年度 (2025年10月～2026年4月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
中国	7,968.8	77.3	中国	3,475.1	74.4	中国	4,041.0	74.1
スペイン	396.3	3.8	タイ	193.4	4.1	スペイン	200.0	3.7
タイ	365.5	3.5	スペイン	171.0	3.7	タイ	197.2	3.6
トルコ	184.8	1.8	トルコ	93.0	2.0	トルコ	151.5	2.8
イラン	146.3	1.4	イラン	80.9	1.7	パキスタン	106.8	2.0
その他	1,252.1	12.1	その他	656.2	14.1	その他	758.4	13.9
合計	10,313.8	100.0	合計	4,669.6	100.0	合計	5,455.0	100.0

資料:ブラジル貿易統計のデータをもとに農林水産省で作成

## < カナダ > 2026/27 年度の生産量は前年度から 10.4%増加する見込み(AAFC)

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2026.5.21)によれば、2026/27 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の増加を受け前年度から 10.4%増の 7.5 百万トンとなる見込み(図)。2026/27 年度の作付面積は、他作物の投入コスト上昇及び価格下落による収益性低下により作付けが大豆へシフトし、前年度(2.34 百万ヘクタール)から 1.8%増の 2.38 百万ヘクタールとなる見込み。最近の投入コストの上昇を踏まえると大豆は更に作付面積が増加する可能性がある。カナダ東部では作付けが始まっており、オンタリオ州穀物生産者協会(Grain Farmers of Ontario)によれば、5月第1週時点でオンタリオ州の作付進捗率は5%未満となっている。カナダ西部でも間もなく作付けが始まる見込み。

【需要状況】AAFCによれば、2026/27 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用及び搾油用需要等の増加を受け前年度から 17.9%増の 2.3 百万トンとなる見込み。

【貿易情報・その他】AAFCによれば、2026/27 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 1.8%減の 5.4 百万トンとなるものの、生産量の回復により過去の水準と比較すれば堅調な輸出となる見込み。

USDA「Oilseeds and Products Annual」(2026.4.23)によれば、EU Deforestation Regulation(森林減少防止に関する規則)が 2026 年 12 月 30 日から適用される。これにより森林減少を伴わない土地で生産されたことを証明する必要があり、EU へ輸出を行う場合、カナダの大豆生産者の負担が増加する。

AAFCによれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測から 0.15 百万トン上方修正されたものの、前年度から 0.4%減の 5.5 百万トン。しかしながら史上3番目の輸出量となる見込み。

カナダ統計局によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 8 月～2026 年 3 月の輸出量は、前年同期(455.9 万トン)に比べ 2.7%増の 468.0 万トン。輸出先国別には、中国 188.1 万トン(40.2%)、アルジェリア 52.7 万トン(11.3%)、オランダ 52.3 万トン(11.2%)の順となっている(表)。

AAFCによれば、2026/27 年度の期末在庫量は、期首在庫量の引下げを受け前月予測から 0.2 百万トン下方修正されたものの、生産量の増加等を受け前年度から 162.3%増の 0.4 百万トンとなる見込み。期末在庫率は、前年度から 3.2 ポイント増の 5.2%となる見込み。

## 大豆－カナダ

(概ね5～6月に作付けされ、9～11月に収穫される。)

(単位:百万トン)

年 度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27 (26年8月～27年7月)		
			予測値、( )はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	7.6	6.8 (6.8)	7.3 (7.5)	- (-)	7.5 (10.4)
消費量	2.3	2.1 (2.0)	2.3 (2.3)	- (-)	7.1 (17.9)
うち搾油用	1.7	1.4 (1.7)	1.5 (1.8)	- (-)	7.1 (6.1)
輸出量	5.6	5.1 (5.5)	5.3 (5.4)	- (-)	3.9 (▲1.8)
輸入量	0.3	0.4 (0.3)	0.3 (0.5)	- (-)	▲16.7 (50.0)
期末在庫量	0.6	0.6 (0.2)	0.6 (0.4)	- (▲0.2)	9.1 (162.3)
期末在庫率	7.7%	7.7% (2.1%)	8.0% (5.2%)	- (▲3.1)	0.3 (3.2)

(参考)

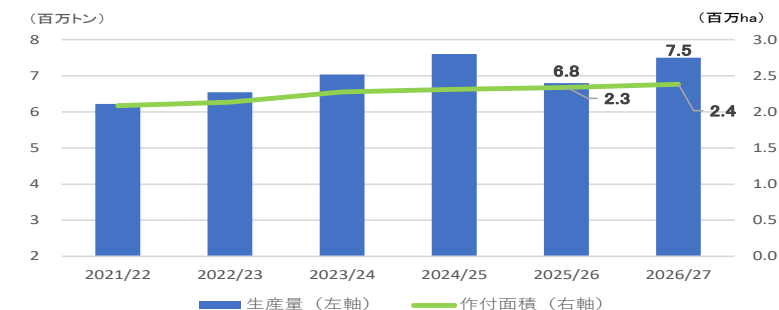
収穫面積(百万ha)	2.29	2.32 (2.32)	2.35 (2.38)	- (-)	1.3 (2.5)
単収(t/ha)	3.32	2.93 (2.93)	3.11 (3.15)	- (-)	6.1 (7.5)

資料:USDA「PS&D」(12 May 2026)

「World Agricultural Production」(12 May 2026)

AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(21 May 2026)※( )書き

### 図 カナダの大豆の作付面積と生産量の推移



資料:AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(2026.5.21)をもとに農林水産省にて作成

### 表 カナダの大豆の輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年8月～2025年7月)			2024/25年度 (2024年8月～2025年3月)			2025/26年度 (2025年8月～2026年3月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
中国	104.2	19.0	中国	98.4	21.6	中国	188.1	40.2
イラン	83.9	15.3	イラン	83.9	18.4	アルジェリア	52.7	11.3
アルジェリア	52.1	9.5	アルジェリア	44.3	9.7	オランダ	52.3	11.2
米国	42.2	7.7	米国	26.3	5.8	イラン	43.1	9.2
日本	38.6	7.1	バングラデシュ	26.1	5.7	日本	21.9	4.7
インドネシア	31.8	5.8	日本	23.4	5.1	米国	21.6	4.6
その他	194.4	35.5	その他	153.5	33.7	その他	88.3	18.9
合計	547.2	100.0	合計	455.9	100.0	合計	468.0	100.0

資料:カナダ統計局のデータをもとに農林水産省で作成

## < 中国 > 2026/27 年度の生産量は前年度から 0.5%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の実産量は、単収の増加を受け前年度から 0.5%増、過去5年平均(19.8 百万トン)から 6.0%増の 21.0 百万トンと史上最高の見込み。

中国中央気象台「全国農業気象週報」(2026.5.11)によれば、5月上旬時点で、黒龍江省、吉林省、貴州省では作付期、新疆ウイグル自治区では出芽期、江西省では3葉期を迎えている。黒龍江省では、気温上昇及び降水による土壌水分の補給により作付け及び出芽に適した条件となっている一方、吉林省の一部では低温及び土壌水分過多の影響で作付作業や出芽に遅れが生じる可能性がある。

【需要状況】USDA によれば、2026/27 年度の消費量は、搾油用需要の増加等を受け前年度から 1.6%増の 135.0 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の輸入量は、前年度から 1.8%増の 114.0 百万トンと史上最高の見込み(図)。同「Oilseeds and Products Annual」(2026.3.19)によれば、大豆粕需要の鈍化により、今後数年間は大豆輸入の伸びが鈍化すると予測される。

中国海関統計によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10 月～2026 年 3 月の輸入量は、前年同期(4,029.2 万トン)に比べ 5.1%増の 4,233.1 万トン。輸入先国別には、ブラジル 2,658.8 万トン(62.8%)、アルゼンチン 872.1 万トン(20.6%)、米国 341.2 万トン(8.1%)の順(表)。中国国務院関税規則委員会は、2025 年 10 月末の米中経済貿易協定の合意を踏まえ、税委会公告 2025 年第 4 号の追加関税 34%のうち 5 月 14 日から停止されてきた 24%の適用を 11 月 10 日から更に 1 年間停止(同第 10 号)し、同第 2 号の追加関税 15%の適用を停止すると発表(同第 9 号)した。これにより米国産大豆に課す追加関税は 10%となった。

中国農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2026 年 3 月号」によれば、3 月の国際価格は原油価格の上昇等を受け上昇傾向。国内価格は前月(4,740 元/トン)から上昇し 4,980 元/トンとなった。気温の上昇に伴い大豆消費が低調な時期に入り市場における売買は全体として低調なことから、今後、国内の大豆価格は安定して推移する見込み。

USDA によれば、2026/27 年度の期末在庫量は、消費量の増加を受け前年度から 0.2%減となるものの、過去5年平均(37.9 百万トン)から 16.7%増の 44.3 百万トンとなる見込み。期末在庫率は、前年度から 0.6 ポイント減の 32.8%となる見込み。

## 大豆—中国

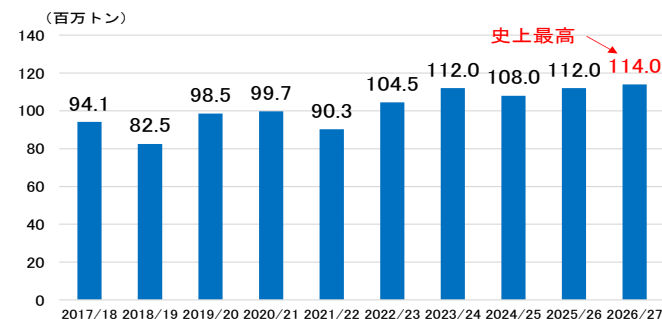
(概ね4～6月に作付けされ、9～10月に収穫される。)

(単位:百万トン)

年度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27 (26年10月～27年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	20.7	20.9	21.0 (21.2)	-	0.5
消費量	127.4	132.9	135.0 (139.4)	-	1.6
うち搾油用	103.5	108.0	110.0 (115.0)	-	1.9
輸出入量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	▲ 16.7
輸入量	108.0	112.0	114.0 (116.0)	-	1.8
期末在庫量	44.5	44.4	44.3 (48.9)	-	▲ 0.2
期末在庫率	34.9%	33.4%	32.8% (35.1%)	-	▲ 0.6
(参考)					
収穫面積(百万ha)	10.33	10.30	10.30 (10.50)	-	-
単収(t/ha)	2.00	2.03	2.04 (-)	-	0.5

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、  
「World Agricultural Production」(12 May 2026)  
IGC「Grain Market Report」(23 April 2026)

### 図 中国の大豆の輸入量の推移



資料:USDA「PS&D」(2026.5.12)をもとに農林水産省で作成

### 表 中国の大豆の輸入先国と輸入量

国名	2024/25年度 (2024年10月～2025年9月)		2024/25年度 (2024年10月～2025年3月)		2025/26年度 (2025年10月～2026年3月)			
	輸入量 (万トン)	シェア (%)	輸入量 (万トン)	シェア (%)	輸入量 (万トン)	シェア (%)		
ブラジル	7,610.8	69.6	米国	1,915.6	47.5	ブラジル	2,658.8	62.8
米国	2,440.9	22.3	ブラジル	1,695.0	42.1	アルゼンチン	872.1	20.6
アルゼンチン	476.6	4.4	アルゼンチン	198.1	4.9	米国	341.2	8.1
ウルグアイ	244.3	2.2	ウルグアイ	110.6	2.7	ウルグアイ	179.6	4.2
カナダ	118.6	1.1	カナダ	86.3	2.1	カナダ	136.5	3.2
ロシア	45.0	0.4	ロシア	23.4	0.6	ロシア	42.5	1.0
その他	2.1	0.0	その他	0.2	0.0	その他	2.5	0.1
合計	10,938.3	100.0	合計	4,029.2	100.0	合計	4,233.1	100.0

資料:中国海関統計のデータをもとに農林水産省で作成

## < アルゼンチン > 2026/27 年度の生産量は前年度から 4.2%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2026/27 年度の実生産量は、収穫面積の増加を受け前年度から 4.2%増、過去5年平均(43.2 百万トン)から 15.6%増の 50.0 百万トンとなる見込み(図)。同「Oilseeds and Products Annual」(2026.4.9)によれば、現在高騰する肥料価格がさらに上昇し作付時期を迎えた場合、とうもろこしに比べ肥料投入量が少ない大豆への作付けシフトがさらに進む可能性がある。

USDA によれば、2025/26 年度の実生産量は、収穫面積の減少を受け前年度から 6.1%減の 48.0 百万トンとなる見込み。同「Oil Crops Outlook」(2026.3.12)によれば、早植え大豆は、重要な生育期間である 11～12 月に降雨に支えられ、乾燥が始まる前に莢伸長期に入った。遅植え大豆は、1月に高温乾燥の影響を受けたものの、2月の降雨により作柄は安定した。

アルゼンチン農牧漁業庁(SAGyP)の週報(2026.5.14)によれば、5月14日現在の 2025/26 年度の実大豆の収穫進捗率は 60%と前年同期(66%)を下回っており、主要生産州では、ブエノス・アイレス州 49%(前年同期 48%)、コルドバ州 79%(同 81%)、サンタフェ州 74%(同 81%)となっている。

【需要状況】USDA によれば、2026/27 年度の実消費量は、搾油用需要の増加を受け前年度から 3.1%増の 49.9 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2026/27 年度の実輸出量は、前年度から 27.3%減の 6.0 百万トンとなる見込み。同「Oil Crops Outlook」(2026.5.14)によれば、2025/26 年度は、政府が 2025 年9月に一時的に輸出税を撤廃したことで、輸出業者が特に中国向けに大量の輸出を行った。

USDA によれば、2026/27 年度の実輸入量は、前年度から 11.0%減の 6.5 百万トンとなる見込み。USDA「Oilseeds: World Markets and Trade」(2026.5.12)によれば、当該減少は、国内の搾油用大豆供給量の増加及びパラグアイからの輸入量減少による。

アルゼンチン政府は、2025 年 12 月 12 日、大豆の輸出税を 26%から 24%に引き下げた。これは、生産者の税負担を軽減し、農業分野の競争力を高めることを目的としている(表)。

USDA によれば、2026/27 年度の実期末在庫量は、生産量の増加等を受け前年度から 2.6%増、過去5年平均(22.6 百万トン)から 6.1%増の 23.9 百万トンとなる見込み。期末在庫率は前年度から 1.6 ポイント増の 42.8%となる見込み。

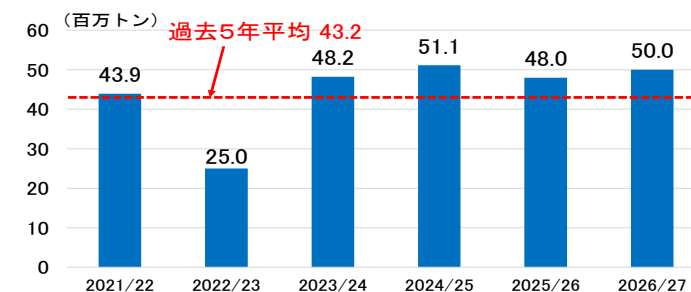
## 大豆—アルゼンチン

(大豆は、概ね 10～1月に作付けされ、3～7月に収穫される。)

年度	2024/25	2025/26 (見込み)	2026/27 (26年10月～27年9月)		
			予測値、( )はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	51.1	48.0	50.0 (50.0)	-	4.2
消費量	48.9	48.4	49.9 (49.9)	-	3.1
うち搾油用	43.2	41.5	43.0 (43.4)	-	3.6
輸出量	7.9	8.3	6.0 (4.8)	-	▲ 27.3
輸入量	6.3	7.3	6.5 (5.9)	-	▲ 11.0
期末在庫量	24.7	23.3	23.9 (6.1)	-	2.6
期末在庫率	43.4%	41.2%	42.8% (11.2%)	-	1.6
(参考)					
収穫面積(百万ha)	17.46	16.30	17.10 (17.15)	-	4.9
単収(t/ha)	2.93	2.94	2.92 (-)	-	▲ 0.7

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,  
「World Agricultural Production」(12 May 2026)  
IGC「Grain Market Report」(23 April 2026)

図 アルゼンチン大豆の実生産量の推移



資料:USDA「PS&D」(2026.5.12)をもとに農林水産省で作成

表 アルゼンチンの輸出税率の推移(2022年12月30日以降)

政令	公布日	小麦	とうもろこし	大豆	大豆油 大豆粕
政令851/2021号	2022年12月30日	12	12	33	31
政令38/2025号	2025年1月27日	9.5	9.5	26	24.5
政令439/2025号	6月27日	9.5	12	33	31
政令526/2025号	7月31日	9.5	9.5	26	24.5
政令682/2025号	9月22日	0	0	0	0
政令526/2025号	9月24日(※)	9.5	9.5	26	24.5
政令877/2025号	12月12日	7.5	8.5	24	22.5

※9月に一時的に輸出税を撤廃したものの、設定した輸出額の上限に達したため、以前の輸出税が復活した。

資料:ロサリオ穀物証券取引所「Evolución de los derechos de exportación para productos agroindustriales seleccionados」をもとに農林水産省にて作成

(参考1)本レポートに使用されている各国の市場年度について (2026/27年度)

	小麦	とうもろこし	コメ	大豆
米国	26年6月～27年5月	26年9月～27年8月	26年8月～27年7月	26年9月～27年8月
カナダ	26年8月～27年7月			26年8月～27年7月
豪州	26年10月～27年9月		27年3月～28年2月	
EU	26年7月～27年6月	26年10月～27年9月		
中国	26年7月～27年6月	26年10月～27年9月	26年7月～27年6月	26年10月～27年9月
ロシア	26年7月～27年6月	26年10月～27年9月		26年9月～27年8月
ウクライナ	26年7月～27年6月	26年10月～27年9月		
ブラジル		27年3月～28年2月	27年4月～28年3月	26年10月～27年9月
アルゼンチン	26年12月～27年11月	27年3月～28年2月		26年10月～27年9月
タイ			27年1月～12月	
インド	26年4月～27年3月		26年10月～27年9月	
ベトナム			27年1月～12月	

※市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。

例えば、2026/27年度は、米国の小麦では2026年6月～2027年5月、ブラジルのとうもろこしでは2027年3月～2028年2月です。

なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads> (「Reference Data」タブを参照)

## (参考2) 単位換算表

### 1 容積→重量

1 Bushel (ブッシェル) (穀物により異なる)	0.027216 メトリックトン	小麦、大豆	米国等
	0.021772 メトリックトン	大麦	
	0.025401 メトリックトン	とうもろこし	
	0.014515 メトリックトン	オーツ	
1 CWT(百ポンド)	0.045359 メトリックトン	コメ	米国等

### 2 面積







1Acre(エーカー)	0.40469 ヘクタール	米国等
1rai(ライ)	0.16 ヘクタール	タイ
1 畝(ムー)	0.0667 ヘクタール	中国

### 3 その他

1ガロン	4.536 リットル	英国	
1ガロン	3.785 リットル	米国	
1LAKH(ラーク)	10万	位取り	インド
1斤	500g	重量	中国
華氏(°F)	摂氏(°C) = (°F - 32) ÷ 1.8		

# クロープカレンダー（小麦）







播種
  収穫
  Market year

国名	2025/26年度 生産量	作期	N年												N+1年											
			1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
EU 	145.1百万トン (シェア17.2%)	冬小麦																								
		春小麦																								
中国 	140.1百万トン (シェア16.6%)	冬小麦																								
		春小麦																								
インド 	117.9百万トン (シェア14.0%)																									
ロシア 	90.3百万トン (シェア10.7%)	冬小麦																								
		春小麦																								
米国 	54.0百万トン (シェア6.4%)	冬小麦																								
		春小麦																								
カナダ 	40.0百万トン (シェア4.7%)	春小麦																								
		冬小麦																								
豪州 	36.0百万トン (シェア4.3%)																									

資料:USDA「Crop Calendars」、「PS&D」(2026.5)。※作期の記載順は生産量の多い順である。

# クロープカレンダー（コメ）







播種
  収穫
  Market year

国名	2025/26年度 生産量	作期	N年												N+1年											
			1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
 インド 152.0百万トン (シェア28.0%)	カリフ(雨期)	[Sowing: May, Harvest: Oct]												[Sowing: May, Harvest: Oct]												
		ラビ(乾期)	[Sowing: Feb, Harvest: Jun]												[Sowing: Feb, Harvest: Jun]											
 中国 146.3百万トン (シェア27.0%)	一期作	[Sowing: Apr, Harvest: Aug]												[Sowing: Apr, Harvest: Aug]												
	二期作遅植え	[Sowing: Jun, Harvest: Oct]												[Sowing: Jun, Harvest: Oct]												
	二期作早植え	[Sowing: Mar, Harvest: Jul]												[Sowing: Mar, Harvest: Jul]												
 バングラデシュ 37.7百万トン (シェア6.9%)	ボロ種	[Sowing: Jan, Harvest: May]												[Sowing: Jan, Harvest: May]												
	アマン種	[Sowing: Jun, Harvest: Oct]												[Sowing: Jun, Harvest: Oct]												
	アウス種	[Sowing: Mar, Harvest: Jul]												[Sowing: Mar, Harvest: Jul]												
 インドネシア 33.8百万トン (シェア6.2%)	第1期作	[Sowing: Jan, Harvest: May]												[Sowing: Jan, Harvest: May]												
	第2期作	[Sowing: Feb, Harvest: Jun]												[Sowing: Feb, Harvest: Jun]												
	第3期作	[Sowing: Jun, Harvest: Oct]												[Sowing: Jun, Harvest: Oct]												
 ベトナム 26.2百万トン (シェア4.8%)	南部冬春作	[Sowing: Jan, Harvest: May]												[Sowing: Jan, Harvest: May]												
	北部冬春作	[Sowing: Jun, Harvest: Oct]												[Sowing: Jun, Harvest: Oct]												
	南部夏秋作早植え	[Sowing: Mar, Harvest: Jul]												[Sowing: Mar, Harvest: Jul]												
	北部冬作Lua Mua	[Sowing: Jun, Harvest: Oct]												[Sowing: Jun, Harvest: Oct]												
	南部夏秋作遅植え	[Sowing: Sep, Harvest: Jan]												[Sowing: Sep, Harvest: Jan]												
 タイ 20.7百万トン (シェア3.8%)	雨期作	[Sowing: May, Harvest: Oct]												[Sowing: May, Harvest: Oct]												
	乾期作	[Sowing: Jan, Harvest: May]												[Sowing: Jan, Harvest: May]												

資料:USDA「Crop Calendars」、「PS&D」(2026.5)。※作期の記載順は生産量の多い順である。

# クロープカレンダー（とうもろこし）





播種
  収穫
  Market year

国名	2025/26年度 生産量	作期	N年												N+1年												N+2年	
			1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
米国 	432.3百万トン (シェア32.9%)																											
中国 	301.2百万トン (シェア22.9%)	北部																										
		南部																										
ブラジル 	135.0百万トン (シェア10.3%)	第2期作																										
		第1期作																										
アルゼンチン 	59.0百万トン (シェア4.5%)																											
EU 	56.8百万トン (シェア4.3%)																											
インド 	46.2百万トン (シェア3.5%)	カリフ(雨期)																										
		ラビ(乾期)																										

資料:USDA「Crop Calendars」、 「PS&D」(2026.5)。※作期の記載順は生産量の多い順である。

# クロープカレンダー（大豆）








播種
  収穫
  Market year

国名	2025/26年度 生産量	作期	N年												N+1年												
			1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
ブラジル 	180.0百万トン (シェア42.1%)																										
米国 	116.0百万トン (シェア27.1%)																										
アルゼンチン 	48.0百万トン (シェア11.2%)	第1期作																									
		第2期作																									
中国 	20.9百万トン (シェア4.9%)																										

資料:USDA「Crop Calendars」、「PS&D」(2026.5)。※作期の記載順は生産量の多い順である。

# クロープカレンダー（なたね）

播種
  収穫
  Market year

国名	2025/26年度 生産量	N年												N+1年											
		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
カナダ 	22.0百万トン (シェア23.0%)																								
EU 	20.5百万トン (シェア21.5%)																								
中国 	16.0百万トン (シェア16.8%)																								
インド 	12.0百万トン (シェア12.6%)																								
豪州 	7.7百万トン (シェア8.0%)																								
ロシア 	5.5百万トン (シェア5.8%)																								
ウクライナ 	3.5百万トン (シェア3.7%)																								

資料：USDA「Crop Calendars」、「PS&D」(2026.5)。

(研究報告)

# 世界の食料需給の動向と 中長期的な見通し

—世界食料需給モデルによる2035年の世界食料需給の見通し—

令和8年3月  
農林水産政策研究所



# 目次

## I. 動向編

1. 世界の穀物及び大豆の需給動向	1
2. とうもろこしの需要動向	2
3. とうもろこしの生産量変化	3
4. とうもろこしの需給動向と貿易フローの変化：2002年とうもろこし貿易フロー図	4
5. とうもろこしの需給動向と貿易フローの変化：2023年とうもろこし貿易フロー図	5
6. 大豆の生産量変化	6
7. 大豆の需給動向と貿易フローの変化：2002年大豆貿易フロー図	7
8. 大豆の需給動向と貿易フローの変化：2023年大豆貿易フロー図	8
9. 小麦需給と貿易動向	9
10. 小麦の需給動向と貿易フローの変化：2002年小麦貿易フロー図	10
11. 小麦の需給動向と貿易フローの変化：2023年小麦貿易フロー図	11
12. 米需給と貿易動向	12
13. 中国：食糧安全保障を重視 単収増・面積維持で25年も食糧生産7億トン達成	13
14. 中国における食肉生産・輸入（豚肉・牛肉の価格動向等）	14
15. ロシアとウクライナ：生産は回復傾向	15
16. ブラジル：大豆・とうもろこしの生産動向	16
17. アルゼンチン：ミレイ政権による「ショック療法」施策と輸出税引き下げ	17
18. インドの穀物輸出・植物油輸入動向	18
19. バイオ燃料の需要動向	19
20. さまざまな不確実性下における物価と海上輸送運賃の変動	20
21. 国際穀物等価格の動向	21
22. 国際商品価格・FAO食料価格指数の推移	22

## II. 見通し編

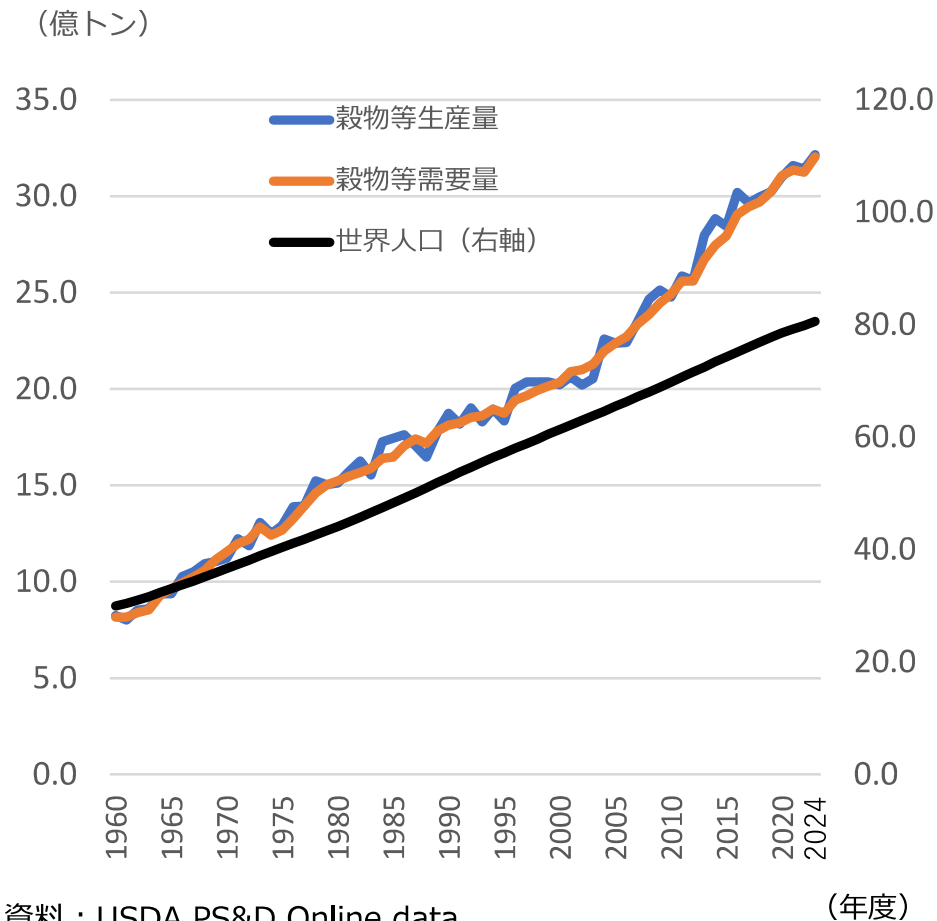
1. 世界食料需給モデルによる予測の目的及び前提	23
2. 2035年における世界の食料需給見通し－『食料需要の伸び鈍化の継続』－【概要】	24
3. 世界食料需給モデルの試算の前提に使用した総人口及びGDPの見通し	25
4. 地域別の需給見通し：とうもろこし	26
5. 地域別の需給見通し：大豆	27
6. 地域別の需給見通し：小麦	28
7. 地域別の需給見通し：米	29
8. 地域別の需給見通し：肉類	30
9. 穀物の需給見通し：世界の穀物の消費・生産量の内訳	31
10. 穀物・畜産物等の需給見通し：穀物及び大豆の国際価格見通し	32
11. 穀物・畜産物等の需給見通し：世界における各品目の消費増加と食料価格 （参考1）OECD-FAO、USDAにおける中期的な世界食料需給見通しの概要	34
（参考2）世界食料需給モデルの概要	35

# I. 動向編

## 1 世界の穀物及び大豆の需給動向

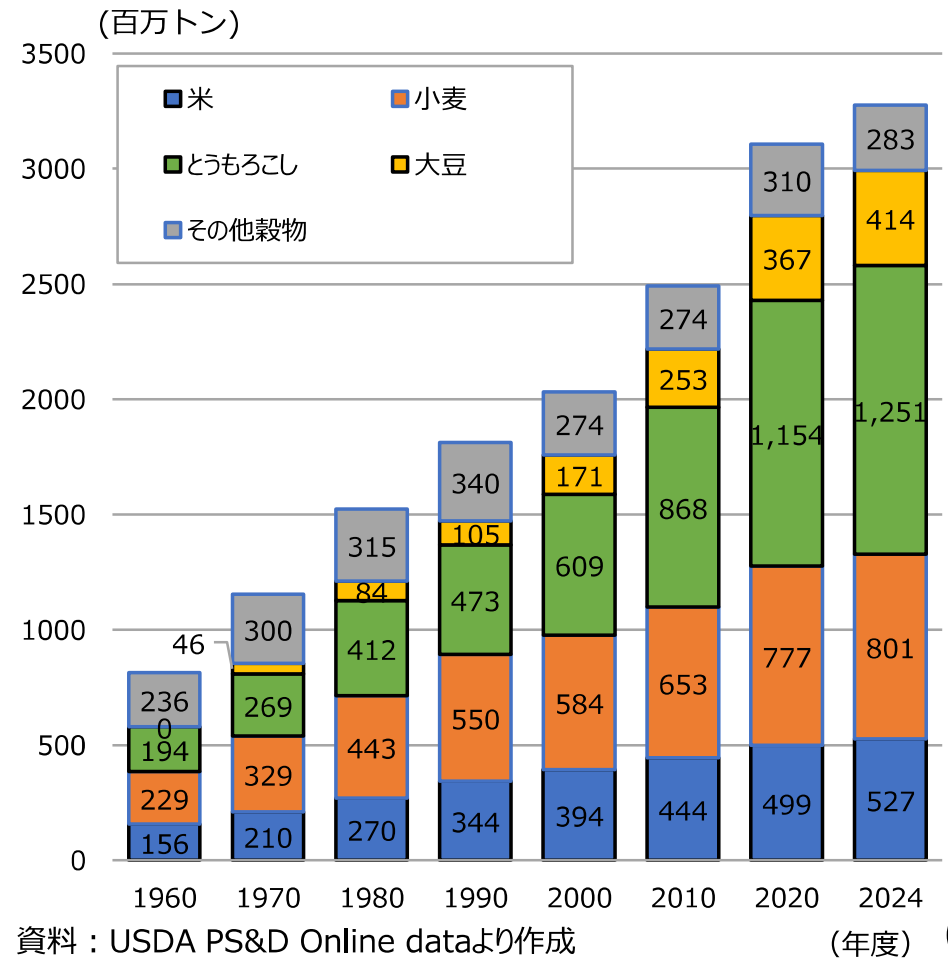
- 世界の穀物及び大豆の需要量は、総人口の伸び率を上回って増加。
  - 需要量は、とうもろこし及び大豆の伸びが大きく増加。穀物の中でとうもろこし需要量が最大。
  - 需要量の増加に対して、生産量も増加。短期的には豊凶等による変動はあるが、COVID-19パンデミック以前は生産量が需要量をやや上回り、近年は生産量と需要量がほぼ均衡。
- (参考) 1970年に比べ、2024年の人口は2.2倍、需要量はそれぞれ小麦が2.4倍、米2.5倍、とうもろこし4.6倍、大豆9.0倍

① 世界の穀物及び大豆の需給と世界人口の動向



資料 : USDA PS&D Online data, UN World Population Prospects: The 2024 Revisionより作成

② 穀物及び大豆の需要の品目別内訳

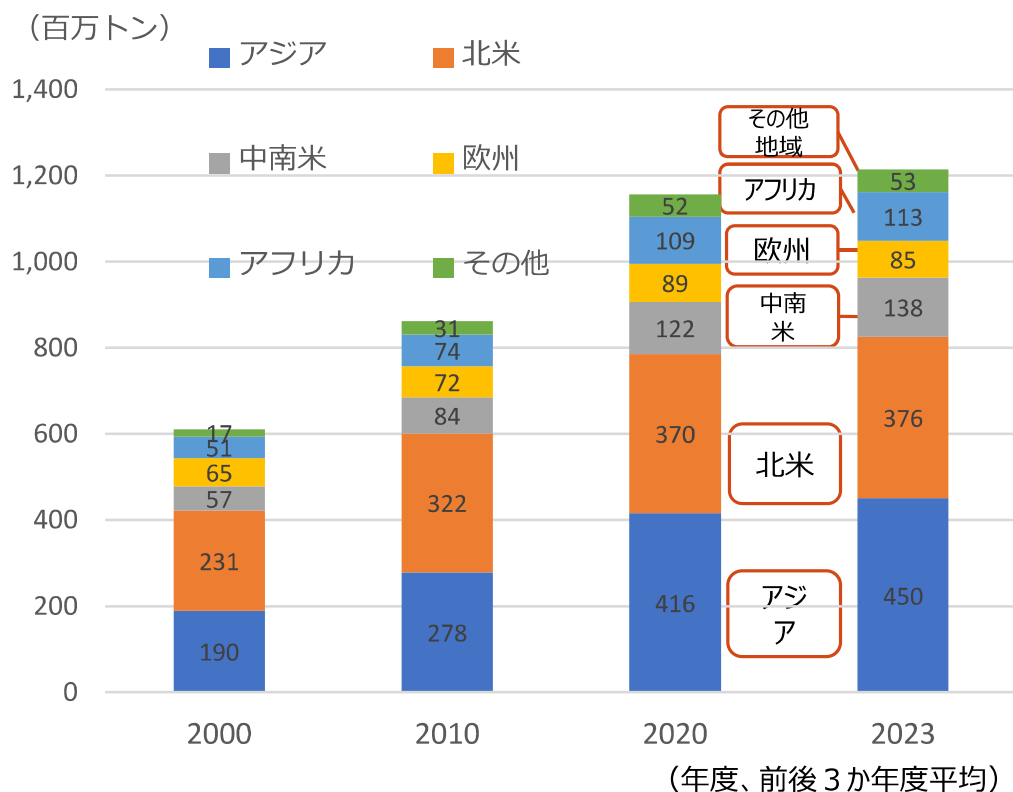


資料 : USDA PS&D Online dataより作成

## 2 とうもろこしの需要動向

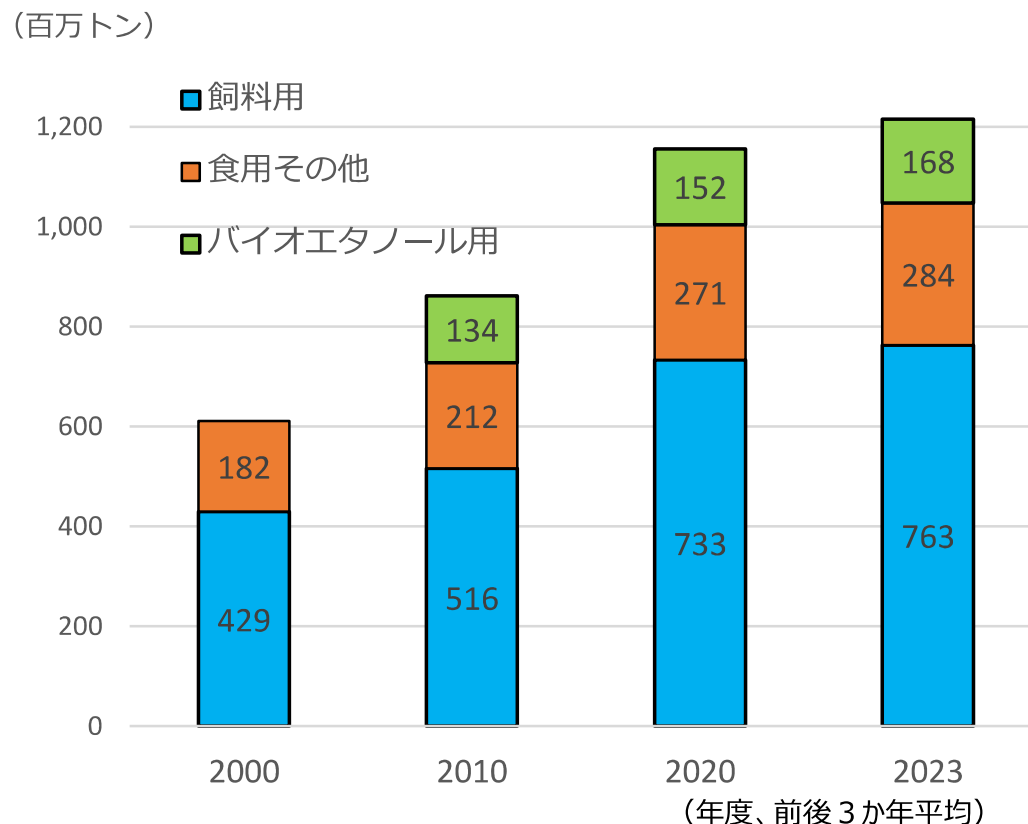
- 2023年度(前後3か年度平均)の世界のとうもろこし需要量は、2000年度(同平均)に比べて99%増加。地域別では、アジアの需要量が137%増加し、2023年度に37%のシェアを占める。
- 現在の用途別内訳では、2000年度に比べて飼料用が78%増加し、食用等は56%増加。2000年代後半からバイオエタノール用が新規需要として消費量を「底上げ」している。
- 2010年度(同平均)から2022年度までの用途別の増加率は、飼料用・食用等がそれぞれ48%・34%に対して、新規需要のバイオエタノール用の伸びは25%に留まる。

① 世界のとうもろこし需要動向の地域別内訳



資料：USDA PS&D Online dataより作成

② とうもろこし需要の用途別内訳の動向

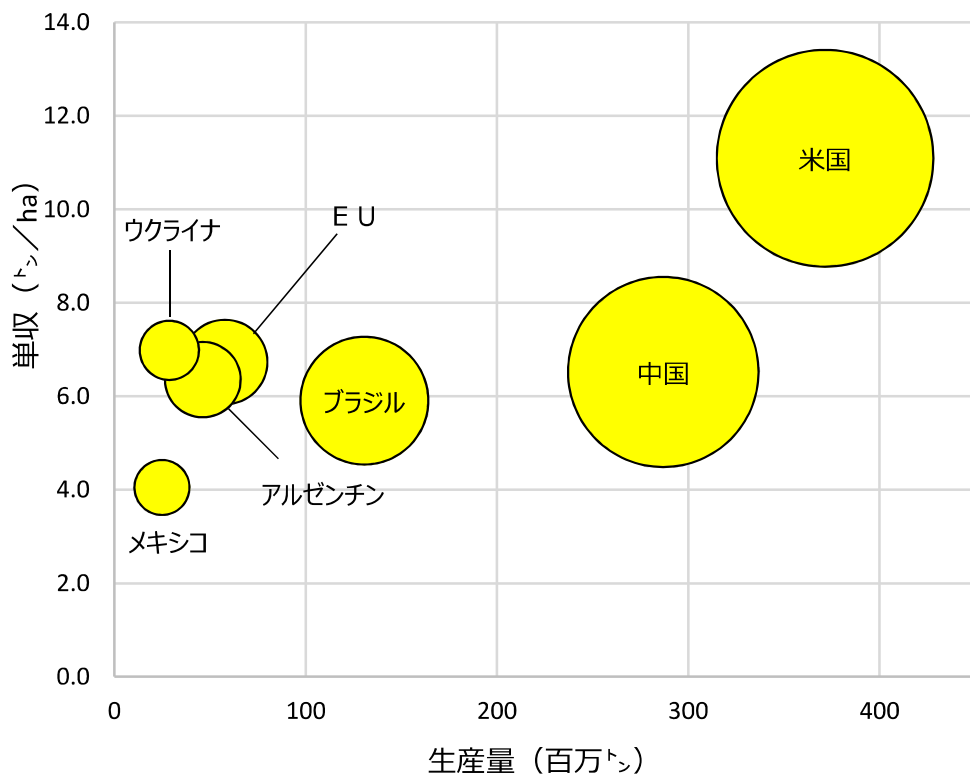


資料：USDA PS&D Online dataより作成, バイオエタノール用とうもろこし需要量は農林水産政策研究所調べ

### 3 とうもろこしの生産量変化

- 世界のとうもろこしの生産量(2022-24年度平均)は、米国が世界生産量の31%のシェアを占めてトップを維持し、中国、ブラジルを加えた上位3か国で65%のシェア。
- 米国は、主に単収の伸びが生産拡大に寄与。ブラジル、アルゼンチン、ウクライナは、収穫面積の拡大も生産に大きく寄与。単収は各国で差異があり、ブラジルの単収は5.9トン/haで、米国の11.1トン/haの約半分。ブラジル・アルゼンチンは2000年度に比べ生産量が約3倍に増加、ウクライナは、8倍程度に拡大。

① 世界のとうもろこし生産量・単収と主要国の生産量シェア（2022-24年度平均）



② 主要とうもろこし生産国における生産量の増減要因  
(2020年度=100)

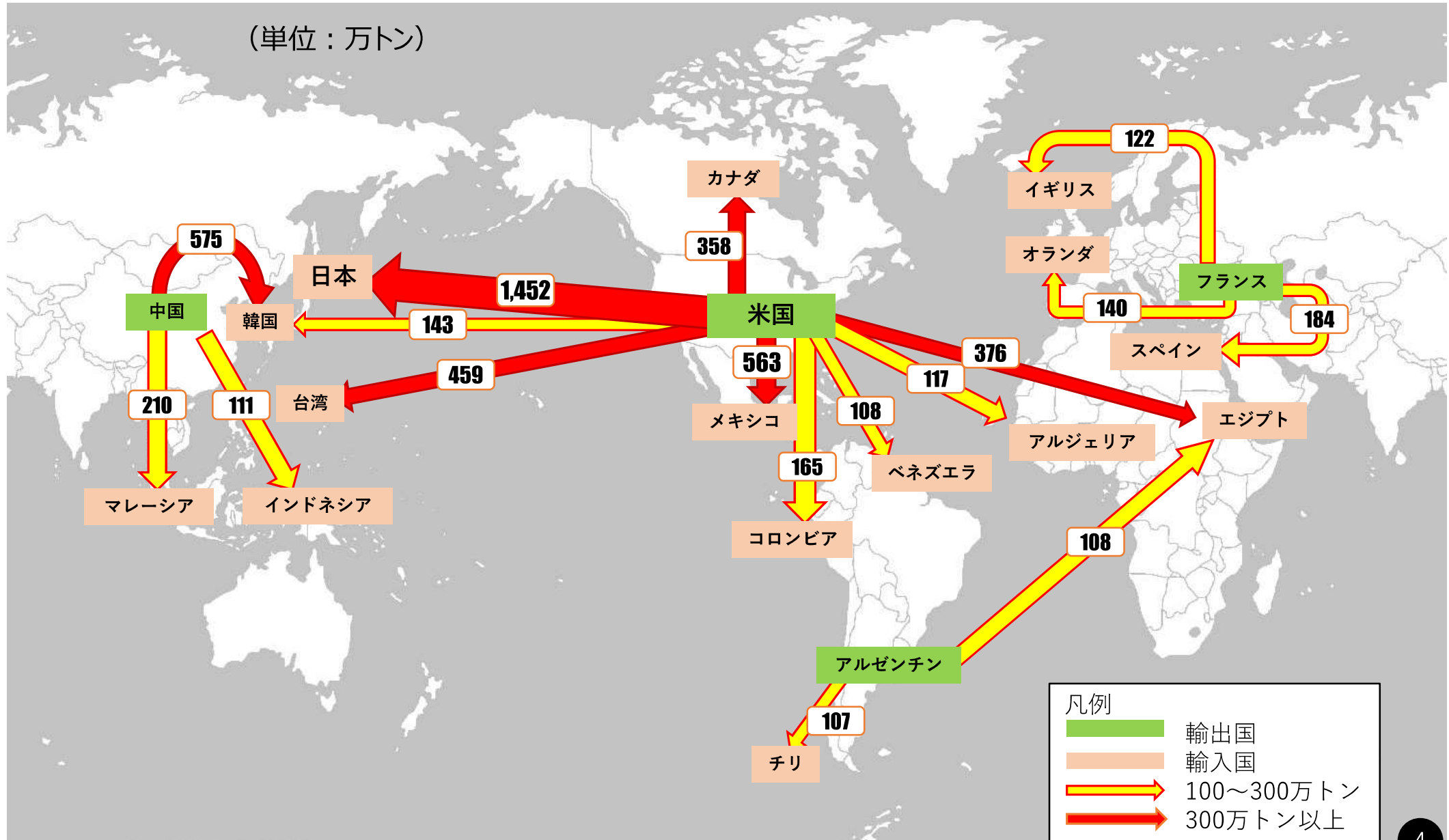
		1990年度	2000年度	2010年度	2020年度	2024年度
米国	生産量	56.32	70.39	88.21	100.00	105.71
	収穫面積	81.48	88.16	99.12	100.00	101.07
	単収	69.14	79.83	89.03	100.00	104.65
中国	生産量	37.14	40.66	73.18	100.00	113.14
	収穫面積	51.87	55.87	84.76	100.00	108.43
	単収	71.52	72.78	86.23	100.00	104.27
ブラジル	生産量	27.97	47.74	65.98	100.00	156.32
	収穫面積	67.79	65.19	69.35	100.00	112.06
	単収	41.19	73.23	95.19	100.00	139.59
アルゼンチン	生産量	13.97	27.93	45.82	100.00	90.91
	収穫面積	27.38	40.58	54.03	100.00	99.42
	単収	51.07	68.73	84.74	100.00	91.42
ウクライナ	生産量	15.64	12.70	39.34	100.00	88.46
	収穫面積	22.87	23.71	49.08	100.00	76.00
	単収	68.33	53.56	80.07	100.00	116.37
世界計	生産量	42.47	52.14	74.85	100.00	108.50
	収穫面積	64.22	68.23	82.84	100.00	101.38
	単収	66.19	76.46	90.44	100.00	107.08

## 4 とうもろこしの需給動向と貿易フローの変化：2022年とうもろこし貿易フロー図

2022年（前後3か年平均）の輸出量シェアは、米国が60%と圧倒的に高く、次いで中国が13%、アルゼンチンが12%と続く。また、輸入量におけるシェアは、日本が22%を占め、次いで韓国、メキシコ、エジプト等が続く。（USDA PS&D Online data）

注：Global Trade Atlasのデータ（2020.01）で、とうもろこし(HS1005)の輸出上位5か国から、100万トン以上輸出している貿易フローを作図

（単位：万トン）

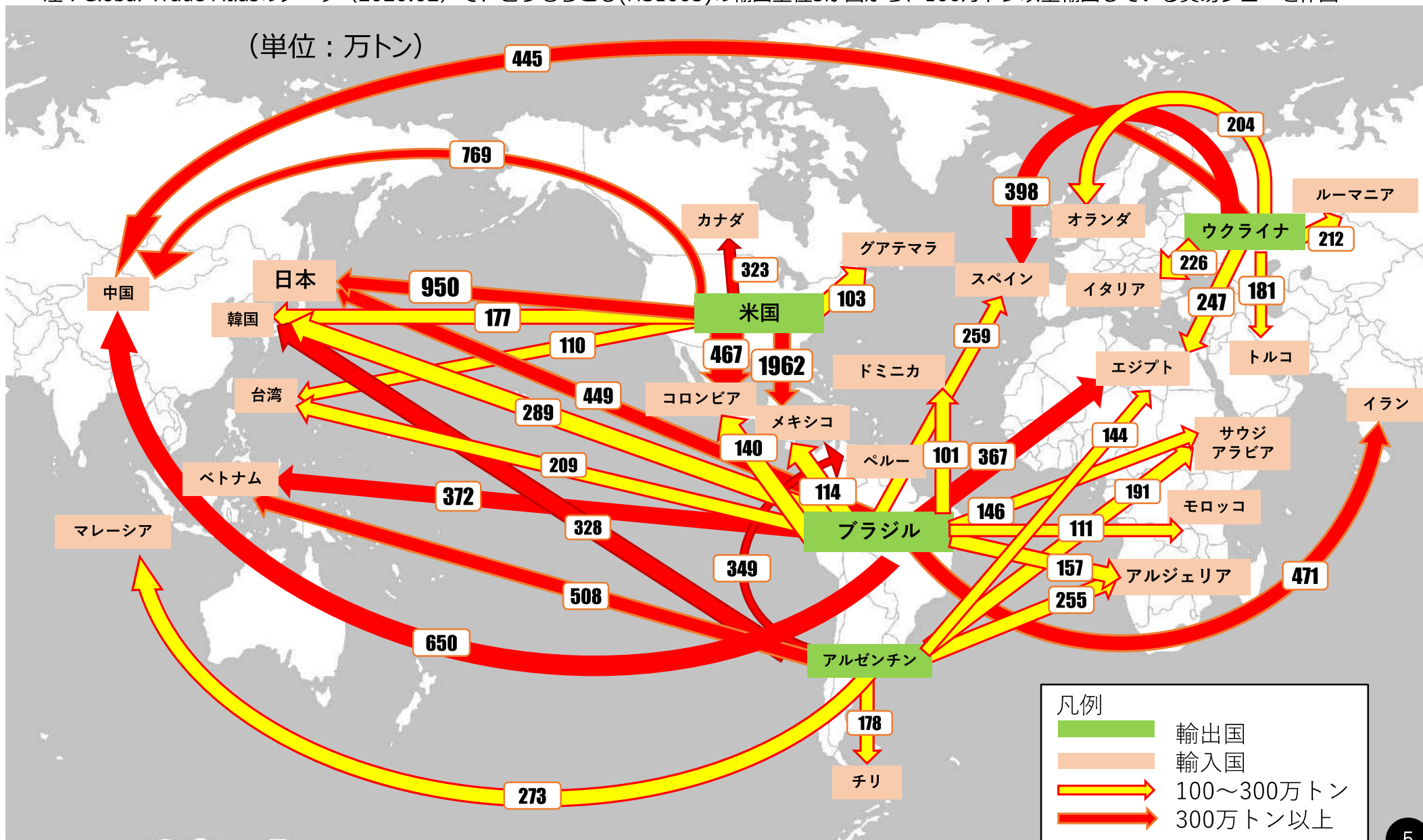


注：レイアウトの関係から実際の国の地理上位置とは異なる場合がある。

# 5 とうもろこしの需給動向と貿易フローの変化：2023年とうもろこし貿易フロー図

2023年（前後3か年平均）の輸出シェアは、米国が31%と低下する一方、ブラジルとアルゼンチンの輸出シェアは、24%、16%と大幅に高まっている。(USDA PS&D Online data)

注：Global Trade Atlasのデータ（2026.02）で、とうもろこし(HS1005)の輸出上位5か国から、100万トン以上輸出している貿易フローを作図

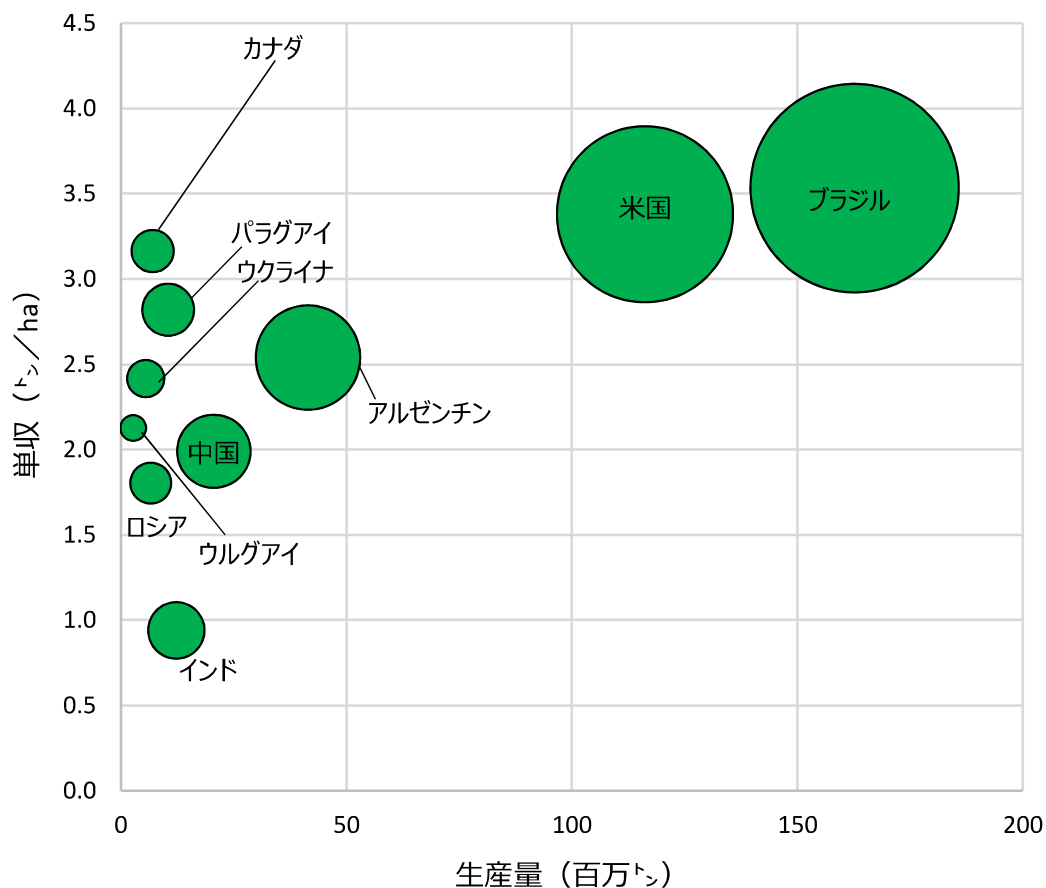


注：レイアウトの関係から実際の国の地理上位置とは異なる場合がある。

## 6 大豆の生産量変化

- 世界の大豆生産量(2022-24年度平均)は、ブラジル、米国がそれぞれ世界の生産量の41%、29%のシェアを占め、アルゼンチンを含めた上位3か国のシェアが80%を占めて偏在化。
- ブラジル、アルゼンチンは2000年以降、単収だけでなく、収穫面積の増加が大きく生産量の増加に寄与し、それぞれ2000年度に比べて3倍、1.7倍程度まで拡大。米国は、単収の増加が主に寄与。

① 世界の大豆生産量・単収と主要国の生産量シェア  
(2022-24年度平均)



資料：USDA PS&D Online dataより作成

② 主要大豆生産国における生産量の増減要因  
(2020年度=100)

		1990年度	2000年度	2010年度	2020年度	2024年度
ブラジル	生産量	11.3	28.3	54.0	100.0	122.9
	収穫面積	24.5	35.0	60.8	100.0	119.1
	単収	46.2	80.9	88.6	100.0	103.1
米国	生産量	45.7	65.4	79.0	100.0	103.7
	収穫面積	68.4	87.7	92.7	100.0	104.4
	単収	66.8	74.6	85.1	100.0	99.4
アルゼンチン	生産量	24.9	60.2	106.1	100.0	110.6
	収穫面積	28.8	63.1	111.1	100.0	106.0
	単収	86.1	95.0	95.4	100.0	104.3
中国	生産量	56.1	78.6	78.6	100.0	105.3
	収穫面積	76.5	94.2	88.0	100.0	104.6
	単収	73.7	83.8	89.4	100.0	101.0
インド	生産量	24.9	50.2	96.9	100.0	120.3
	収穫面積	19.8	44.9	74.3	100.0	100.6
	単収	125.9	112.3	130.9	100.0	119.8
世界合計	生産量	28.2	47.6	71.7	100.0	115.6
	収穫面積	41.8	58.0	79.7	100.0	112.5
	単収	67.6	82.0	89.8	100.0	102.8

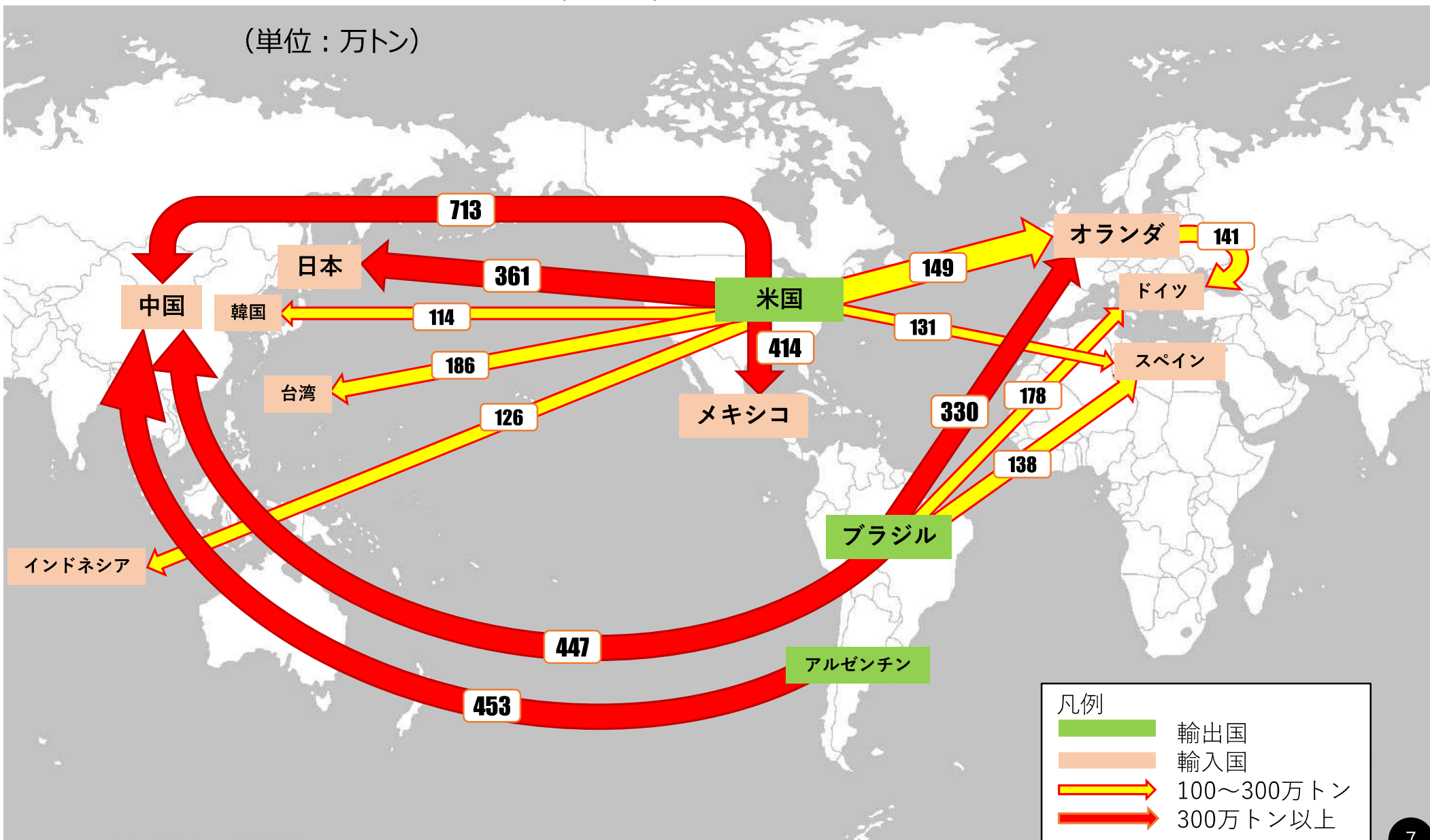
資料：USDA PS&D Online dataより作成

# 7 大豆の需給動向と貿易フローの変化：2002年大豆貿易フロー図

2002年（前後3か年平均）の輸出量シェアは、米国が48%と高く、次いでブラジルが32%を占めた。輸入量シェアは、中国が28%、日本とメキシコがそれぞれ約8%を占めた。(USDA PS&D Online data)

注：Global Trade Atlasのデータ（2020.01）で、大豆(HS1201)の輸出上位5か国から、100万トン以上輸出している貿易フローを作図

(単位：万トン)



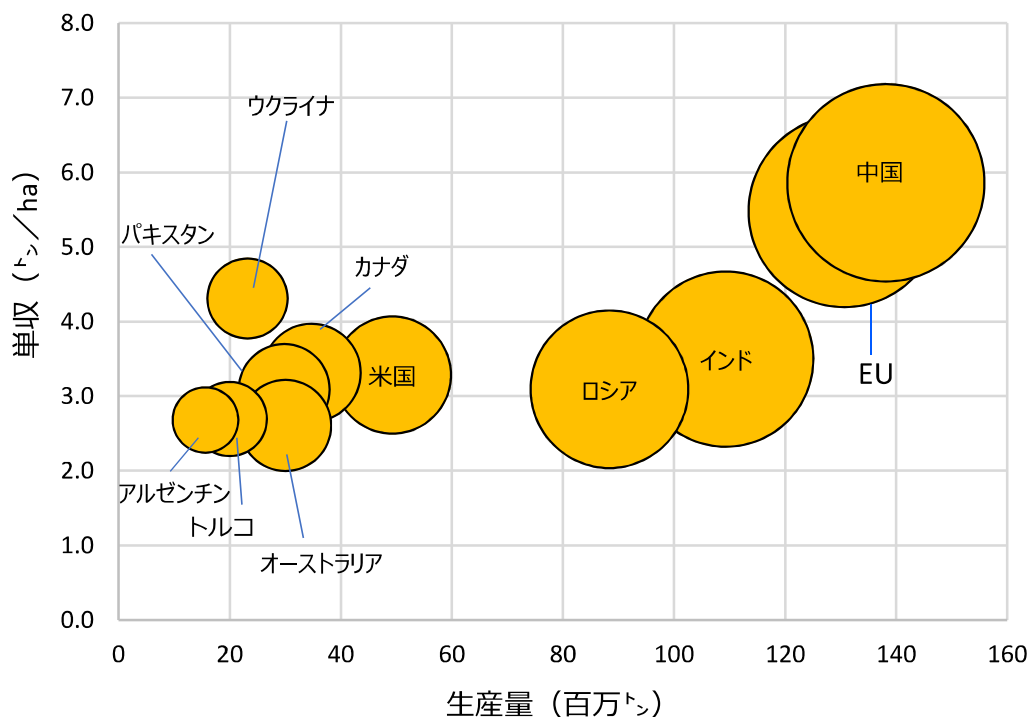
注：レイアウトの関係から実際の国の地理上位置とは異なる場合がある。



## 9 小麦需給と貿易動向

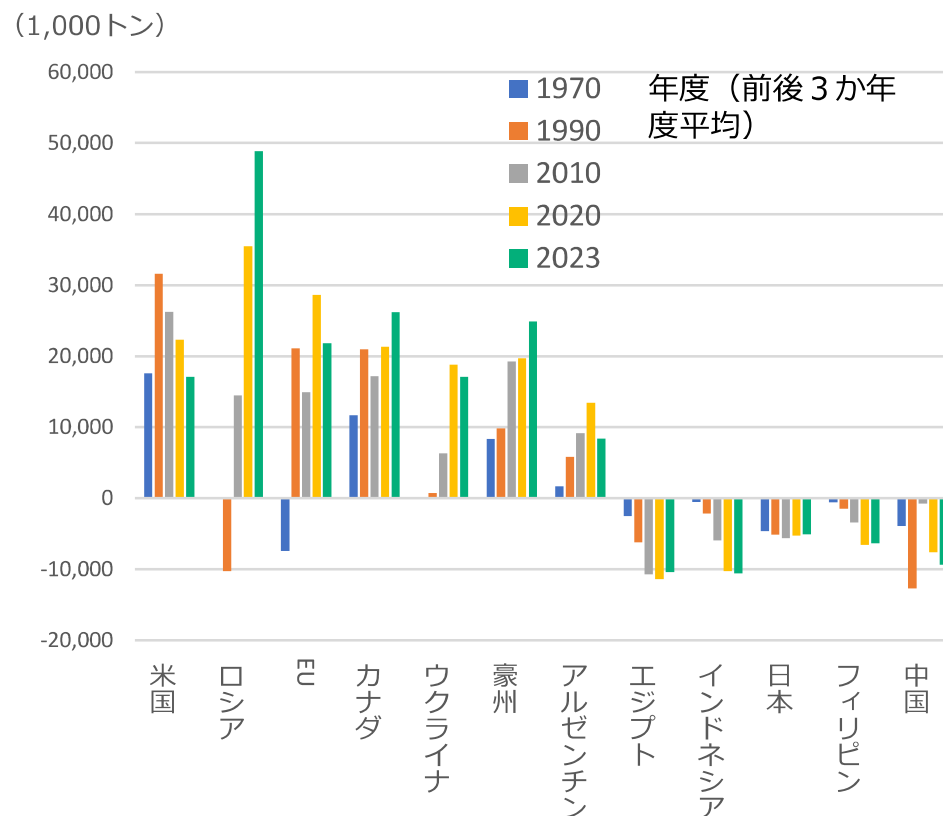
- 世界の小麦生産量(2022-24年度平均)は、中国、EUがそれぞれ17%を占め、次いで、インド、ロシア、米国と続き、上位5か国・地域で65%のシェア。米国のシェアは低下傾向。
- 小麦は、主に単収の伸びにより生産量が増加する一方、先進国の収穫面積は、若干の減少傾向。
- 2000年代以降、伝統的な主要輸出国である米国、カナダ等に加えて、新興のロシア、ウクライナが輸出市場で台頭。ロシアの輸出量は2014年以降、米国の輸出量を超えている。
- 北アフリカ・中東地域ではエジプト等、東南アジアではインドネシア、フィリピン等が輸入拡大。ロシア、ウクライナ等の新興輸出国が、中東・北アフリカ等へ輸出を増やした。

① 世界の小麦生産量・単収と主要国の生産量シェア（2022-24年度平均）



資料：USDA PS&D Online Dataより作成

② 国別小麦純輸出量の推移



資料：USDA PS&D Online Dataより作成



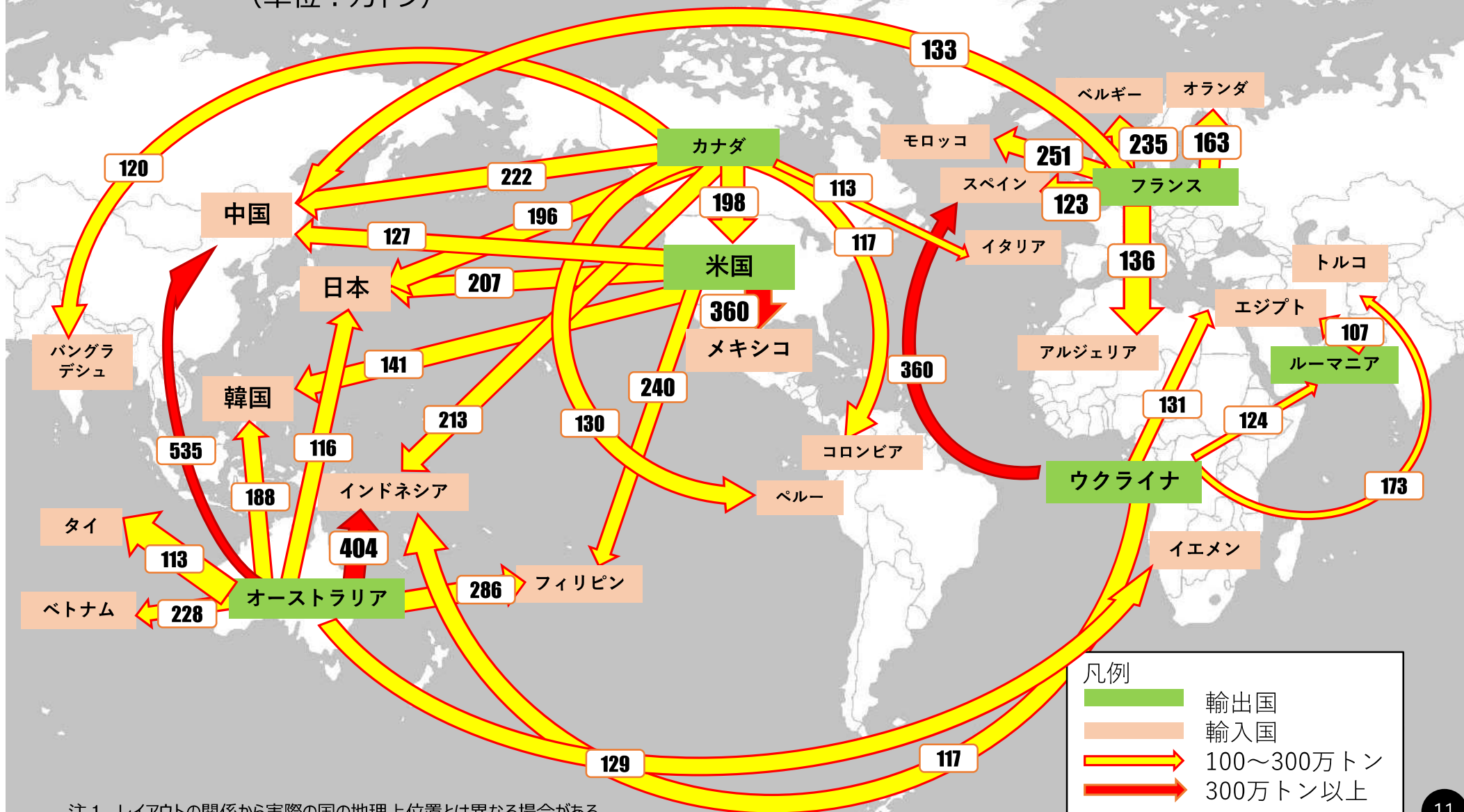
# 1.1 小麦の需給動向と貿易フローの変化：2023年小麦貿易フロー図

2023年（前後3か年平均）の輸出量シェアは、米国が10%に低下する一方、ロシアが23%と増加し、東南アジア、中東・アフリカへの輸出が増加。ウクライナの輸出量シェアは8%に増加。

(USDA PS&D Online data)

注：Global Trade Atlasのデータ（2026.02）で、小麦(HS1001)の輸出上位6か国から、100万トン以上輸出している貿易フローを作図

(単位：万トン)



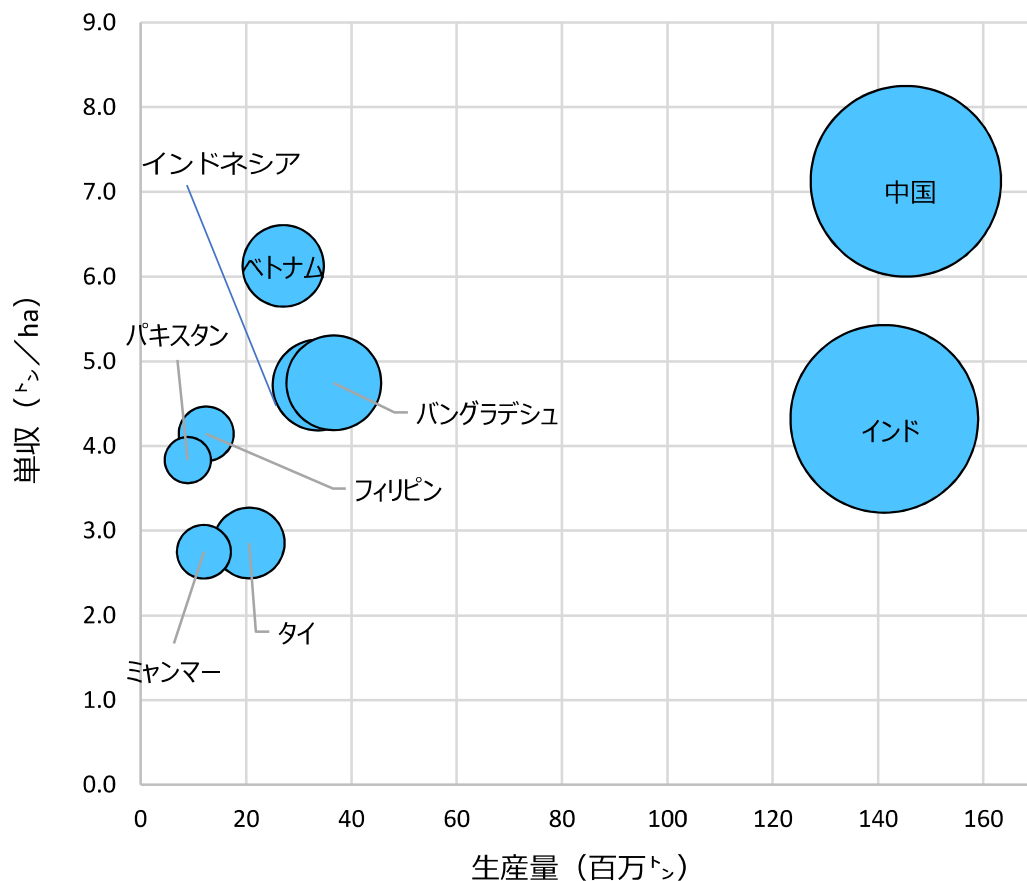
注1. レイアウトの関係から実際の国の地理上位置とは異なる場合がある。

注2. ロシアについては2022年以降の貿易データを取得できなかった。

## 12 米需給と貿易動向

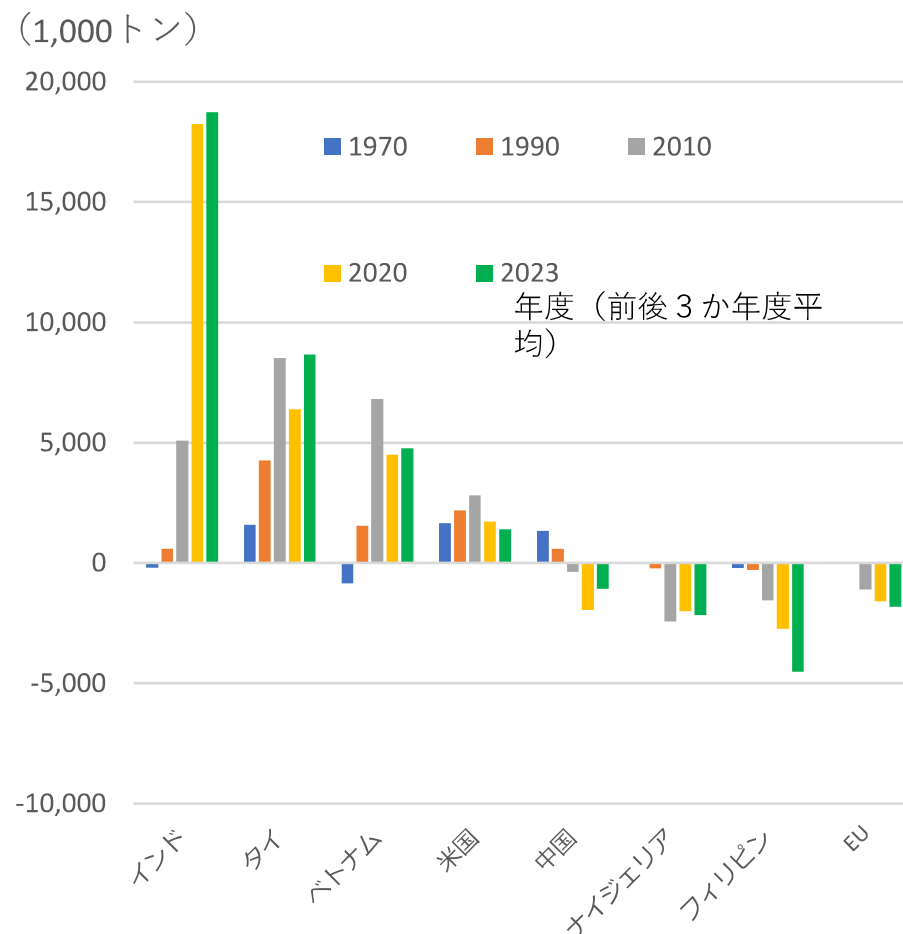
- 世界の米生産量(2022-24年度平均)は、アジアが生産量の9割を占める。中国、インドの上位2か国で54%のシェアを占め、バングラディシュ、インドネシア、ベトナム、タイと続く。
- 輸出量は、インドが33%のシェアを占め、タイ、ベトナムが続く。
- 単収は、主要輸出国のインド、タイ、ベトナムや主要生産国の中国の間でも差が大きい。
- ナイジェリア等のアフリカ諸国の輸入量が増加。サブサハラ・アフリカの輸入量は世界の輸入量の約1/3。

① 世界の米生産量・単収と主要国の生産量シェア（2022-24年度平均）



資料：USDA PS&D Online Dataより作成

② 国別米純輸出量の推移

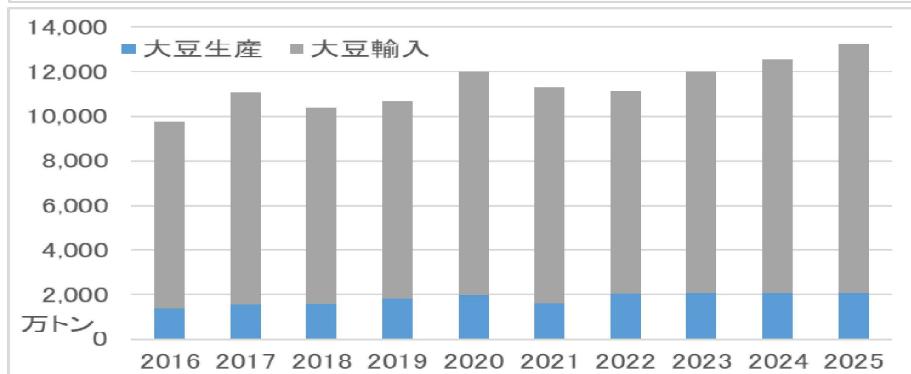
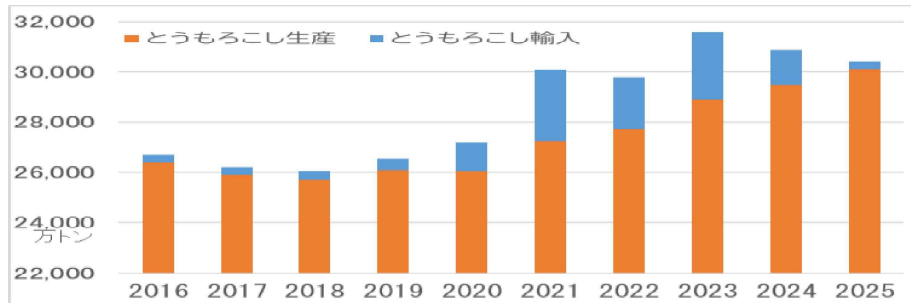


資料：USDA PS&D Online Dataより作成

# 1 3 中国：食糧安全保障を重視 単収増・面積維持で25年も食糧生産7億トンの達成

- 2025年の食糧(穀類、豆類、いも類)の総生産量は二年連続で7億トン超を達成、11年連続の豊収、とうもろこしは単収増で史上最高の3億トン超え、小麦は1億4,007万トン、米は2億0,904万トン。大豆は単収増で2,091万トン(1%増)。
- 2025年の輸入は、大豆は過去最高(1億1,183万トン、7割超がブラジルから、他方米国は4年で半減の1,682万トン)。とうもろこし輸入5分の1(265万トン)、小麦は3分の1(385万トン)に減。米は輸入(310万トン)輸出(170万トン)が増。
- 国家安全に向けて食糧確保重視、「農業強国」目指し食糧生産能力向上堅持図る。2024~30年の7か年の取組として「新たな食糧五千万トン生産能力向上活動」を展開、ターゲットの「食糧生産7億トン」達成後も態勢緩めず、党の指導強化を前面、栽培面積安定と単収向上を推進。重点はとうもろこし・大豆・菜種等。耕地保護と高規格化、品種革新に注力。
- 栽培補助金と最低買入価格制度で農民の収益を保障、「食糧安全責任制」を掲げ地方幹部の安定供給の責務徹底。

## ① 小麦・とうもろこし・大豆の生産と輸入



資料：中国国家统计局、中国海関総署統計資料

## ② とうもろこし・大豆・米生産者補助制度 (黒竜江省の例)

	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年	2025年
とうもろこし	30元	38元	68元	28元	14元	20元	16.73元
大豆	255元	238元	248元	248元	366元	352元	350.73元
米	133元	136元	133元	140元	172.67元	159.03元	156.53元

- 注：① 1ムー(1/15ヘクタール)当たりの単価。  
 ② とうもろこし・大豆は黒龍江・吉林・遼寧の3省と・内モンゴル自治区が補助対象。米は黒龍江、湖南、江西、江蘇、湖北、安徽、四川等11省・自治区が補助対象。  
 ③ 米は地表水の場合の単価。地下水の場合、各年50元低く設定。

## ③ 近年の米、小麦の最低買入価格の推移 (単位：元/50kg)

年	早生	中・晩生	ジャポニカ	白小麦,混合麦, 紅小麦
	インデカ	インデカ		
2016年	133	138	155	118
2017年	130	136	150	118
2018年	120	126	130	115
2019年	120	126	130	112
2020年	121	127	130	112
2021年	122	128	130	113
2022年	124	129	131	115
2023年	126	129	131	117
2024年	127	129	131	118
2025年	128	129	131	119
2026年				119

注：対象は米が黒龍江、湖南、江西等11省・自治区。小麦が河南、山東、安徽等6省

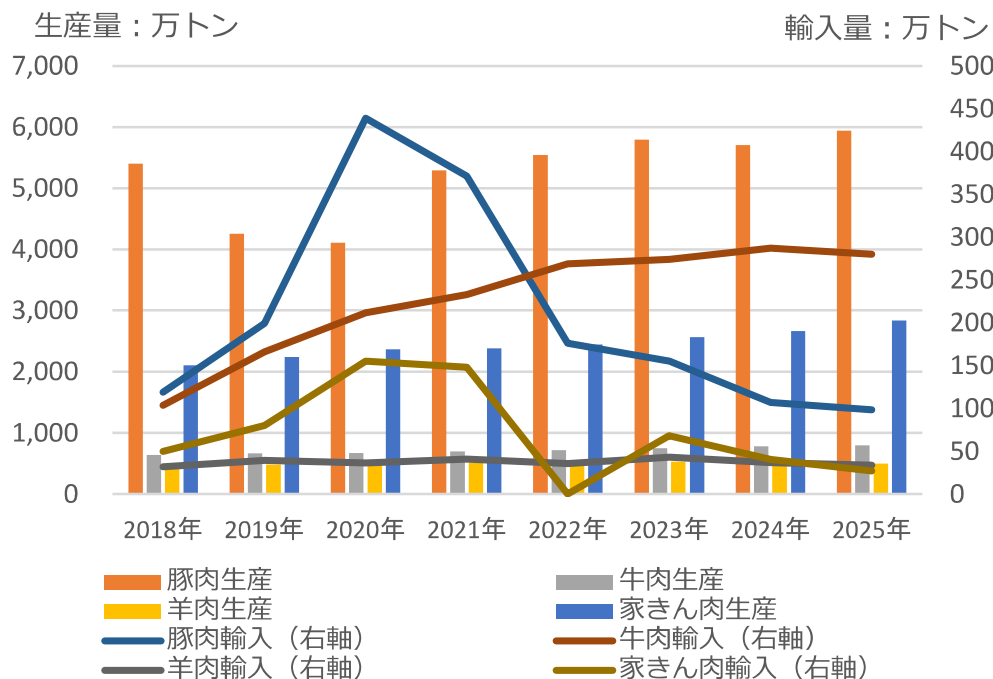
【参考】とうもろこしの輸入はブラジルが161万トン、小麦の輸入はカナダが271万トン。米の輸入はミャンマーが104万トン、輸出はトルコが20万トン等。

- ・ 食糧安全保障法を2024年施行、基本戦略は「自国で主導権確保、主食(米・小麦)の完全自給と「適度な輸入」。が、国際情勢緊張の中、国内生産傾斜へ再転換。
- ・ 植物油の自給率向上も目指し、大豆のほか各種油糧種子や「油茶」等にも注力。
- ・ 国民の節約と生産・流通・加工各段階の減損抑止に注力、備蓄と食糧管理も重視。
- ・ 収益保障に向けては、農業保険の強化も重視。また、新たに、食糧栽培農民の収入増と生産地の地方政府の財源補てんに向け、消費地の省から「省間利益補償」を準備中。

# 14 中国における食肉生産・輸入（豚肉・牛肉の価格動向等）

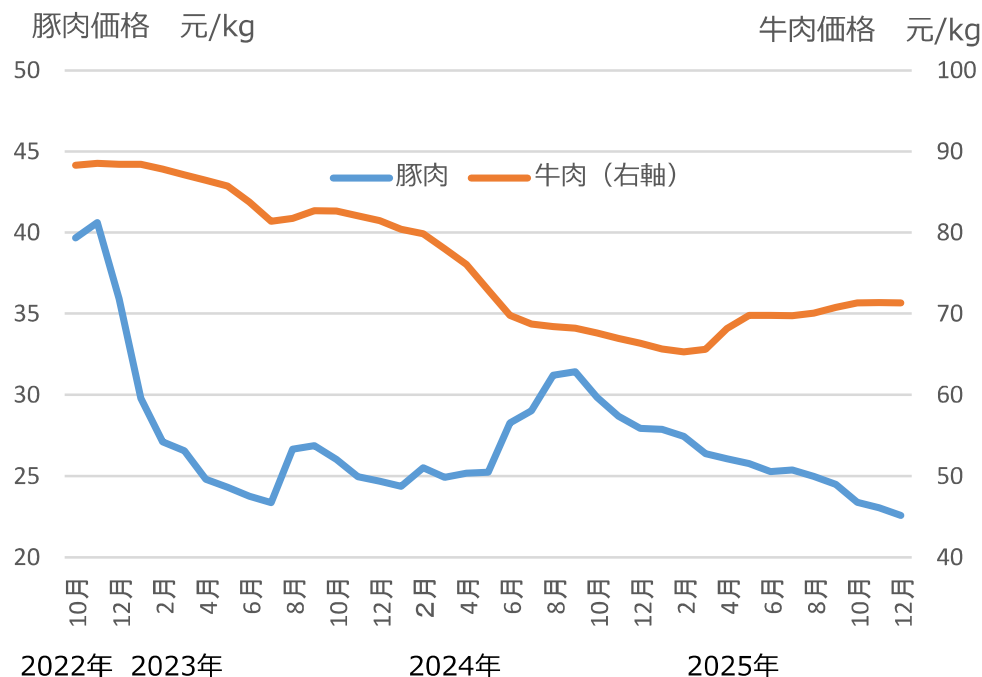
- 2025年豚肉生産:5,938万トン(前年比4.1%増)、輸入:98万トン(前年比9%減、5年連続減、ｽﾊﾟｲﾝ等)
  - ・ 2018年－20年のアフリカ豚熱（ASF）拡大で縮小した豚肉生産の回復に向け、2021年から生産能力調整管理方策を導入。全国の母豚と肉豚のあるべき飼養頭数を確定・各地域に配分しモニタリングと地方政府の供給安定責任を徹底。政策として、金融対策や、立地規制の緩和、大規模養豚企業を中核とする供給体制等を推進。
  - ・ 豚肉生産は2020年の4,133万トンから21年に5,296万トンに急回復。22年以降、豚肉価格の下落・低迷続き、24年3月に管理頭数目標を下方修正、価格水準は一時やや回復も25年後半から再び下落続く。
- 2025年の牛肉生産は801万トン（前年比3%増）、輸入は280万トン(3%減、ブラジル146万トン、アルゼンチン47万トン、豪州31万トン等)。羊肉生産は496万トン(4%減)、輸入は34万トン(8%減、豪州等)。家きん肉生産は2,837万トン（7%増）、輸入は27万トン(34%減、ブラジル等)・輸出が61万トン（96%増、ロシア等）。
  - ・ 牛肉価格は、2023年初めから下落続き、酪農とともに経営難が国内で問題に。2025年には回復基調だが、同年末に中国商務部は2028年末まで三年間のセーフガード発動を決定、ブラジル、豪州等からの輸入減少へ誘導へ。
- 2025年末の自給率目標は、豚肉：95%（2025年の実績値は98%）、牛・羊肉：85%（同 牛74%・羊94%）、家きん肉：100%（同102%）。家畜家きんの遺伝的改良、育種・繁殖体制の強化を推進。

① 食肉の生産量と輸入量



資料：生産量は国家統計局、輸入量は海関総署。

② 豚肉と牛肉の価格推移 (元/500g)

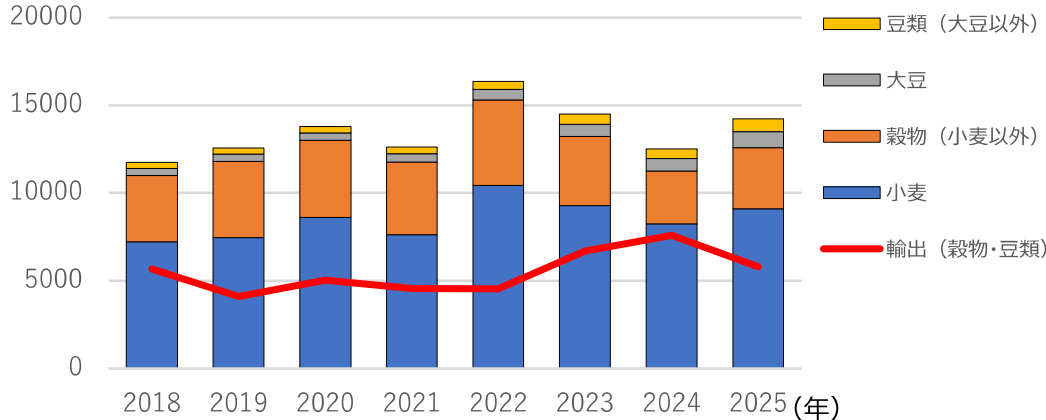


資料：農業農村部農産品需給形勢分析月報

# 15 ロシアとウクライナ：生産は回復傾向

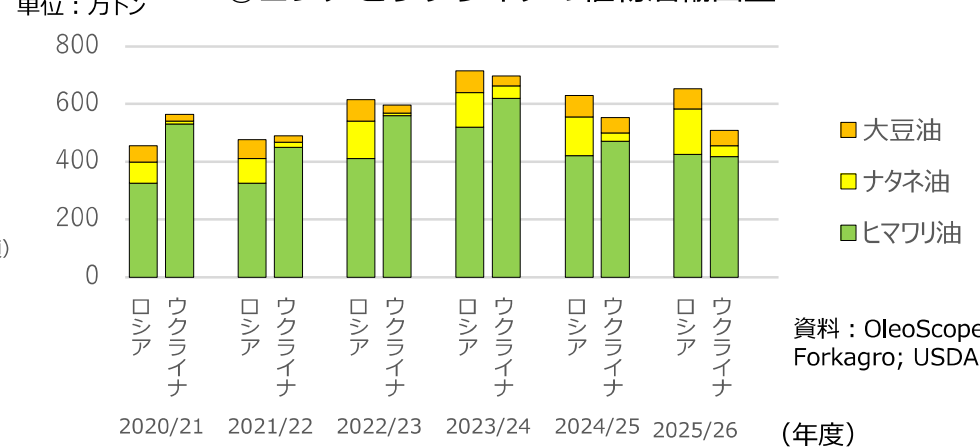
- ウクライナ東部と南部、およびロシアの南部では2年続きの干ばつにより、穀物や油糧作物のヒマワリ等に大きな被害が生じた。ロシアでは中央部やシベリア・極東地域で生産が拡大、ウクライナでも秋以降は天候が回復し、全体として生産量は昨年を上回る結果となった。
- 世界的に穀物の供給が増え、価格が低迷していることに加え、2021年に導入された穀物輸出関税の影響で、ロシアでは穀物生産者の財政状況が悪化している。さらに西側諸国からの経済制裁や、ルーブル高による不利な為替相場が響いて、ロシアの穀物等輸出は落ち込んだ。
- ウクライナではEUとの間で新たな自由貿易協定が結ばれ、EUへの輸出割当量が設定し直される一方で、EU加盟へ向けて環境規制や食品安全規準、アニマルウェルフェア等の法改正が進められている。その一方で、大豆と菜種の輸出関税導入などの政策により、農業生産者の間で混乱が続いた。

①ロシア穀物・豆類の生産量と輸出量



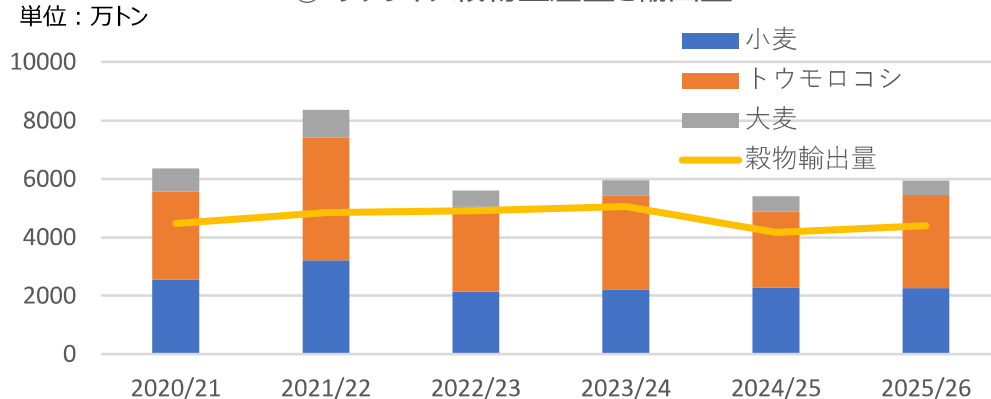
資料：ロシア連邦国家統計庁; Rossel'khoznadzor

②ロシアとウクライナの植物油輸出量



資料：OleoScope; Forkagro; USDA

③ウクライナ穀物生産量と輸出量



資料：Outlook for Ukrainian agricultural market, APK-Inform (年度)

④ロシアの穀物輸出割当量

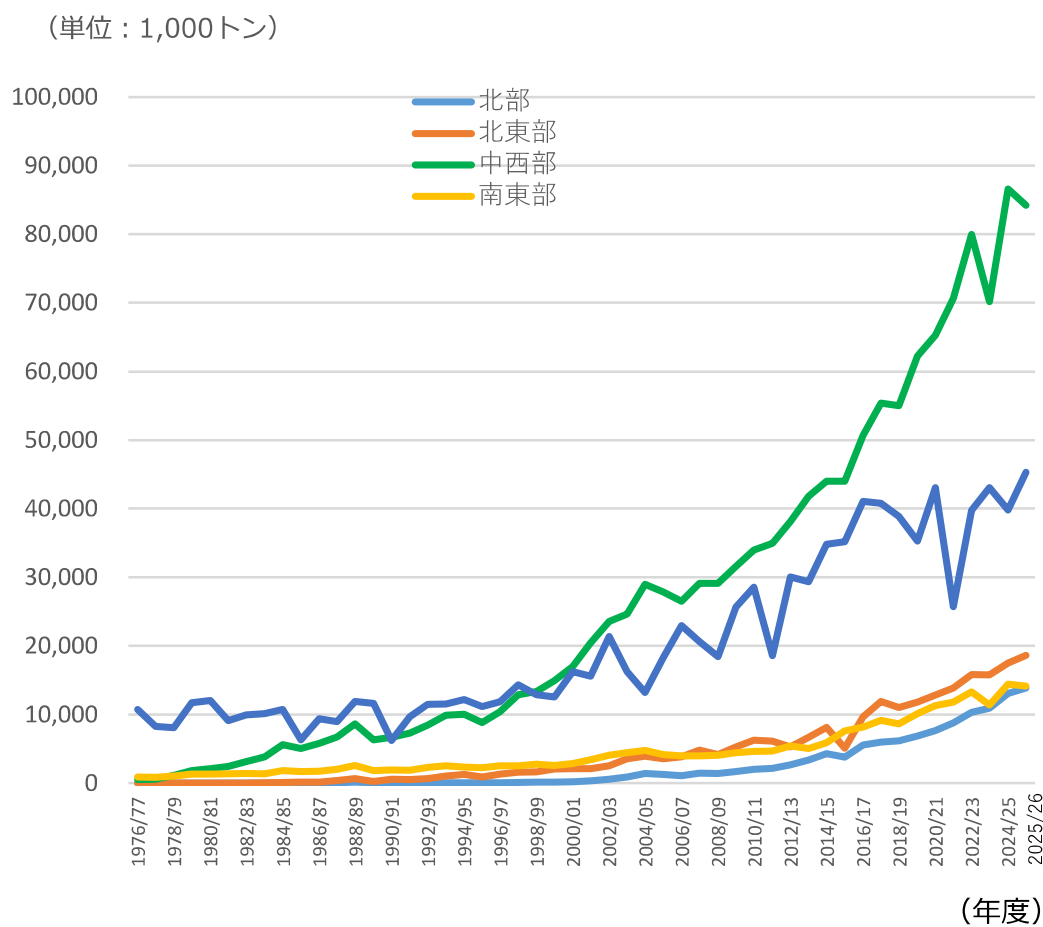
期間	割当量	詳細
2020年4月1日～6月30日	700万 t	
2021年2月15日～6月30日	1,750万 t	以後関税割当
2022年2月15日～6月30日	1,100万 t	うち小麦800万 t
2023年2月15日～6月30日	2,550万 t	穀物種類の区別なし
2024年2月15日～6月30日	2,400万 t	穀物種類の区別なし
2025年2月15日～6月30日	1,060万 t	小麦とメスリンのみ。他はゼロ
2026年2月15日～6月30日	2,000万 t	割当は小麦、メスリン、大麦、トウモロコシの合計。ライ麦はゼロ

資料：Interfaks; Praim; FGBU Tsentr Agroanalitiki

# 16 ブラジル：大豆・とうもろこしの生産動向

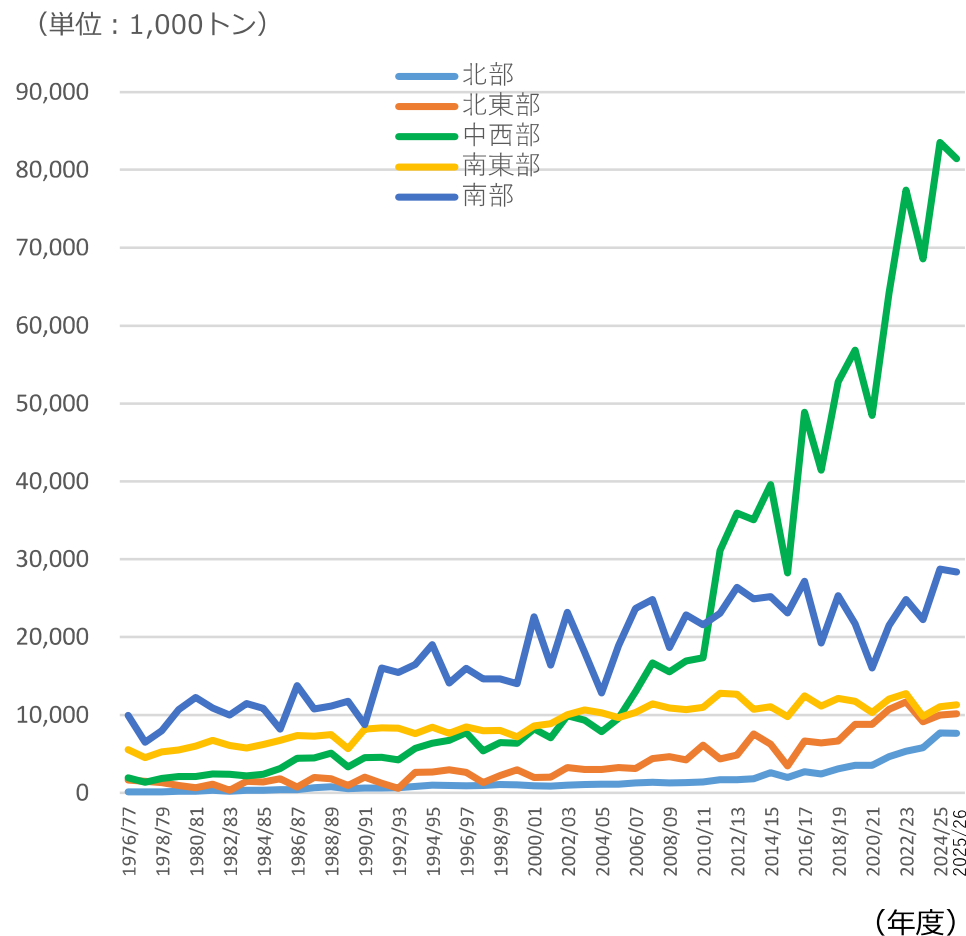
- 大豆やとうもろこし生産は、「セラード」地帯が位置する中西部を中心に生産。
- 大豆：中国の堅調な輸入需要により、2025年度の生産量は1億7,612万トンと過去最高の生産量の見込み。
- とうもろこし：国内におけるバイオエタノール需要ならびに中国をはじめとする国外の需要の増加により、2025年度の生産量は1億3,887万トンとなる見込み。

① 大豆生産量推移



資料:CONAB (2026)より作成

② とうもろこし生産量推移

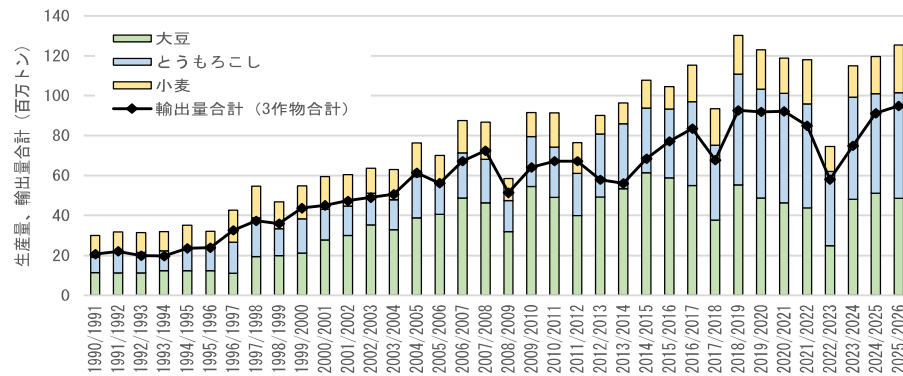


資料:CONAB (2026)より作成

# 17 アルゼンチン：ミレイ政権による「ショック療法」施策と輸出税引き下げ

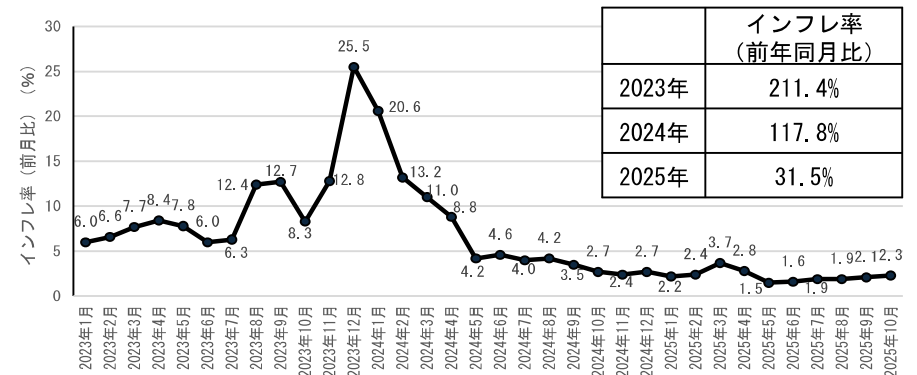
- アルゼンチンは世界有数の農畜産物の生産国。エルニーニョ/ラニーニャ等の異常気象の影響を受けるが、主要穀物等の生産量、輸出量ともに右肩上がりで推移。輸出額に占める農畜産物の割合は約6割であり重要な外貨獲得手段。
- 国内の経済・財政状況は厳しく、2023年12月のインフレ率（前月比）は25.5%と危機的な状況。同月に発足したハビエル・ミレイ政権では、省庁再編や大幅な歳出削減などの「ショック療法」施策を徹底し、2024年12月のインフレ率は2.7%まで回復。2024年は14年ぶりの財政黒字を達成。ペソを大幅に切り下げ、ブルーレート（非公式）との二重為替を解消。
- 「ショック療法」施策は、光熱水費への補助金も削減するなど国民生活に厳しい影響を与えたが、2025年10月に実施された中間選挙では与党勢力が勝利。ミレイ政権による経済・財政再建施策が継続。
- 輸出競争力を高め、外貨獲得を促進するため、主要穀物等にかかる輸出税を2025年1月に引き下げ。9月には一時的に輸出税を撤廃（輸出額70億ドルに達するまでの制限付き）。12月には更なる引き下げを実施。

## ①アルゼンチンの主要穀物等の生産量と輸出量の変動



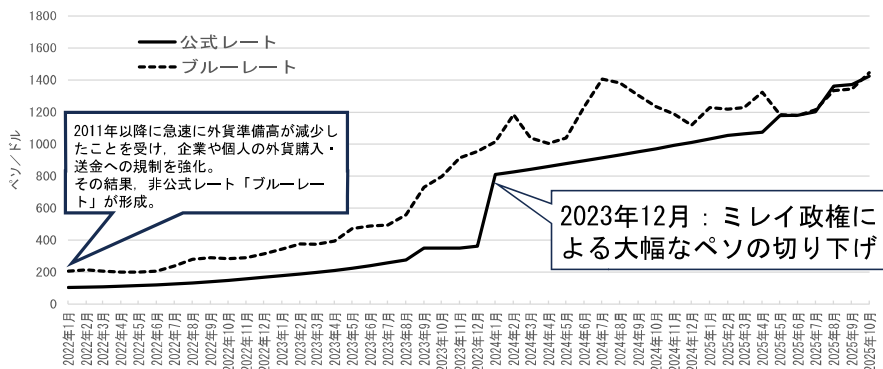
資料：USDA PSD Online より作成

## ②インフレ率（前月比）の変動



資料：アルゼンチン国家統計局（INDEC）より作成

## ③二重為替の解消



資料：アルゼンチン中央銀行より作成

## ④主要穀物・油糧種子に係る輸出税の変更一覧表

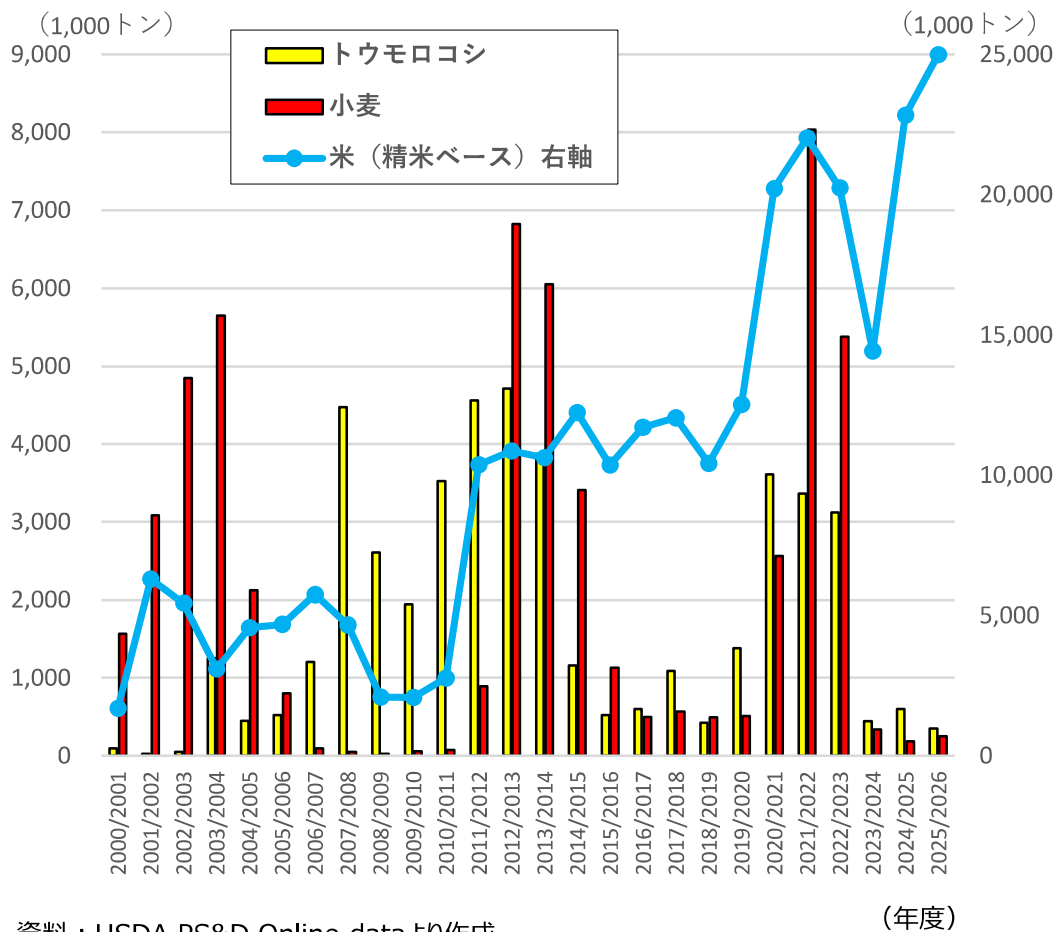
品目	見直し前 (%)	Decreto 38/2025	Decreto 439/2025	Decreto 526/2025	Decreto 877/2025
		2025. 1. 27~6. 30	2025. 7. 1~7. 31	2025. 8. 1~	2025. 12. 12~
大豆	33	26	33	26	24
大豆関連品	31	24.5	31	24.5	22.5
トウモロコシ	12	9.5	12	9.5	8.5
小麦	12	9.5	9.5	9.5	7.5
大麦	12	9.5	9.5	9.5	7.5
ソルガム	12	9.5	12	9.5	8.5
ひまわり	7	5.5	7	5.5	4.5

資料：アルゼンチン政府のDecreto（政令）より作成

# 18 インドの穀物輸出・植物油輸入動向

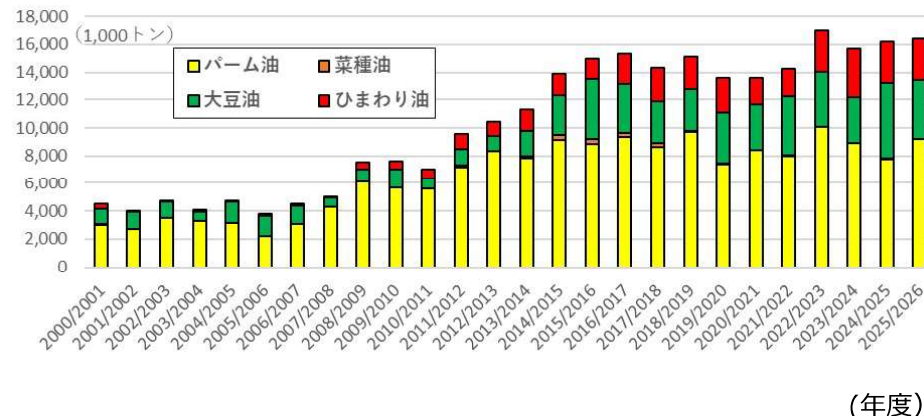
- インドの小麦や米等の主要穀物は基本的に自給し、輸出量も多い。米は2010年代後半にタイを抜いて世界一の輸出量を維持。小麦と米の輸出制限措置により2023/24年度の輸出量は大きく減少したが、米は輸出制限措置解除に伴い2025/26年度に史上最高を記録。
- 一方、インドの植物油の輸入は年々増加し、2000年代前半の500万トン程度の輸入量から、2010年代後半には3倍程度まで拡大。特に、パーム油の輸入量が多く、輸入量の半分以上を占める。大豆油、ひまわり油の伸びも大きい。インドの植物油の生産量の増加は、消費量に比べて限られ、伸びは限定的。

① インドの穀物輸出量

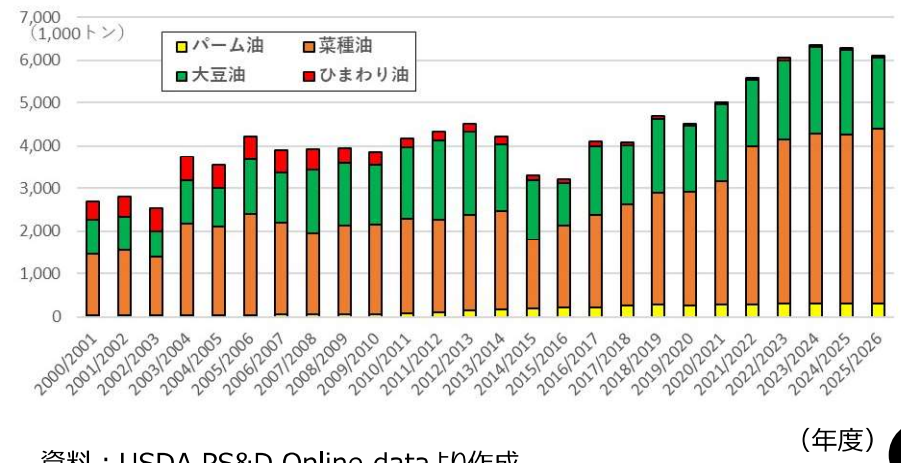


資料：USDA PS&D Online dataより作成

② インドの植物油輸入量



③ インドの植物油生産量

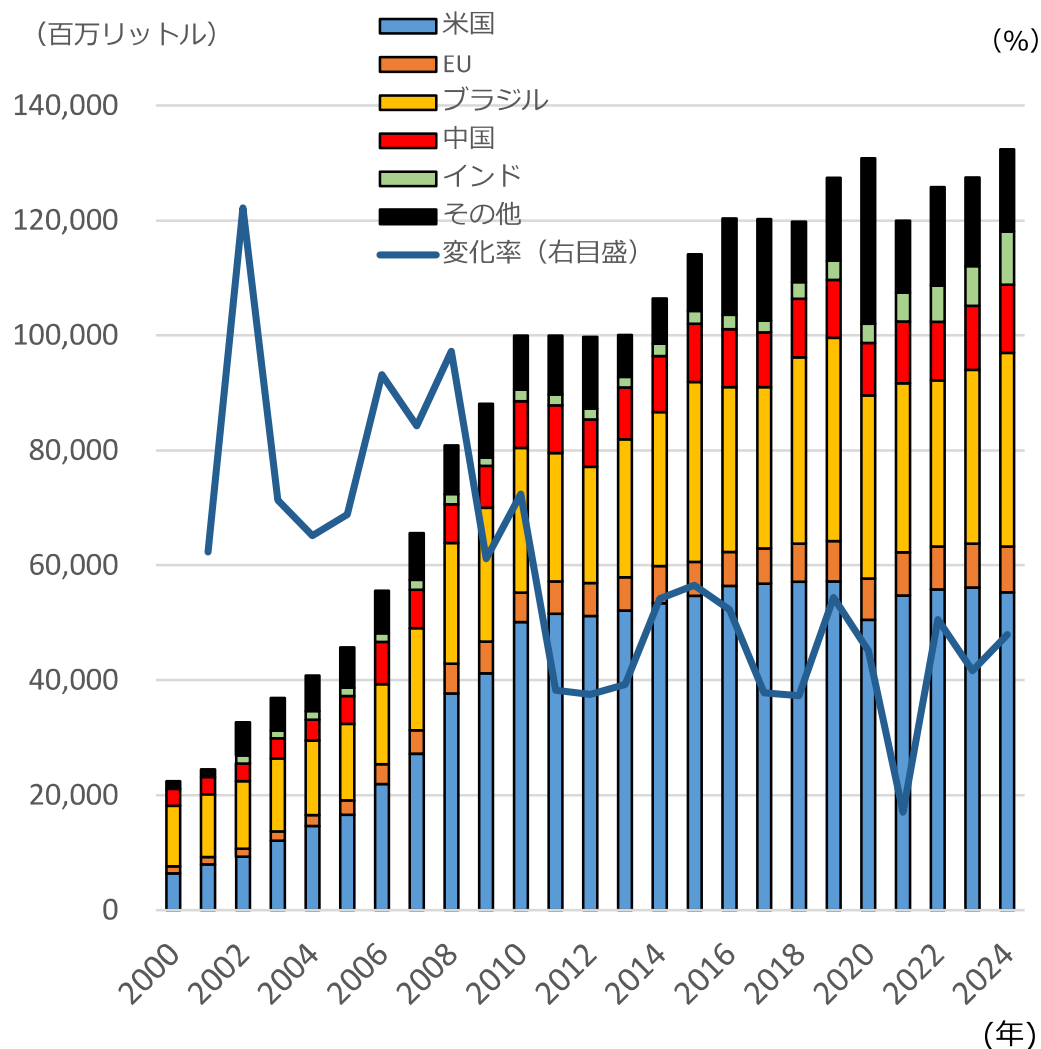


資料：USDA PS&D Online dataより作成

# 19 バイオ燃料の需要動向

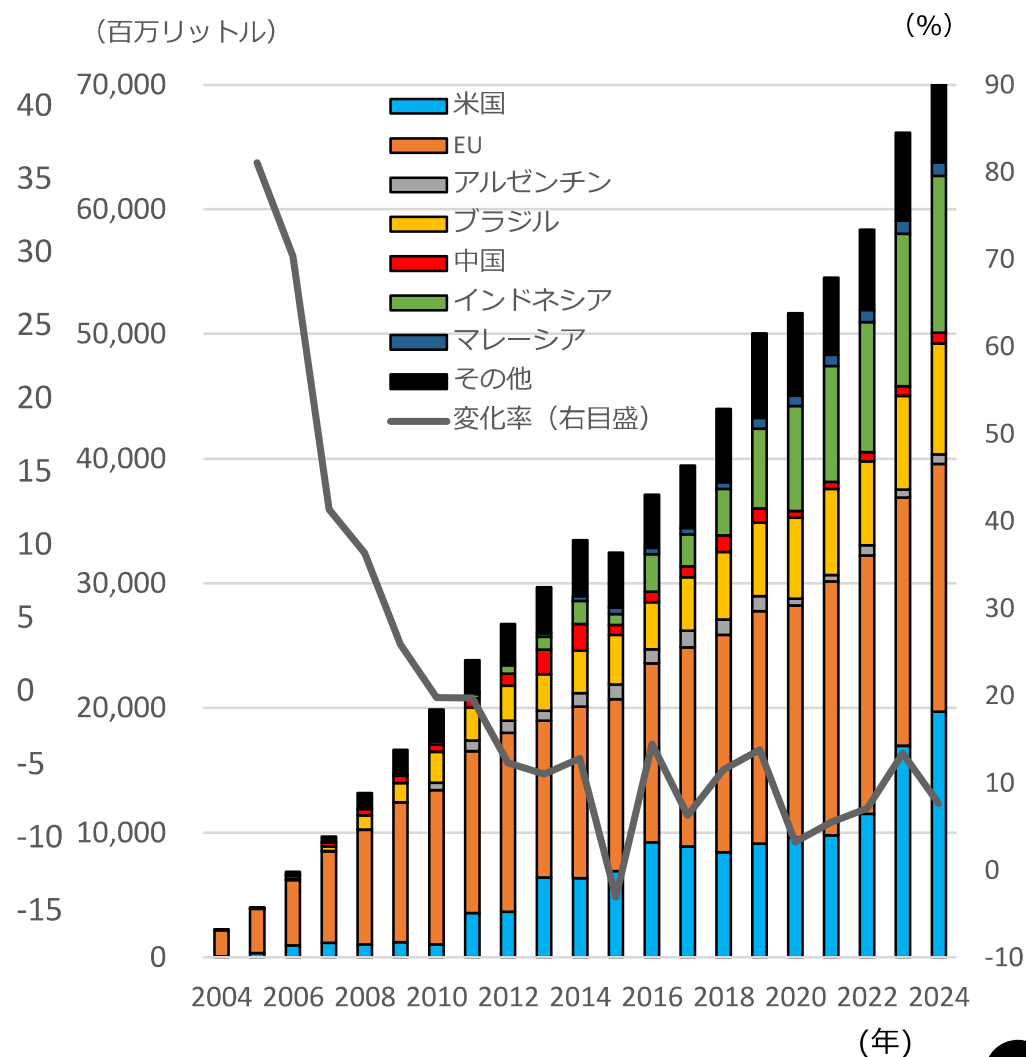
- 世界のバイオエタノール需要量は、COVID-19のパンデミックに対する各国の移動制限措置等の影響を受けて2020年は急減。2021年以降は輸送用燃料需要の回復等からバイオエタノール需要量は増加し、2024年にパンデミック以前の水準まで回復。
- バイオディーゼル需要量は、インドネシアを中心とする混合率上昇等の影響から2020年以降も増加。

① 世界のバイオエタノール需要量と増加率



資料：OECD-FAO Agricultural Outlook 2025-2034より作成

② 世界のバイオディーゼル需要量と増加率



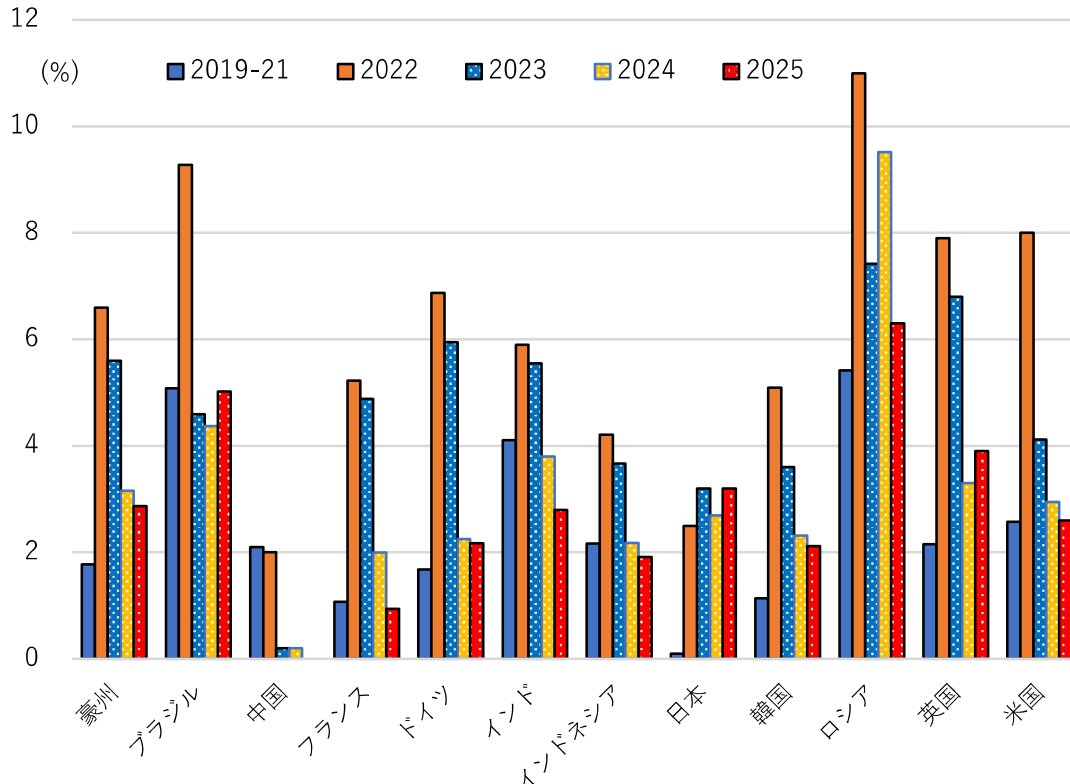
資料：OECD-FAO Agricultural Outlook 2025-2034より作成

## 20 さまざまな不確実性下における物価と海上輸送運賃の変動

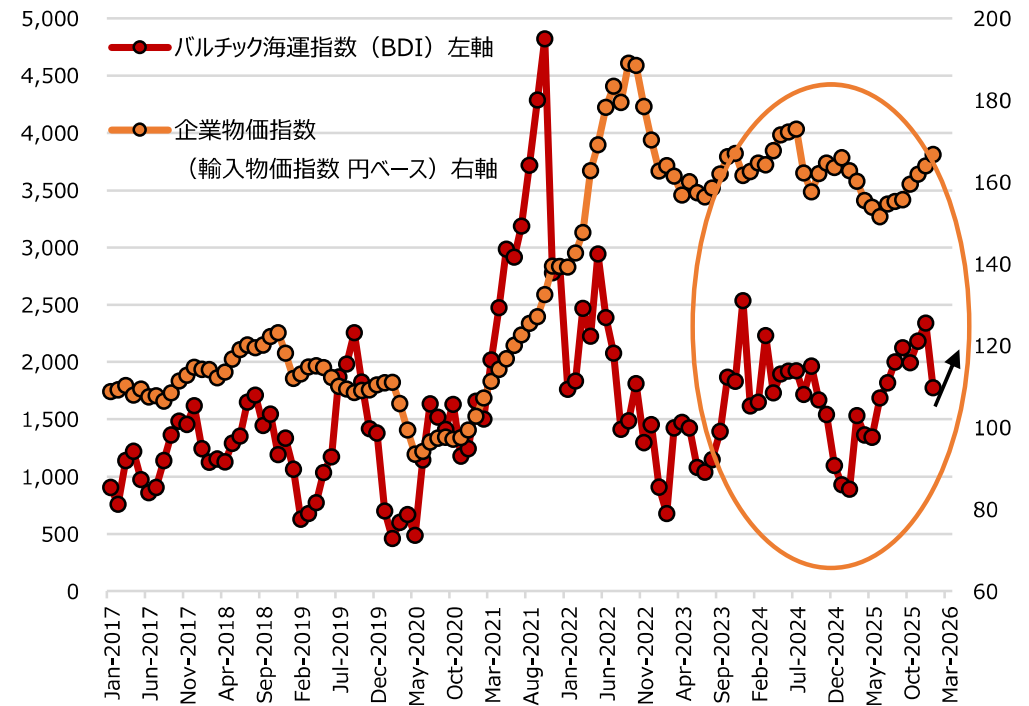
○ ウクライナ侵攻等の多方面への影響からエネルギーや資源・食料価格が上昇して、2022年は消費者物価数が多い国で急上昇した。イスラエル・ガザ衝突等の中東における紛争による影響も重なり2023年以降も、多くの国で物価が高止まりする傾向にあった。ただし、中国等の一部で経済減速が散見され、主要国・地域でも経済減速の懸念があり、物価を押し下げる動きがみられる。政策的な不確実性が高まる中、地域的なばらつきがある。

○ バルチック海運指数（BDI注）は、コロナ禍における世界的なサプライチェーンの混乱等から高騰したが2022年から落ち着きを取り戻したものの、ウクライナ侵攻やイスラエル・ガザの衝突等の混乱から紅海周辺の通航量が減り、パナマ運河の通航制限もあり、2023年後半から変動が大きくなっている。（注：鉄鉱石、石炭、穀物等の梱包されないドライ貨物を運ぶばら積み不定期船運賃に関する総合指標。）

① 消費者物価指数 (CPI, %)



② バルチック海運指数 (BDI)と日本の輸入物価指数



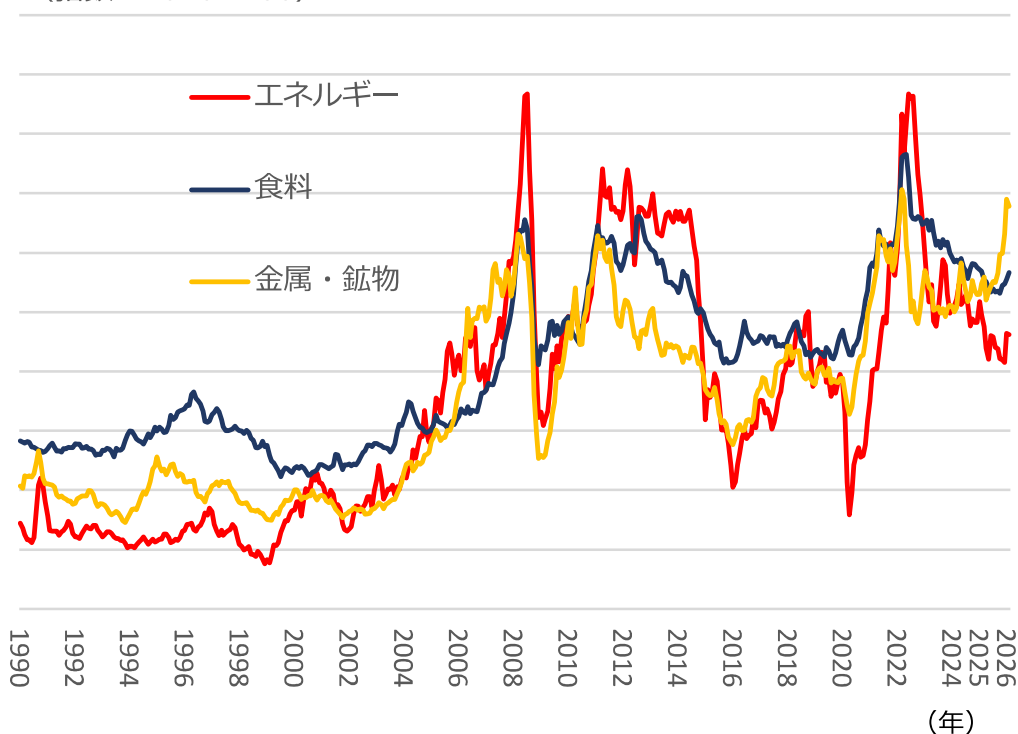


## 2.2 国際商品価格・FAO食料価格指数の推移

- エネルギー、食料、金属・鉱物の価格は、2021年以降、世界経済の回復基調とCOVID-19パンデミック禍の労働力不足やサプライチェーンの遅延、コンテナ船運賃の高騰等の影響もあり、堅調に推移。
- ウクライナ侵攻により、2022年3～6月にかけて国際商品価格はさらに上昇し、食料指数は2008年や2012年の価格高騰の水準を更新。2022年7月以降は下落し、前年同月の水準を下回るものの、パンデミック以前の水準を上回って推移。
- FAO食料価格指数の推移をみると、穀物等価格の上昇を受けて、2021年から上昇し、ウクライナ侵攻直後の2022年3月には160.2と過去最高値を記録。その後、下落し、侵攻発生前の水準に戻ったものの、パンデミック以前の水準を上回って推移。

### ① 国際商品価格の月次推移

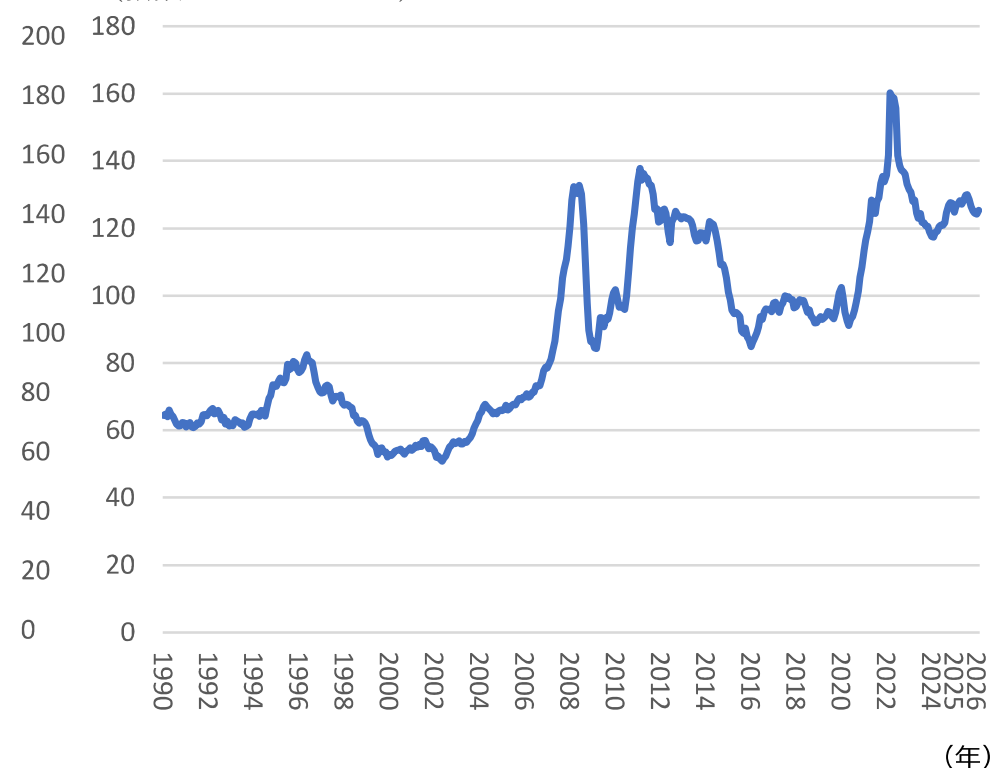
(指数：2010=100)



資料：World Bank Commodities Price Data (2026.3) より作成  
 注：食料は、穀物、植物油、肉類、砂糖、バナナ、オレンジ、エビ、フィッシュミールを含む。金属・鉱物は、鉄鉱石、銅、アルミニウム、すず、ニッケル、銅、亜鉛、鉛を含む。エネルギーは、原油、天然ガス、石炭を含む。

### ② FAO食料価格指数の推移

(指数：2014-2016=100)

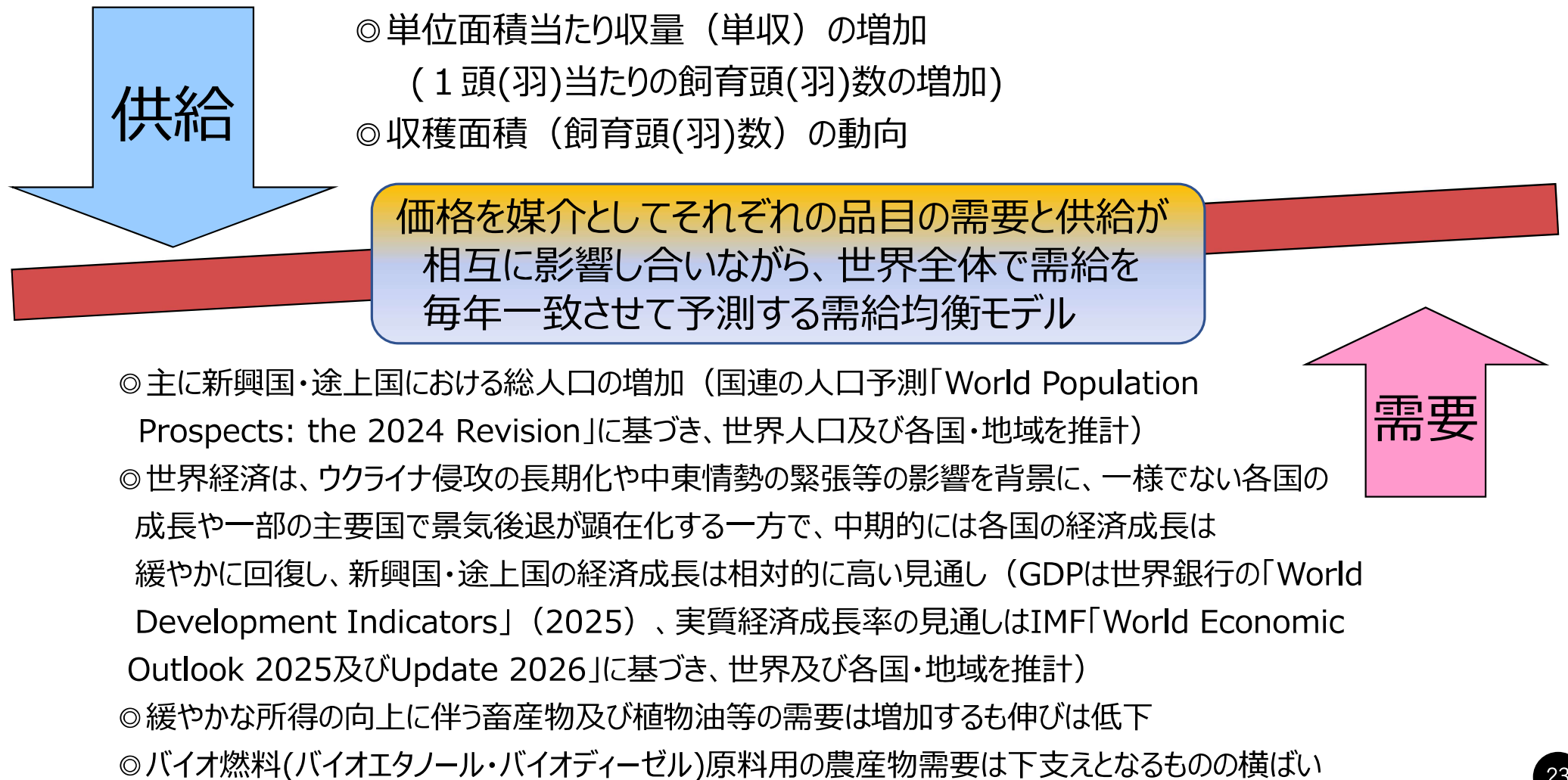


資料：FAO Food Price Index (2026.3)より作成  
 注：2014-2016年の穀類、植物油、乳製品、肉類、砂糖の平均価格を100として、同年の各輸出額に占める割合で加重平均した価格指数である。

## Ⅱ. 見通し編

### 1 世界食料需給モデルによる予測の目的及び前提

- 「世界食料需給モデル」による世界の食料供給と需要の予測は、農産物等の輸入国である立場から、独自の将来の食料需給を自然体で見通し、我が国における食料の安定供給に資することを目的としている。
- 予測は、収穫面積（延べ面積）の変動に特段の制約がなく、現行の単収の伸びが継続し、各国政策が現状を維持し、突発的紛争・天候等の不確実性を含まず平年並みの天候を前提。



## 2 2035年における世界の食料見通し－『食料需要の伸び鈍化の継続』－【概要】

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的流行やロシアによるウクライナ侵攻、中東情勢の緊張の高まり等の影響により、世界経済は大きな変動を経験し、不安定な状況が続いている。2020年代に入り、世界の農産物等の需給および価格は大きく変動した。

現在、各国の経済の回復は一様ではなく、ロシアによるウクライナ侵攻の長期化や中東情勢の衝突と緊張の高まり、主要国における政策の急な変更等の影響もあり、世界経済の先行きには不透明感がある。また、中国など一部の新興国では経済成長の減速がみられる。一方で中期的には、中国の人口減少や経済成長の低下が見込まれるものの、インドや東南アジア等の新興国・途上国では比較的高い経済成長が続くと見込まれる。今後、先進国・途上国ともに、経済成長率はCOVID-19以前よりやや低い水準で推移し、世界経済はこれまでより緩やかな成長となる見通しである。

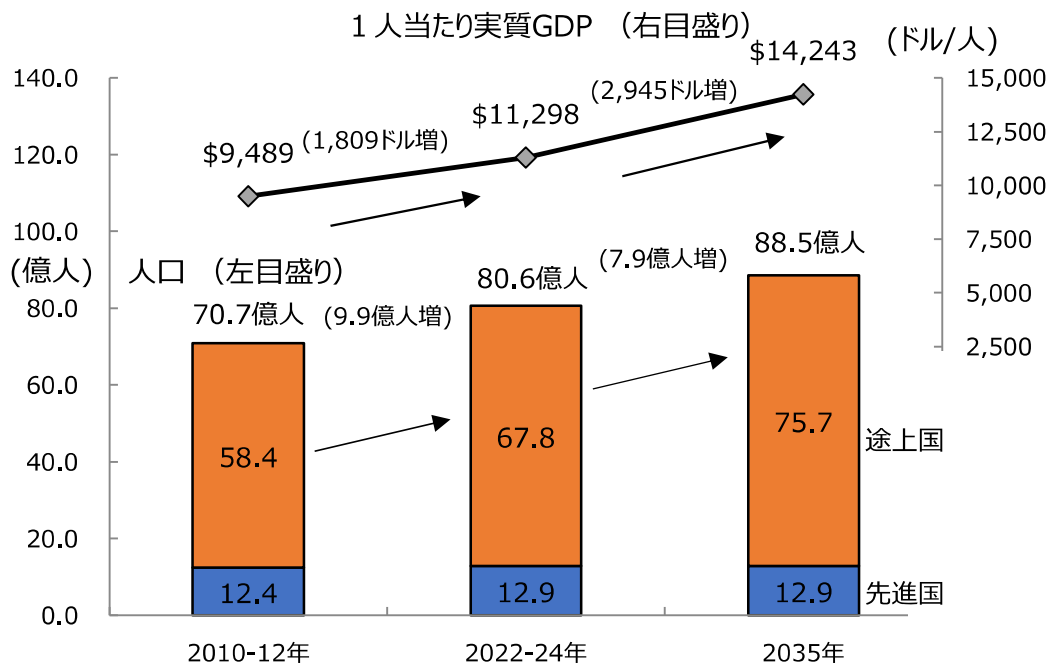
世界の穀物等の需給見通しについて、需要面では、サブサハラ・アフリカや南アジアなどで人口増加が続くことや、新興国・途上国を中心とした所得の向上により、食用・飼料用需要は今後も増加する見通しである。ただし、先進国だけでなく中国等の新興国・途上国でも経済成長の鈍化が見込まれることから、穀物等の需要の伸びはこれまでより緩やかになる。供給面では、穀物や油糧種子の収穫面積はわずかに減少する見込みであるが、農業技術の進歩等による生産性の向上によって、生産量は今後も増加する。

このため、穀物等の国際(実質)価格は、需要の伸びが鈍化する中で需要と供給の増加がほぼ拮抗するものの、穀物等の価格は長期的に弱含みで推移する見通しである。ただし、ウクライナ侵攻の長期化や中東情勢、各国の政策変更、貿易摩擦、世界的な物流の混乱やインフレ等の影響により、2026年以降、穀物等の価格が大きく変動する可能性があることに注意が必要である。

### 3 世界食料需給モデルの試算の前提に使用した総人口及びGDPの見通し

- 全世界の総人口は増えるものの伸び率が鈍化。人口が減少する国も散見される一方で、サブサハラ・アフリカ・中東・南アジア等を中心に、途上国で人口の増加は続く見通しである。
- 世界経済は、COVID-19パンデミック、ロシアによるウクライナ侵攻、中東情勢の緊張等によって成長が減速し、各国の経済成長は一様ではない状況となっている。一部の主要国では景気の下押し圧力が強まること懸念されている。一方で中期的には、世界経済はパンデミック以前より低い成長率となるものの、緩やかな成長が続く見通しである。また、一人当たりGDPの成長率も鈍化すると見込まれる。
- 各国・地域の経済は、ウクライナ侵攻の長期化や中東情勢の緊張、主要国の政策変更等の不確実性の影響を受け、国や地域によって経済成長に差がみられる見通しである。中期的には、中国では人口減少や経済成長の低下が見込まれる一方で、インドや東南アジア等の新興国・途上国では先進国より相対的に高い経済成長が続く見込みである。

#### ① 世界の総人口及び一人当たり実質GDPの推移



注：2024年まで実績値で、2025年以降は推計値及び予測値。  
一人当たり実質GDPは2015年基準。

#### ② 主要国の実質経済成長率の推移と見通し (単位：%)

	2010-2019年 平均	2020-2022年 平均*	2023年	2024年	2025年	2026-2035年 平均
中国	7.7	4.6	5.4	5.0	4.8	3.9
インド	6.6	3.8	9.2	6.5	6.6	6.4
日本	1.2	-0.2	1.2	0.1	1.1	0.6
ブラジル	1.4	1.5	3.2	3.4	2.4	2.3
ロシア	2.0	0.6	4.1	4.3	0.6	1.1
インドネシア	5.4	2.3	5.0	5.0	4.9	5.0
米国	2.4	2.2	2.9	2.8	2.0	2.0
EU	1.7	1.5	0.6	1.1	1.4	1.5

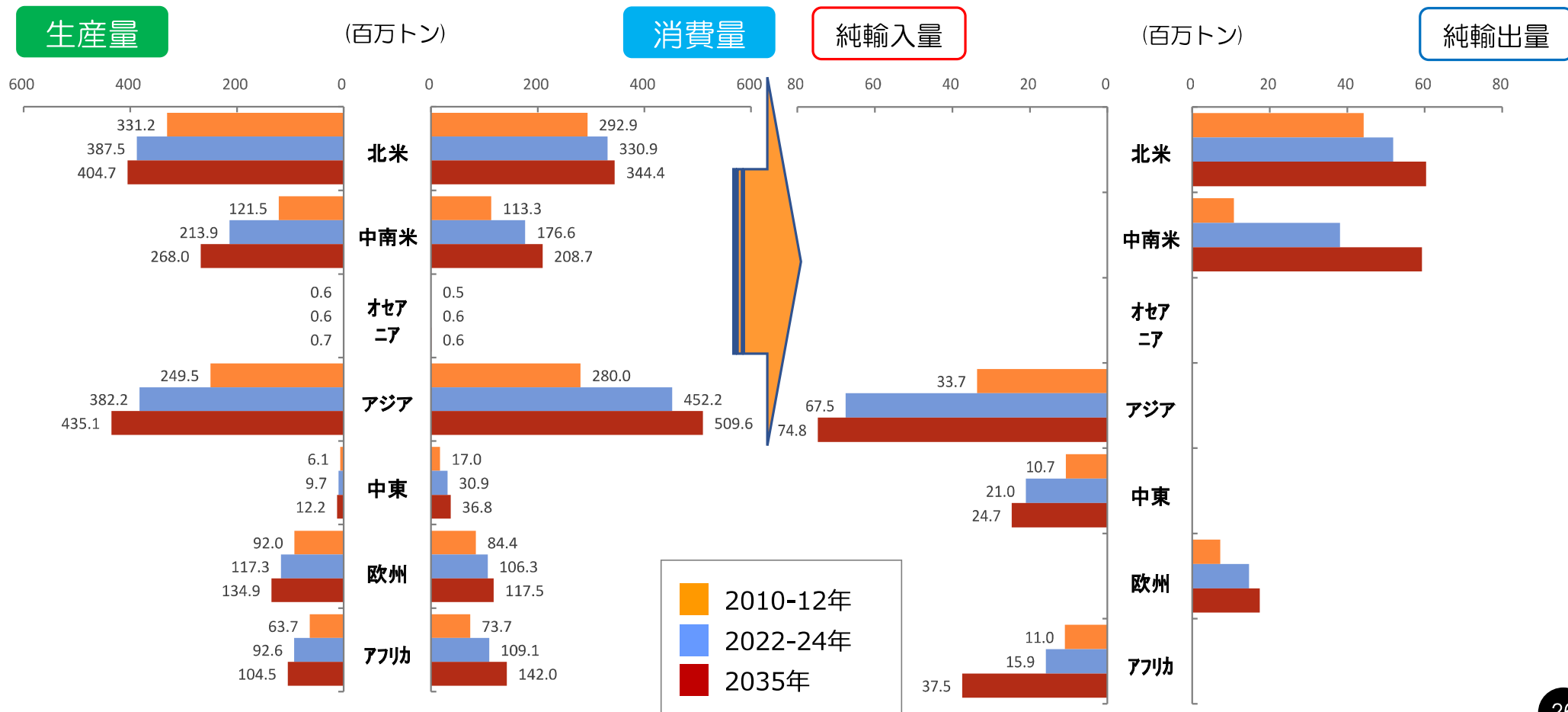
注：世界銀行「World Development Indicators」(2025)、  
国連「World Population Prospects : The 2024 Revision」(2024)、  
IMF「World Economic Outlook」(2025)及び  
「World Economic Outlook Update」(2026)の見通しから試算。  
(\*2020年のマイナス成長を含めた平均値)

## 4 地域別の需給見通し：ともろこし

- 世界の生産量及び消費量は、畜産物需要の増加に伴う飼料用需要の拡大を背景に増加する見通しである。ただし、多くの地域で需要の伸びはこれまでより鈍化する。一方で、生産量の伸び率は中南米、消費量の伸び率はアフリカで比較的高くなる見通しである。
- 世界全体で、総消費量に占める飼料用消費量の割合が64%程度まで上昇し、中南米、オセアニア、欧州では7割を超える。一方でアフリカは、食用等消費量が7割弱まで増える見通しで、人口の増加に伴ってその割合は徐々に上昇。世界経済の成長の鈍化を背景に、飼料用需要や食用需要の伸びは緩やかになる。（※中東情勢やウクライナ情勢による影響は不透明に）
- ともろこしの貿易は、アジア・中東・アフリカにおける純輸入量が増加する見込みで、北米・中南米を中心に純輸出量が増加することでまかなう見通し。純輸入量はアフリカの伸び率が、純輸出量は中南米の伸び率が、高い。
- 米国の純輸出量が増加するとともに、中南米ではブラジル・アルゼンチンが輸出の拡大を牽引して純輸出量が増加。ウクライナの純輸出量は侵攻前の水準に近づく見通し。

① ともろこしの地域別生産量及び消費量の見通し

② ともろこしの地域別貿易量(純輸出入量)の見通し

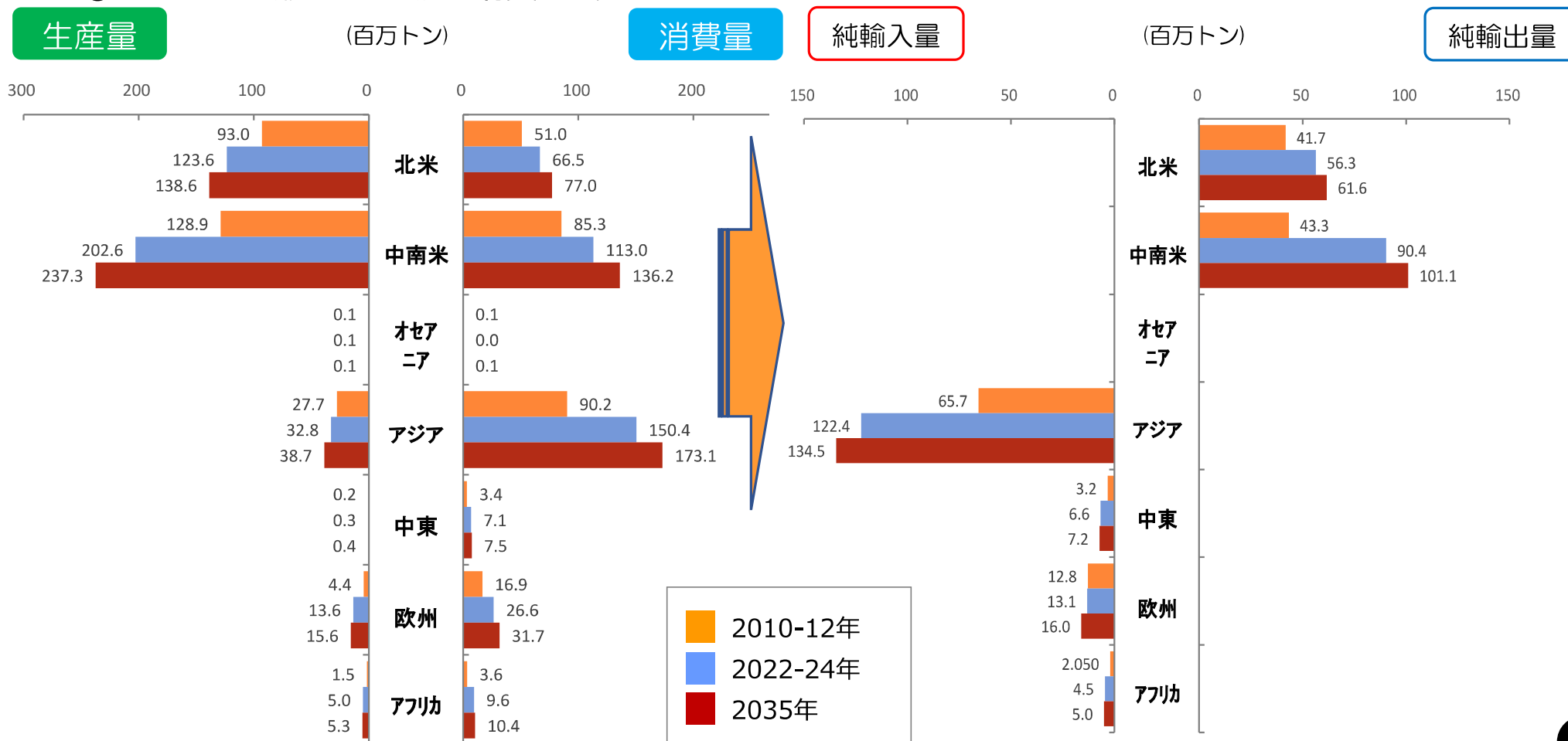


# 5 地域別の需給見通し：大豆

- 今後、中南米・北米を中心に生産量が拡大し、消費量は中国等のアジア諸国を中心に拡大し、欧州も増加する見通し。
- 大豆の純輸入量は今後もアジアが最大で、純輸出量は北米と中南米で増加。輸入量の伸び率は欧州が高く、輸出量の伸び率は北米が高い。（※中東情勢やウクライナ情勢による影響は不透明に）
- 大豆は搾油後に、主に食用の大豆油と飼料用の大豆ミール(粕)として消費される。
- 大豆油は、食用として中国、インド、バングラデシュ等のアジアで増加。特にインドの純輸入量が増加。大豆油の一部は、中南米・北米で大豆油等由来のバイオディーゼルとして輸送用燃料に混合して消費されて今後も需要を下支えする。大豆ミールの需要は、飼料用としてアジアだけでなく中南米や欧州でも増加する一方で、中南米は純輸出量も増加。
- 大豆の貿易市場は、中国・東南アジア諸国等のアジアにおける純輸入量の増加を、中南米・北米の純輸出量の増加でまかなう見通し。ブラジルが米国を超え1億トン超の純輸出量を継続する。ウクライナの純輸出量は侵攻前の水準には戻らない。

① 大豆の地域別生産量及び消費量の見通し

② 大豆の地域別貿易量(純輸出入量)の見通し



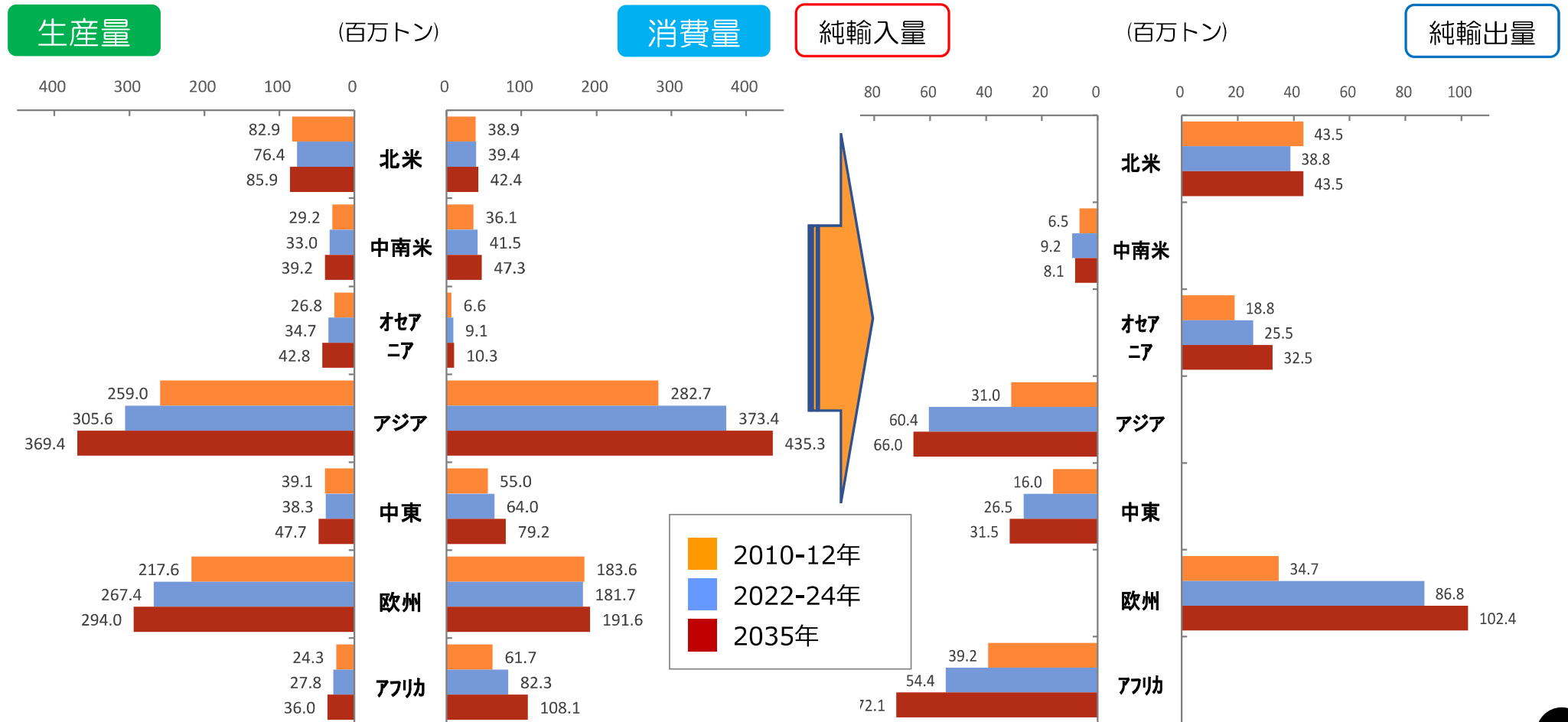
資料：2035年における世界の食料需給見通し

## 6 地域別の需給見通し：小麦

- 小麦は主に食用消費が増加するが飼料用も増えて、飼料用は世界の総消費量の2割程度を占める見通し。欧州では4割超が飼料用となる。アジアや中東・アフリカの消費量の増加は継続する。（※中東情勢やウクライナ情勢による影響は不透明に）
- 世界の消費量はアジアが5割弱で欧州が2割程度を占め、生産量はアジアが4割で欧州が3割超を占める見通し。
- 貿易市場では、ウクライナ侵攻前から台頭したロシアが純輸出量を増やし、世界一の輸出国を維持。米国等の伝統的な輸出国も純輸出量を増やす。ただし、輸出国として台頭したウクライナは侵攻前の純輸出量の水準には戻らない。東南アジア諸国は生産量が限定的であるため、小麦製品の消費拡大に伴い輸入量はさらに拡大する見通し。
- アフリカ、中東、アジアでは、相対的に少ない生産量の増加に対して消費量の増加が大きく、今後も純輸入量は増加。特に北アフリカを含めたアフリカの輸入量の伸びが大きい。また、純輸出量は伝統的な輸出国を含む欧州、北米、オセアニアで増加。ただし今後も、主要な産地(欧州や北米等)における高温乾燥等の減産リスクや不確実性に注視が必要。

① 小麦の地域別生産量及び消費量の見通し

② 小麦の地域別貿易量(純輸出入量)の見通し

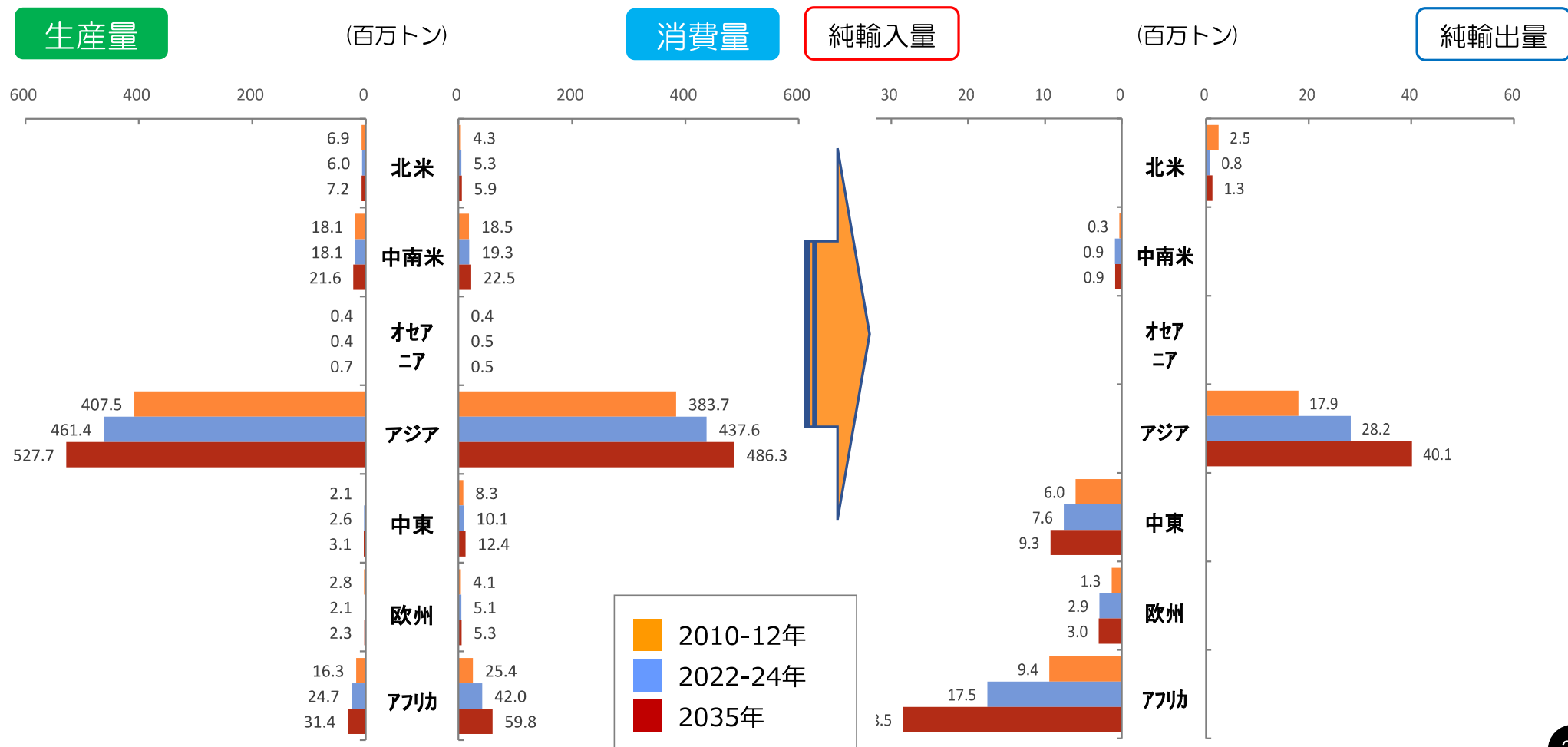


# 7 地域別の需給見通し：米

- 米はアジアが、世界の生産量の9割弱、消費量の8割超を占めて、アジア中心の品目として需給量は拡大する見通し。
- 米の消費量のほとんどが食用で、アフリカ・アジアの途上国を中心に総人口の増加によって消費量が今後も増加する。
- 消費量は、今後もアジアが最大の消費地域であるものの、相対的に高い人口の伸びが見込まれるアフリカ(特にサブサハラ・アフリカ)及び中東で増加する。アフリカの消費量の伸びが最も高い見通し。
- 純輸出量は、インドが拡大して世界一を継続し、次いでタイ、ベトナムでそれぞれ輸出量を増やす見込み。純輸入量は、消費量の増加を背景にアフリカや中東で増え、特にサブサハラ・アフリカ地域の増加が著しい。欧州の純輸入量は横ばい。また、上記輸出国に加えて新興のミャンマー、カンボジア等が台頭してアジアの純輸出量が増加。北米の純輸出量がやや増加する見通し。今後もアジアの輸出量の増加が、アフリカ・中東の輸入量の増加をまかなう見通し。

① 米の地域別生産量及び消費量の見通し

② 米の地域別貿易量(純輸出入量)の見通し



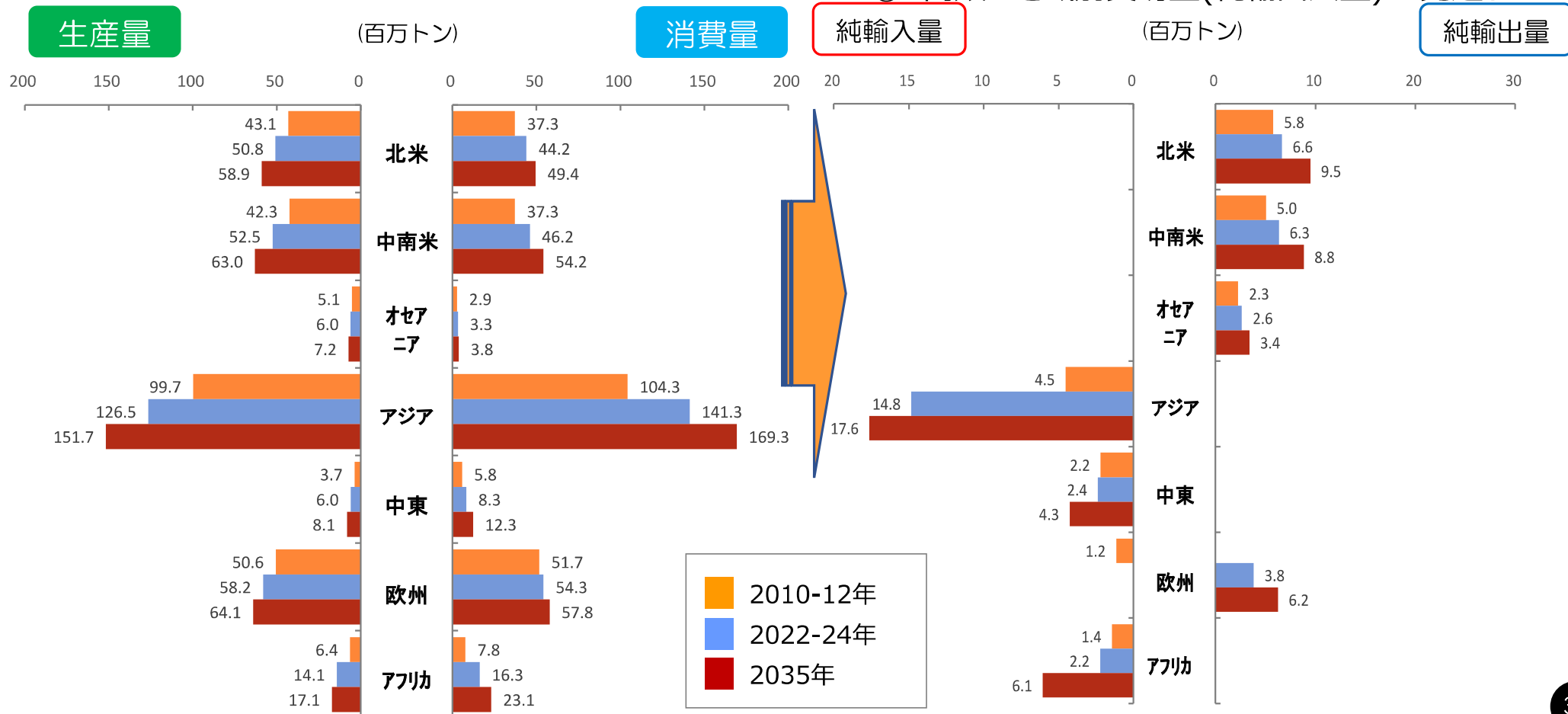
資料：2035年における世界の食料需給見通し

# 8 地域別の需給見通し：肉類

- 世界経済は、ウクライナ侵攻の長期化や中東情勢の緊張等を背景に、今後、経済成長が鈍化することが見込まれ、アジアにおいても所得の伸びの鈍化から肉類消費量の伸びも抑えられて鈍化する。
- 世界の生産量及び消費量は、健康志向や生産性の向上等により、鶏肉の伸びが肉類のうちで最も高く、増加量が最も大きい。次いで牛肉の伸びが高く、アジアの消費量が最も増える見通し。豚肉は、アジアが世界の6割超の消費量と6割弱の生産量を維持し、そのうち中国の人口減少と経済成長の低下の見込みから肉類のうちで消費量の伸びが最も鈍化する。
- 肉類の純輸入量は、アフリカ、アジア、中東で増加する見通しで、総人口の増加を背景にアフリカの純輸入量の伸びが最も高い。サブサハラ・アフリカは生産量の増加が限られるため純輸入量が増加する見通し。
- 肉類の貿易市場は、今後、所得向上に伴って需要量が増えるアジアを中心に純輸入量が増加し、中南米のブラジル・アルゼンチン、北米の米国、オセアニアの豪州等を中心とした純輸出量の増加によって補われる見通しである。中国の肉類需要量の伸びは鈍化する見通し。

① 肉類の地域別生産量及び消費量の見通し

② 肉類の地域別貿易量(純輸出入量)の見通し

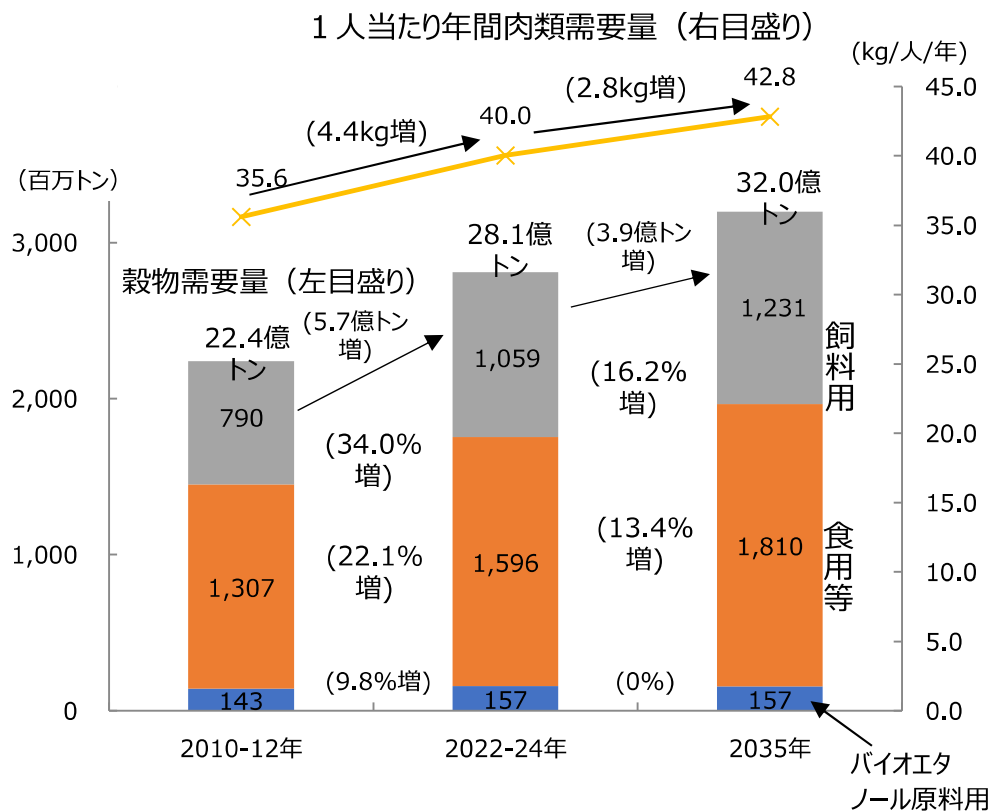


資料：2035年における世界の食料需給見通し

## 9 穀物の需給見通し：世界の穀物の消費・生産量の内訳

- 穀物の消費量について、世界経済は、COVID-19パンデミックやウクライナ侵攻の長期化、中東情勢の緊張等の不確実性を受けて、各国の経済回復は一様でなく下押し圧力を受ける国々が増える。中国の人口減少や経済成長の低下等の見込みがある一方で、今後、新興国及び途上国を中心に、先進国より相対的に高い所得向上や総人口の増加を背景に、肉類消費量の増加に伴う飼料用需要が増加することから、需要の伸びが鈍化しつつも、穀物の消費量は増加する見通し。
- 穀物の生産量について、すべての穀物の収穫面積がわずかに減少し（油糧種子もわずかに減少する）、また単収の伸びがこれまでに比べてわずかに鈍化するものの、生産量は主に単収の増加が寄与して拡大する見通し。

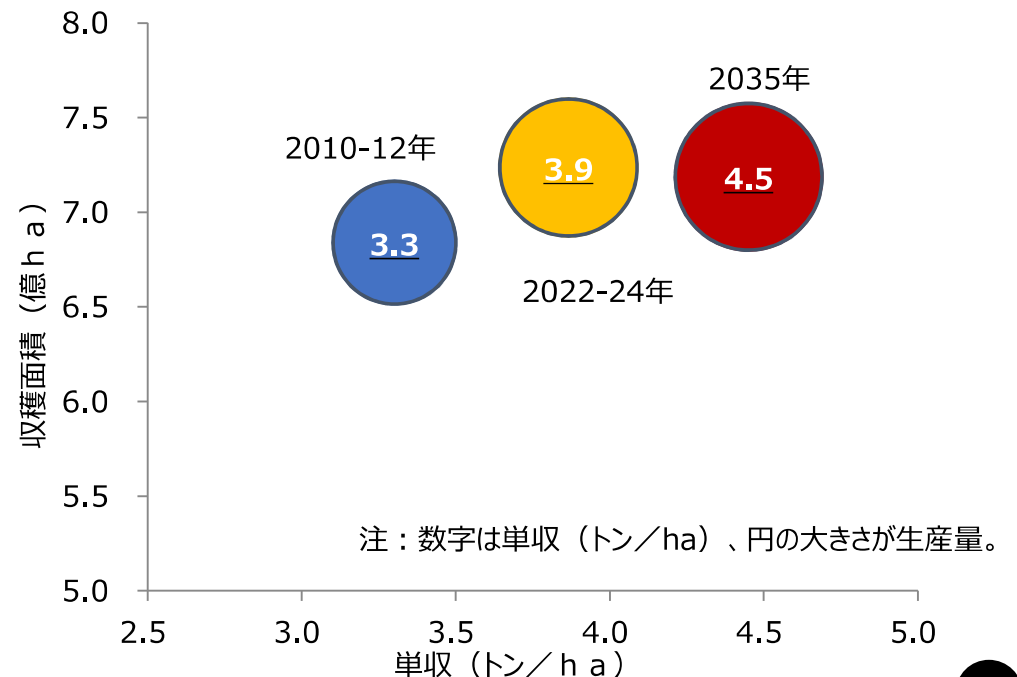
### ① 用途別穀物消費量と1人当たり年間肉類消費量（世界合計）



資料：2035年における世界の食料需給見通し

### ② 穀物の生産量、単収、収穫面積（世界合計）

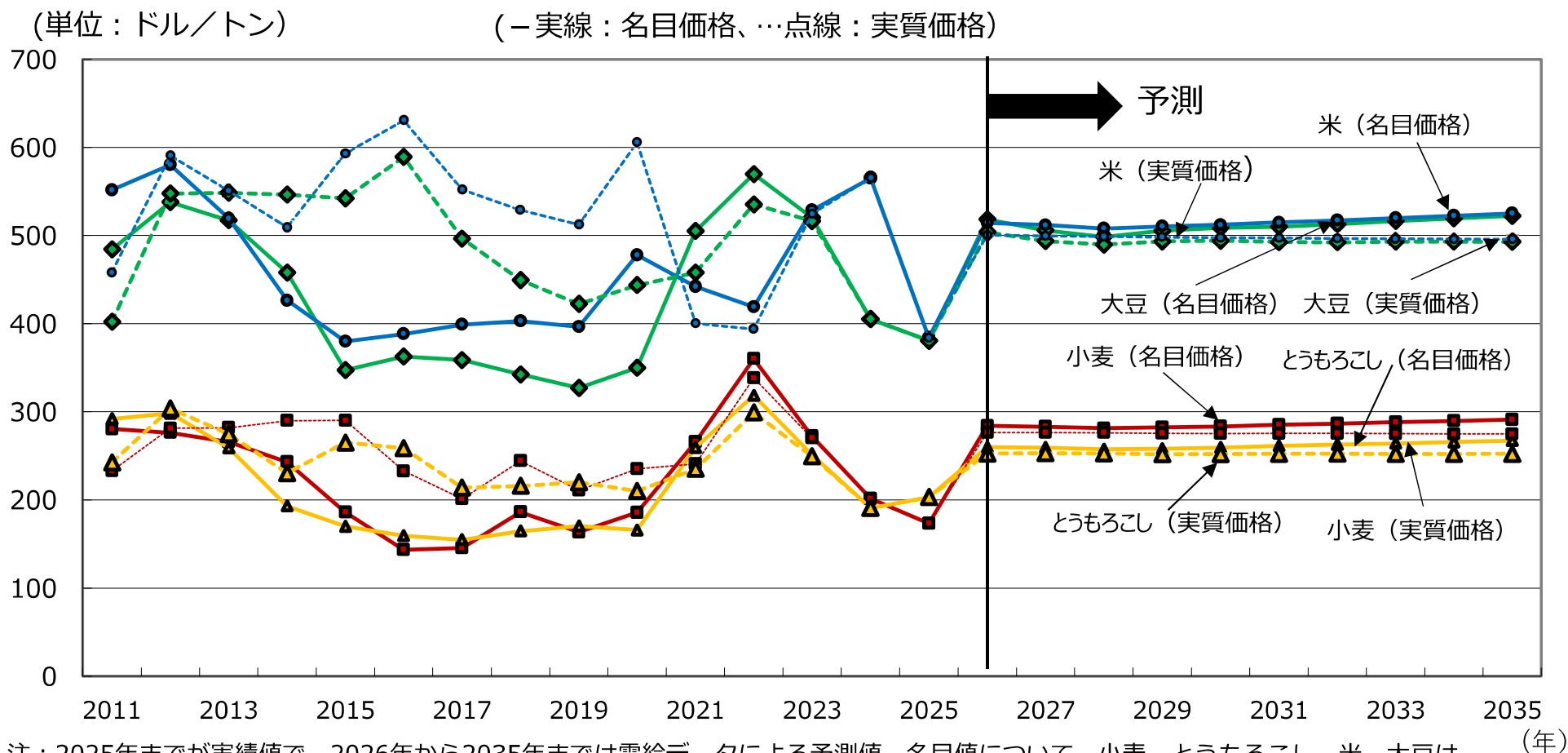
世界合計	2010-12年 (I)	2022-24年 (II)	2035年 (III)	増加率 (II)/(I)	増加率 (III)/(II)
収穫面積 (億ha)	6.8	7.2	7.2	5.8%	-0.7%
単収 (トン/ha)	3.3	3.9	4.5	17.1%	15.1%
生産量 (百万トン)	2,258	2,797	3,199	23.9%	14.3%



資料：2035年における世界の食料需給見通し

# 10 穀物・畜産物等の需給見通し：穀物及び大豆の国際価格見通し

- 穀物及び大豆の国際価格は、実質価格ベースで、ウクライナ侵攻の長期化や中東情勢の緊張、主要国の急な政策変更等による多方面への影響から下押し圧力となり、将来の経済成長の鈍化継続が見込まれ、食料需要の伸びが低下することにより、弱含む見通し。ただし、さまざまな不確実性によっては、2026年以降、穀物等価格が大きく変動する結果になることに注意が必要である。
- 全体の物価上昇率を勘案すると、穀物及び大豆の国際価格は名目価格ベースでわずかに上昇する見通し。  
(これら国際価格の推移に対して、日本国内の円貨ベースは円安傾向にあつて為替動向によって上昇のリスクもある)



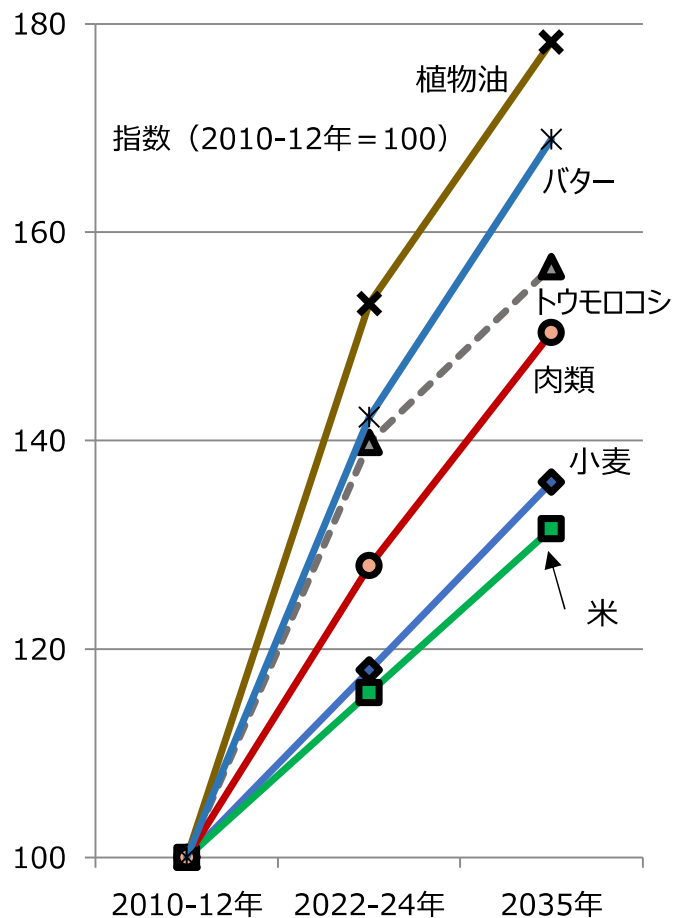
注：2025年までが実績値で、2026年から2035年までは需給データによる予測値。名目値について、小麦，とうもろこし，米，大豆は、工業材料価格指数（Industrial materials of commodity price index、IMFによるインフレーション指数の一つ）を基に算出。

資料：2035年における世界の食料需給見通し

# 1.1 穀物・畜産物等の需給見通し：世界における各品目の消費増加と食料価格

- 世界経済は、COVID-19パンデミックやウクライナ侵攻の長期化、中東情勢の緊張等の影響を受けて、回復は途上であり、ロジスティクスの混乱やインフレの高まり等のリスクもあり、今後の経済成長の減速も懸念される。中期的には、新興国・途上国を中心とした総人口の増加と所得向上等によって世界の食料需要は増加する見通しだが、中国の人口減少や経済成長の低下が見込まれるなどから、世界的に需要の伸びが鈍化する品目が増える。
- 穀物や油糧種子の実質価格はマイナスになる見通し。豚肉の実質価格がマイナスとなる一方で、肉類・植物油等の実質価格の伸びはプラスとなる。今後、これらの需要の伸びは鈍化する見通し。
- 各品目の実質価格の上昇・下落の変動は、食の嗜好の変化や加工度の違い等によって異なる。

① 主要品目の世界の総消費量の変化



② 各品目の実質価格の増減率に差異

(単位：ドル/t (耕種作物)、ドル/100kg (畜産物))

品目	基準年 (2022-24年) 価格	2035年 (目標年)	
		実質価格	増減率 (%)
小麦	278	275	-1.2
とうもろこし	253	252	-0.5
米	504	502	-0.6
その他穀物	176	175	-0.6
大豆	499	493	-1.1
植物油	1,312	1,369	4.4
牛肉	545	549	0.9
豚肉	190	188	-0.9
鶏肉	385	393	2.0
バター	547	619	13.3
脱脂粉乳	313	370	18.4
チーズ	461	475	3.0

資料：2035年における世界の食料需給見通し

## (参考 1) OECD-FAO、USDAにおける中期的な世界食料需給見通しの概要

- 中長期的な世界食料需給見通しに関しては、各機関が公表しているが、目的の違いにより、それぞれ輸出国の立場や加盟国の農業政策の影響への強い関心等が反映されている。
- 我が国の「世界食料需給モデル」では、国際機関や食料輸出国の予測だけに依存することなく、食料の輸入国の立場から分析を行うという視点に立ち、日本と同様に食料輸入国であるアジア各国の需給分析も強化して、我が国独自の将来の食料需給を自然体で見通し、世界の食料事情の変化に対応した食料戦略の検討等に活用されている。

機関名	公表資料名 (公表年月)	見通しの目的	見通しの概要
経済協力開発機構 (OECD) 及び 国連食糧農業機関 (FAO)	OECD-FAO Agricultural Outlook 2025- 2034 (2025年7月)	各国の農業政策が世界の農産物需給に与える影響について分析することを目的として中期的な世界食料需給見通しを実施	今後10年間、ほとんどの農作物の実質価格は現在の水準から下落する見込み。ただし、世界の農産物市場は様々な不確実性（農業・貿易政策の変更、異常気象の頻発、戦争の勃発、感染症・動物伝染病等）によって、見通し結果が変わる可能性。
米国農務省 (USDA)	USDA Agricultural Projections to 2034 (2025年2 月)	米国の農業政策コストを予測するとともに、米国の中期的農産物貿易動向を予測するために、米国農産物市場を中心に中期的な食料需給見通しを実施	今後10年間、ほとんどの農産物の実質価格は現在の水準から下落する見込み。世界の農産物市場において米国農業は、ブラジル、ロシア等の主要輸出国との競争が激化する見込み。

(注) 2026年2月に米国農務省が公表した見通しでは米国以外の世界食料需給見通し結果を公表せず。

## (参考2) 世界食料需給モデルの概要

### 1 対象品目 (合計20品目)

- ① 耕種作物 6 品目 (小麦、とうもろこし、米、その他穀物、大豆、その他油糧種子)
- ② 食肉・鶏卵 5 品目 (牛肉、豚肉、鶏肉、羊肉、鶏卵)
- ③ 耕種作物の加工品 4 品目 (大豆ミール、その他のオイルミール、大豆油、その他の植物油)
- ④ 生乳・乳製品 5 品目 (生乳、バター、脱脂粉乳、チーズ、全脂粉乳)

### 2 目標年次、基準年次、比較年次

- ① 目標年次：2035年 (現在から10年後)
- ② 基準年次：2022～2024年の3年平均
- ③ 比較年次：2010～2012年の3年平均

### 3 予測項目

品目別・地域別の消費量、生産量、純輸出入量及び品目別国際参照価格 (実質・名目)

### 4 対象範囲及び地域分類

- ① 対象範囲：世界全体 (全ての国)
- ② 地域分類：
  - i 予測に用いるデータの地域分類は、地理的基準により8地域区分に分類した。  
(小分類として31か国・地域に分類)
  - ii 品目毎の需給予測は、基本的にこの8地域区分により示した。  
なお、各種パラメータ等について精度を向上させたことから、この8地域区分に加え参考値として品目毎に主要な生産・消費国の需給予測の結果も併せて示した。

## (参考 2 : 続き) 世界食料需給モデルの国・地域分類

- 世界全体を対象範囲として、予測に用いるデータの地域分類は、  
地理的基準により 8 地域区分
- 小分類として 31 か国・地域
- モデルは世界全体としての食料需給の基調を予測するため、国別での予測は行わず、  
8 地域区分の予測値を示す
- 各品目の主要生産・消費国のみを参考値として追記

地域区分	小分類(国名・地域名)
北米	米国、カナダ
中南米	アルゼンチン、ブラジル、メキシコ、その他中南米
オセアニア	豪州、ニュージーランド
アジア	日本、中国、韓国、タイ、ベトナム、インドネシア、 マレーシア、フィリピン、インド、パキスタン、 バングラデシュ、台湾、 その他アジア（中央アジア含む）
中東	中東
欧州	EU（27か国）＋UK、ロシア、ウクライナ、 その他ヨーロッパ
アフリカ	南アフリカ共和国、ナイジェリア、北アフリカ、 その他アフリカ（サブサハラ・アフリカ）
その他世界	その他世界
合計	31か国・地域

## 【利用上の注意】

食料安全保障月報は、国際穀物需給に関し、在外公館からの情報、農林水産省が独自に各国の現地コンサルタント等を通じて入手した情報、公的機関(各国政府機関、FAO、IGC等)の公表資料、Oil World等民間の調査会社から購入した資料、その他、商社情報や新聞情報等から入手した情報を農林水産省の担当者において検証、整理、分析したものです。

- 食料安全保障月報で使用している統計数値は、主に米国農務省が2026年5月中旬までに発表した情報を引用しています(最新年度は2026/27年度です)。

さらに詳細なデータ等が必要な場合は、米国農務省のホームページを参照願います。

<https://www.usda.gov/about-usda/reports-and-data/agency-reports>

「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

<https://www.usda.gov/oce/commodity/wasde/>

「Grain:World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/grain-world-markets-and-trade>

「Oilseeds:World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/oilseeds-world-markets-and-trade>

「World Agricultural Production」

<https://www.fas.usda.gov/data/world-agricultural-production>

「PS&D」

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/advQuery>

- 本月報に記載のない情報は以下を参照願います。

(1) 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

・食料需給表:<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>

・食品の価格動向:<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>

・米に関するマンスリーレポート:<https://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

・食料需給見通し(農林水産政策研究所):<https://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

(2) 農林水産関係機関の情報(ALICの情報サイト):<https://www.alic.go.jp/>

ア 砂糖、でんぷん:<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>

イ 野菜:<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>

ウ 畜産物:<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

(3) その他海外の機関(英語及び各国語となります)

ア 国際機関

- ・国連食糧農業機関(FAO) : <https://www.fao.org/home/en>
- ・国際穀物理事会(IGC) : <https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・経済協力開発機構(OECD)(農業・水産業分野):  
<https://www.oecd.org/en/topics/agriculture-and-fisheries.html>
- ・農業市場情報システム(AMIS) : <http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関(代表的なものです)

- ・米国農務省(USDA) : <https://www.usda.gov/>
- ・ブラジル食料供給公社(CONAB) : <https://www.gov.br/conab/pt-br>
- ・カナダ農務農産食品省(AAFC) :  
<https://agriculture.canada.ca/en/sector/crops/reports-statistics>
- ・豪州農業資源経済科学局(ABARES) : <http://www.agriculture.gov.au/abares>

- データは予測値であり、毎月各種データの更新を受けて改訂されますので留意してください。
- 資料原典で表示されるブッシェル及びエーカー等の単位は、それぞれトン及びヘクタールに換算して記載しています。
- 資料原典において現地通貨で表示される金額を円換算するにあたっては、日本銀行国際局・財務大臣公示の基準外国為替相場及び裁定外国為替相場等の換算レートを用いています。
- 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。以下サイトの「Reference Data」を参照ください。  
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>
- 期末在庫率の対前年度増減率の欄は、前年度とのポイント差になります。なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合があります。
- 生産見通し等の予測は、各国際機関及び各国の農業機関によりそれぞれの分析手法に基づき行われるため、機関によってデータの相違がある場合があります。また、各国の農業機関の公表を受けて、国際機関の見通しが改訂される場合があります。
- ロシアが占領しているウクライナのクリミアの生産量については、米国農務省はウクライナとして集計しています。
- 本資料の引用等につきましては、出所(農林水産省発行「食料安全保障月報」)を併記願います。
- 本資料の電子版は下記アドレスでご覧になれます。  
農林水産省 食料安全保障月報  
[https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j\\_rep/index.html](https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j_rep/index.html)
- 本資料に関するご質問、ご意見等は、下記までお願いします。

連絡先 農林水産省大臣官房政策課食料安全保障室  
TEL:03-6744-2368(直通)

## 「食料安全保障月報」に関するアンケート

いつも食料安全保障月報（以下、「月報」）を御愛読いただきありがとうございます。  
今後のより良い月報の作成に生かすため、皆様の声を是非お聞かせください。

- 1 あなたの所属を教えてください。（選択式）  
商社、食品・飼料メーカー、食品卸・小売業、調査会社、自治体、大学・研究機関、大  
学生・高校生、その他
- 2 あなたの所属する会社・組織が所在する地域を教えてください。（選択式）  
北海道、東北、関東（東京以外）、東京、中部、近畿、中国、四国、九州・沖縄、海外  
その他
- 3 月報をどこで知りましたか。（選択式）  
口コミ、以前から（海外食料需給レポート時代から）、検索エンジン、農水省 HP、  
書籍、その他
- 4 月報を書籍で知った場合、その書名が分かれば教えてください。
- 5 月報で一番関心／参考にしている項目は何ですか。（複数選択可）  
概要編（今月の主な動き（穀物等の国際価格の動向）、今月の注目情報、今月のコラム、  
その他）  
品目別需給編（小麦、とうもろこし、コメ、油糧種子（大豆））  
特別分析トピック
- 6 今後重点的に取り上げてほしいテーマは何ですか。（自由記載）  
テーマ例：世界的な異常気象（干ばつ、洪水など）の穀物生産への影響  
地域別の穀物需給動向（米国、南米、豪州、東南アジア等）  
ウクライナ情勢の生産・貿易への影響  
中国の需要・輸入動向  
世界的な人口増加による食料需要・貿易への影響  
中長期（10年先）、超長期（30年先）的な食料需給見通し
- 7 今後月報に期待することはありますか。（自由記載）

ご回答は以下 URL または右の QR コードよりアクセス願います。

[https://www.contactus.maff.go.jp/j/form/kanbo/anpo/anpo\\_geppou\\_ankeeto.html](https://www.contactus.maff.go.jp/j/form/kanbo/anpo/anpo_geppou_ankeeto.html)

